〇二二四　大重平六覚書写（冊子）

（表紙）

大重平六覺書写

一慶長二年二月、帖佐被成御打立、高麗江御渡海被成、大重平六十四才ニて御供仕候、親大重大蔵事ハ自力ニ而御供被仕候事、

一高麗赤國之内泗川与申所ニ御城取被遊候、泗川より五里奥ニ晋州与申所ニ、江南人二十萬餘陣取罷居候事、

一泗川より壱里奥ニ、古くわん与申所ニ此方之人数二三百程被召置候処ニ、晋州より江南衆慶長三年九月廿七日ニ懸申、こくわんの人数餘多打死被申候、残人数泗川之城ニ追入被成口迄（田御城口迄江南人餘多）▒人数多参候、

義弘様御下知被遊候ハ、今日壱人も城より罷出間敷、鉄炮壱ツ茂打申間敷与御下知被遊候、左候而江南衆も晋州之様ニ引申候事、

一慶長三年九月廿八日、晋州より黒房与申者使者ニ参候、昨日ハ若者共致氣任、御方之人数過分ニ損シ申候由之事、

一同年拾月朔日ニ、如泗川之人数寄セ可申間、御用意可被成通申來候事、

一同日ニ、江南人数弐拾萬餘、泗川御城ニ押寄申候、もうらや・とんろうや・ういひん大將ニ而、和泉殿古之陣所ニ罷居候、左候而御城左右江押寄申候、其時義弘様御下知被遊候、御城外廻ヲ二返御廻被成候而、今日鉄炮一ツ茂打申間敷と御下知被遊候事、

一大手之屋倉江、　御両殿様其外餘多御上被成、寄來ル敵ヲ御覧被成候得者、城元江参候人数いか程共不相知

候、籠門之南之屋倉より鉄炮壱筒打被申候事、
一大勢之中ニゑんしうニ火入候而、何之色も不見得候、御城より切出被成、敵茂崩申候、泗川河ヲ逃渡り、大将ニ切掛候時、大将差こたへ候、此方之人数足〻ニ罷成候処ニ、嶋津圖書頭殿・伊十院抱拙御こたへ被成、其時　又八郎様より御使御座候得共、御意趣も不被聞召候而、河上掃部助ヲ以、只今之御使如何様成御意趣ニ而御座候哉、可承候御意趣ハ、敵も大勢ニ而大将差こたへ、此方之人数も足〻ニ罷成候が、如何御座可有候哉与　御意ニ而候事、
一菱刈源兵衛江御意被成候ハ、西之塩入之敵大勢ハ横入之躰ニ見得候、いかゝ可有之候哉与被仰候、源兵衛被申候ハ、如御意御座候、日本軍ニ而候得者横入可仕候、乍去大國之人於不存者横入仕間敷候、併大将も頓而崩可申与被申上候、然処圖書殿・抱拙何も働被成候、則切崩被成候、其より万〻追打被成候事、
一古くわんの前川御座候、其河石橋ニ而候、大勢其河ニ崩入候、其川ヲ間ニ置、こたへたゝかい申候、其時本田右馬允手ヲおひ被申候処ニ、川上四郎兵衛・同名久右衛門兄弟之手勢ニ而切崩被申候、それよりたまらす崩申候事、
一晋州坂与申坂有、其坂之平中程より西方へ逃行敵、又八郎様御馬ヲ懸付、御馬之上より弓ニ而射落シ被成、則御馬之上ヨリ御腰物ぬき御打被遊候、　義弘様坂之下より御覧被成、儘茂御仕合早キと御褒美ニ而候事、
一其日　義弘様御討被成候敵三人、
一又八郎様御打被遊候敵七人、それより御城之ことく御帰宅被成候、城近所ニ平原御座候、其原ニ而　義弘様御軍評被遊候、　又八郎様御討被成候首弐ツ、
義弘様御打被成候首壱ツ、合三ツ御軍評被遊候、
又八郎様東向ニしやうぎニ御腰ヲ御懸被成候、其時川上四郎兵衛被申上候ハ、士之左扇子とは今日之事ニ而御座候間、必おつかひ可被遊通被申上候、御腰より御取被成、御つかひ被成候事、
一義弘様より菱刈源兵衛江御意被成、今朝塩入之敵様子御尋被成候、横入ハ仕間敷通申上候、如何見及も有之

かと御意被遊候、源兵衛申上候ハ、如御意大勢こたへ申候而茂、足々のもの崩懸申候得ハ、こたへぬものと承候由申上候、源兵衛ハ功者と御意被成、頓而御城へ引入被成候事、

一同日、帖佐士瀬戸口弥七戦死仕候事、

一同日、稲荷敵陣へ走入被成、半弓之矢餘多當候而死申候、御城之北之方之岡ニ取置せ被成候事、

一拾月二日より城中之人数へ被仰付、切捨之首二三つ程御取せ被成候、大形大手之口ニ集首三万八千七百餘と承候、其外取捨之首ハ数不知候、頓而大手之口ニ首塚十五間方ニ御つかせ被成候得共、たまらす候而、又廿間方ニ取置候、左候而塚之上ニ松植置申候事、

一其以後江南之方より御無事之様子被申上、御無事ニ罷成候而、人質もうろう屋弟うひひんと申唐人ヲ質ニ被差上候事、

一慶長三年霜月十五日ニ泗川ヲ御出船被遊候而、ちやくせん嶋ニ御懸被成候而、三日御滞留被成候事、

一小西摂津守殿城しゆそんと申所ニ御座候、番船取巻候故、除方不罷成候ニ付、此方より番船ヲ御切崩被成候而、小西殿ヲくりのそき被成候而、霜月十八日ニ番船ニ御懸被成候、御仕合悪敷、此方之人数餘多戦死申候事、

一義弘様御馬印敵船よりうはい取申候ヲ、御供船よりかこしま衆黒田宅右衛門与申人敵船ニ切乗、御馬之印ヲ取返シ被差上候、其時上下共ニ無比類褒美申候事、

一霜月十八日之夜、唐嶋之様御除被成候、十九日之朝唐島之小瀬戸ニ御懸り被成候事、

一椛山権左衛門・同名太郎三郎舟、其外乗衆餘多人数ちやくせん鳴ニ追上申候、舟ハ敵より引懸申ニ付、其人数除方不罷成候処、小舟壱艘見出シ、其舟ニ乗、十九日之九ツ時分ニ漸ク　御両殿様之御前ニ何れも参候事、

一霜月廿日之朝、唐嶋ヲ御出船被成、對馬へ御渡被成候、其より壱岐之嶋へ御渡被成、薩摩軍衆ハ御暇給候而、薩摩之様ニ被罷下候事、

一殿様・御両殿様ハ直ニ京都之様御上洛極候、平六ハ直ニ御供仕候事、

一同年十二月廿九日ニ伏見ニ被成御着、御在京中大重平六御奉公仕候事、

一江南人質京都江御同心被成候、其後頓而御暇給、薩摩之様ニ罷下り、則如江南之送り返シ被成候、坊之津船頭鳥原喜右衛門と申人江被仰付、江南ニ送届申候事、

一右高麗御打勝被遊、為御忠節薩州之内御蔵入給人分有次第、大隅之内壱万石、其上　義弘様江御腰物正宗　忠恒様江御腰物長光　御拝領被成候、其上　忠恒様少将之御位ニ御付被成候事、

一慶長三年九月廿八日ニ、御腰物・脇差、上床藤右衛門御使ニ而、大重平六江拝領申候、

一同年十月四日ニ、腰物助定　大山三次御使ニ而、平六へ拝領申候事、

一慶長五年、石田治部少輔殿野心起、西大名からくり廻、其後　嶋津殿御同心之由被申候得共、　家康様別而被仰合候条、御同心罷成間敷通御意被成候、其より伏見御城御番衆松平主殿助殿・鳥居彦右衛門殿江石田治部少輔殿より被仰候ハ、右之衆御同前ニ可罷成之由承候へ共、成間敷通御返事被遊候、平地ニ而御味方ハ罷成間敷候間、御城御籠可被成候由被仰候、然共城主取衆より嶋津殿ヲ城へ入申事成間敷□(候カ)通被仰候ニ付、於其後ハ平地ニ而御味方ハ罷成間敷候、不及是非、御替可被成与御意ニ付而、井尻弥五介へ被仰付、江戸へ右之通御状ヲ以被申上候処、　家康様御返事御状持参申罷登ニ、近江之水口ニ而とかめられ、御状ヲ捨、御判書取留候処、頓而籠者仕候得共、色々ニ申分、籠より出申候而伏見へ参候事、

一慶長五年七月十九日ニ伏見御城へ矢入御座候、伏見之御城も無程同年八月朔日ニ落申候、其より頓而美濃之様御下被成候而、大かきより壱里奥須之俣と申所ニ御陣所御取被成候、其間ニ大河あり、ろくのわたりと申而船渡り、其渡瀬ニ石田殿・小西殿大垣之城より御出合被成、　惟新様江御相談御座候処、　内府方之衆美濃國木ふの城ヲ詰落シ、石田殿人衆梅野と申所ニ而三百人程討取、直ニ其人数ろくの渡りニ押寄候、此方之人数ハ須之俣へ皆々召置候、御供衆入來院又六殿・川

上久右衞門・新納弥太右衞門・喜入摂津守、其外十人計ニ而御座候、其時石田殿被仰候ハ、稠御座候程ニ、先々御除可被成之通被仰候へ共、人数ヲ須之俣へ召置候、彼人数壱人も不残くり除不申候ハヽ、我等除事罷成間敷通御意被成候、然共石田殿未練被成候而、大垣之ことく被為引候、新納弥太右衞門・川上久右衞門、治部少輔殿馬ノロヲ取　兵庫頭殿爰許ニ相はまられ候、未練被成間敷由被申候得共、馬引立大垣之様ニ逃籠被成候、然処ニ木脇久作馬ニ乗、長刀ヲ持、ろくの渡り懸入、薩摩今弁慶と名乗懸渡ッ、御前へ被参候、御意之通久作馬ヲ乗入参ヲ御覧被成、千騎之きをひと御意被成候、其より須之俣人数も不残除取候而、大垣之城ニ御籠被成候、其晩赤坂へ　家康公之御陳被成候、

惟新様も大垣へ数日御滞留被遊候、

慶長五年九月十四日之晩六ッ下りニ大かきヲ御出被成、関ヶ原之様御打立、其夜雨ふる、左候而夜の七ッ時分ニ関ヶ原江御着被成候、取合之賦、一番鑓石田殿、二番鑓中書殿、三番鑓備前中納言殿、其詰ニ　惟新様ニ而有之候、其外大名衆方々ニ陣取被成候、石田殿一時もこたえす候而、中書殿ちと御かたへ被成候、　惟新様未御鎧茂不被召候、こぐちハ如何様ニ有之御支度可被成通御意ニ而候、最早能時分ニ而候、御鎧可被召之由ニ而御支度被遊候、取合せ曽木五兵衞被上召せ候、平六も御道具取合召遣申候、左候へハ筑前中納言殿腹返り被成候、大谷刑部少輔殿へ被懸合候、大谷殿着こたへまくり被返候、又中納言殿こみかゑされ候而、大谷こたへす崩られ候、備前中納言殿陣所　惟新様御陣間ニ池有、中納言殿人数皆々池ニ逃入、此方之陣場ニ乱入、方々ニ罷成候、其場之御談合ニハ何方ニ御懸可被成候哉与御相談ニ而候時、先々筑前中納言殿へ切懸可被成之御談合ニ而、御懸被成候へ共、相替大将末勢之方ニ御懸被成、切御通被成候て、大垣之城ニ御籠可有之候、若不罷成候ハヽ、御はまり可被成与御意候、則末勢申を切御通被成候、其時白濱七介船歌ヲあけ、皆々うたひ申候へハ、　殿様御後立ニ而、其より大垣の見ゆる迄御除被成、御覧候得ハ、大かきニ火ヲ掛焼

立申候間、城へ御入被成候事不罷成候而、成次第ニ御除可被成与御座候、伊勢地ヲ心着御除被成候、然共晩之六ツ下りニ成候、駒野之坂ニ打向御除候、御意被成候ハ、何も御供之者具足ヲぬき捨申せと御意ニ而候得共、何も抜キ不申候、頓而駒野之登下ニ御上り候時分ハ、夜ノ四ツ時ニ而候、又其時、御意之通皆々具足ヲぬき捨申せと被仰候得共、無其儀候、御鎧御抜被成、先々御捨可被成通御意ニ而候、其時横山久内御側ニ罷在申被上候ハ、大事成御鎧此野原ニ捨申事罷成間敷候、久内へ被下候へ、御鎧諸共ニ着申へく候、若着届申候ハ、御奉公可罷成候、又着届不申候ハ、御鎧諸共ニ相果可申候由被申上候ニ付、則久内へ被下候、着被申候、其より伊勢・近江・伊賀御通之刻、跡先ヲ取きり稠候へ共、御通被成候、伊賀之内しがらきと申所ニ一宿被遊候、其夜御供之衆談合被申候ハ、　兵庫頭様与相知通間敷候由申候ハ、、如何可有之哉と相談御座候処、本田源右衛門被申候ハ、吾等首ヲ指上可申候間、各首ヲ御取被成、　惟新ト号シ而着出、其場ヲ御通可被成候、左候而則源右衛門入道被申候、然共御通被遊時分、取籠事無御座候ニ付、皆々御通被成候、其より大和・河内・和泉ヲ御通被成、和泉之内平野と申所ニ御出候、平野より境之住吉ハ壱里、其ニたなへやの道与と申て、別而御目掛之人罷居候、其ニ平野より先壱人忍て御遣被成候、是迄御出被成候通御意被成候、其間ニ御供之衆矢野休次ヲ以御意被成候ハ、何れも御供之衆餘多召烈、御忍被成事難成思召候条、皆々御暇可給候、大坂之様ニ可被参候由御意ニ而候、其時御供之衆御返事被申上候ハ、只今御暇給、御側はなれ申候而ハ、後二度懸御目ニ事御座有間敷候、御暇被下候て、只今爰ニ而腹可仕与被申上、又御意被成候ハ、大坂へ鹿児嶋之御前様・宰相殿も御座候条、為御奉公何れも参候へ、又我身ノ上茂三日中ニ兎角可相知候、成果ヲ承、其時ハ今之分別次第たるへく候と御意被成候、何も御奉公と御意ニ而候条、先々任御意、大坂之様ニ可参と御返事被申上候、然処住吉より道与、女乗物ヲ持せ御迎ニ被参候、其乗物ニ召、住吉之様御忍被成候、

御内之者ニハ大重平六壱人、道与腰かき三人ニ而住吉ニ御入被成候、左候而御跡より夜八時分ニ壱人宛被参候、先伊勢平左衛門・白濱七介・曽木五郎兵衛・矢野休次・白坂与作・本田与兵衛、此衆御跡より忍被参候、又住吉ニ御忍被成事難成、境之様ニ御忍被成候、乗物かき無之候而、白濱七介・矢野久次御腰廻被申候、道与案内者ニ而塩屋之孫右衛門与申者所ニ一宿被成候、彼孫右衛門と申物連々御目懸之者ニ而候得共、　殿様とハ不存候、伊勢平左衛門と申候而御入被成候、御舟之約束住吉江廻せ候へと、御船頭東太郎左衛門ニ約束被申候処ニ、思之外ニ壱里奥境之浦ニ御除被成候、舟之約束相違仕候而、如何可有之候哉と御座候処、塩屋之孫右衛門屋敷之浦江御舟参候、先何方之船とも不知、平六参候而尋而可罷出之由候間、能尋申候得ハ、薩摩舟とこたへ候、近参候へハ御座船ニ而候、太郎左衛門申候ハ、是ハ住吉ニ而有之哉と申候、いや境之浦ニて▨(候カ)先々太郎左衛門舟江召置、則御前へ罷出、御船と申上候、御供衆皆々目出度御仕合と被申上、則御宿を御立被成候、御船ハ夜七ツ時分ニ参候間、御乗被成候而、でんぶう口之様被成御座候、左候得者御前様之御船茂壱度ニ河口へ御出被成候而、天か崎・西之宮間ニ而、惟新様御座舟ニ　宰相様・鹿児嶋　御前様も召移被成候、廣瀬源介・赤塚源太左衛門御供ニ而御船ニ乗被申候、然處豊後之浦ニて、　宰相様御座舟・鹿児嶋御臺所舟・帖佐御臺所舟三艘、黒田甲斐守殿兵船参候而懸取候、御座舟之乗衆伊集院左京・比志嶋源右衛門・有川助兵衛戦死ニ而候、其外餘多戦死御座候、帖佐御臺所舟主取大重次郎左衛門戦死、其外餘多有之候、鹿児島御臺所舟主取宅間与左衛門戦死、其外餘多御座候、惟新様細嶋へ御着被遊候、佐土原へ御立寄被成候而、八代江御一宿ニ而、其より大窪御一宿ニ而、富之隈へ御寄被成、頓而御船ニて慶長五年拾月三日ニ帖佐へ御着被遊候事、

一惟新様御鎧、横山久内大坂迄着届被申候、其後京都愛宕へ御祈神ニ而候事、

一御馬但青毛、名紫と申候、境之住吉大明神御祈神被成

候事、

一慶長五年七月十九日ニ、伏見御城へ矢入御座候、其日御帷子曽木五兵衛ヲ以大重平六へ拝領申候事、

右覚書壱冊、前方致所持、御記録所江茂差出、御用相済被召返候処、致紛失候ニ付而、又〻此節写置者也、

享保十年乙巳十一月日

（本文書ハ「旧記雑録後編三」一七四号文書ト一部同文ナリ）

○二二五　倹約仰渡留（冊子）

（表紙）

天保十五年辰十月

御倹約仰渡留

1　領国一統倹約仰渡写

今度御領國中一統御倹約之儀被　仰出、格別成御趣意之段被遊　御承知候間、猶又所末〻迄勤職・家業致出精、質素節倹を相守、御取締向屹与行届候様御沙汰被為在、左之通被仰出也、

一内匠様御召品上方御注文之儀、此之節より格別御減少

被　仰出、其外御不断御召物之儀、麁品可被遊御用旨被　仰出候、

一御親類様方江御附届向ニ付而者、重立候御祝事の外、此之節御断之事、

一平日召上物等之儀も、右ニ被準御省略被　仰出候、

一御番頭以上者、年頭其外重立候御大礼等之節者、以前より熨目着用仕来候間、都而是迄之通ニ而、其外服沙汰之儀、右準可成麁品用へく事、

一御役人年頭供廻、是迄之通被　仰付、其之外御直觸以上可為一僕、其之外御役々可為勝手次第候、

一御役祝并元服・隠居・家督・婚姻之祝ニ付而者、祝物等之儀、身近親類迄輕き両種、其外祝ニ付而者、右準可為輕品候、

一諸御役々何そ御用筋ニ而諸向江出役之節、御用談等相済次第滞座有之間敷候、

一御倹約中、爰元諸士服沙汰ニ付而者、　御先代様方御趣意之趣茂有之候間、右ニ基キ、猶又質朴相守候様可有之候、

一諸御役々并諸士男女共、衣服之儀、禮式事等之外絹物又者越後縮之類相用間敷、肩衣絽又者紗之類不苦、襟・袖口・肩衣并袴裏江者絹太織類不苦候、帯者可為太織類候、可成麁品相調、随分質素節倹相用、第一武器類不見苦様心懸可申候、

一百姓衣服之儀、以前より被定置候通、男女襟・袖口・帯類至迄、絹物晒類可為無用、綿布類ニ而、無紋無地縞類可相用候、

一町人衣服之儀、是又男女共襟・袖口・帯類至迄絹物類一切可為無用、綿布類相用、又者麁品之晒相用候儀不苦候、

一所中初雛・初幟ニ付而者、身近親類迄草餅・茅粽輕品取遣之儀不苦候、

但男子ニも初人形与唱、飾立候儀、以来屹与可為無用候、

一法事并正忌日茶入等之節も、至極輕目可仕立候、

一日待月待等之儀、御花迄ニ而、團子類取遣可為無用候、

一盆ニ付、初霊之方江線香類差遣候儀者、左茂可有之候

得共、結構成燈爐・菓子類差贈候も有之由、以来差留候、

一馬場中産土神祭ニ付而者、神主共相頼、於座元産土神講取行候儀者、さも可有之事候得共、氏子毎家飲食取はやし親類縁者相招キ、費ヶ間敷儀共以来屹与差留候、

一所中向ゝ無益之参會屹与差留候事、但略す、

一十月亥日祝ニ付而者、取遣等之儀可為無用事、

一氏神祭ニ付、親子兄弟者格別ニ候得共、親類縁者迄も互ニ相招キ来候へ共、一統困窮之由、殊更世振之事候付、以来者不及其之儀ニ、神主・山伏江者輕キ茶漬類可差出候、互ニ取遣等之儀、屹与差留候、

一諸白米銭模合ニ付、近来酒・取肴太粧ニ取立有之由、費ヶ間敷儀、略す、

一鼻紙袋・煙草入、其外諸道具金銀細工之品、一切可為無用候、羅紗類之切ニ而調候儀不相成、

但刀ニ金銀召仕事格別之事ニ候、

一婦人櫛・かふかひ、鼈甲爪銀之髪差・指かね、一切可為無用、且町人之妻共、夫之死後ニ身分不似合髪形之者も有之由候得共、以来身分相當ニ可致候、

一諸士男女差傘・履物麁品可相用、紺傘類可為無用候、

一百姓町人日傘を相用候儀、以前より御禁止之事候処、近来取違之向も有之、不可然事候間、以来可為無用、着笠可相用候、履物之儀も奈良草履・塗下駄・天鵞絨緒之履物、一切相用間敷候、

一町人家婚禮并法事等ニ付、膳部類身分不相應ニ取仕立、其之外取遣之儀、先年以来申渡事候得共、違背之向も有之候哉ニ相聞得、別而不届之仕形ニ候、以来屹与差留候条、取締厳敷可申渡候、

右者、先年以来御取縮向ニ倹約沙汰追ゝ申渡事候処、程過候得者、緩疎之方ニ成立、乍存も驕奢之方ニ押移り、質素節倹取失候姿ニ而、別而如何至候、此節之儀者格別成御趣意之事候条、人ゝ篤与奉汲受、聊等閑無之様可懸心頭、就中女共ニ者汲受薄ク弁別無之候間、自然心得違不守之儀一切無之様、女童至迄能ゝ可令教示候、左候而尚又一馬場ニ両三人宛人柄相撰、取締人被掛置、互ニ申談、毎物涯ゝ立直候様

手厚遂吟味、申諭方可致候、其外百姓町人等者、夫〻死(支)配頭より締方いたし、末迄も行届候様可申諭、且右取締ニ付而者、御側目附・横目より折角氣を付、万一御趣意違之事共見聞於有之者、無用捨可申出、乍此上不守之輩も候得者、屹与可及迷惑候条、諸人一統難有御趣意之程厚可奉汲受、尚相洩候儀者、追〻可申渡候間、右之趣支配下不洩様分而得与可被申渡候、

十月　吉右衛門　彌五郎　屯　休右衛門

与頭衆
御使役衆
町奉行衆
御近習役
御留主
物頭
御記録奉行
物奉行
御側目附
横目
浦役
郡見廻

右、於御書院ニ申渡也、

右一件ニ付、十月廿六日朝、小舟より拙者鹿児嶋江差越、

内匠様江相伺、諸士服沙汰之儀、別紙調書之通、御先代様仰渡も在之、猶又此之　御方様より御申分之御書付も御座候間、此之節も同前之事御座候間、何そ　内匠様より絹布被御着御免与被仰出ニ者及申〻〻〻間敷候、諸士之儀者　中納言様より御先祖様江御附士之事御座候間、万一相尋向も御座候得者、御先代様より仰渡之通、爰元諸士之儀者訳も相替候間、先年御倹約之節も絹布着用来申候間、此節も先年も同前之事候間、其之節　由書立申立(御申)、御申分被〻〻〻遊度御願申上候処、　内匠様御祝氣ニ而、随分被聞

召置及事、

一我〻家之儀、去訳ニ而仰渡も有之候間、自分の事与内匠様も御沙汰ニ而、天保十五年辰十月廿六日致出府、同廿七日帰郷いたし、同廿九日於御書院諸御役〻江申渡也、尤諸士・百姓・町人江者支配頭より廻文を以申渡ニ相成也、

曽木彌五郎隆員

2　加治木士絹布着用ニ付倹約仰渡写

一従前〻衣類絹布相用間敷旨稠敷被仰渡儀節〻有之候処、爰元士之儀者御代〻被召仕候御直士ニ而候を、持高之侭為被召附儀候得者、此御方御取立之士ニ而無御座候間、有来通絹布着用可被仰付旨御申分有之、毎度御免ニ而着仕来候處、近年餘家中并ニ御法度被仰渡候、寶永五年子二月廿六日、鹿児嶋御仮屋江　忠五郎様御同心ニ而　吉貴公於須摩様　御光儀有之筈ニ付、爰元士御目見支度之儀御伺被成候処ニ、左之通被仰渡候、

覚

此節其元諸士　御目見ニ付、絹布着被申儀御窺申上候處ニ、加治木士之儀者御直士同格ニ可仕之旨被仰出候間、此等之趣可被申渡候、以上、

『宝永五年戊』子二月廿二日　『中押御用人』町田八左衛門印

新納弥次右衛門殿

曽木新左衛門殿

日野五郎右衛門殿

宝永七年寅九月五日役所日帳

一琉球立為見物、井尻半七・宇都宮八兵衛娘共鹿児嶋江罷越、ちらし付帷子致着候を、横目衆被咎及御披露候、大御目附座より相糺、可申出旨被仰渡候、就夫『久連様』内匠様より被思召上趣有之、『久住様』兵庫様江段〻被仰上、　内匠様思召之通　兵庫様御同意被遊候由、鹿児嶋より夜前『御役人』新納仲左衛門・『久軌』是枝治部『御役人』『快実』右衛門より被申越候ニ付、　『御役人并』御落着之為御礼、桑畑孫七・『常諶』與頭より日野善太夫、諸士相中より白坂七右衛門

・鬼塚仁右衞門今日被罷越候、

右之通有之候得共、翌年諸士より左之通書物差上候、

乍恐申上候、去年琉球立之節、宇都宮八兵衞・井尻半七娘共ちらし付帷子着用申候、横目衆被見咎目及御披露、于今何様共相極不申候由承及申候、依之加治木諸士之儀者、段々由緒有之事ニ御座候、前々御奉公仕候次第、且復古老之衆申傳候儀共粗書記差上申候、尤當時者御城下士衆同格と者難申候、然共他家中と者格別之儀ニ御座候ニ付、左ニ申上候、

一加治木諸士之儀者、

御當家御代々無別心御奉公為仕者之儀ニ御座候、

此所由緒書抬二ケ条略す、

一僊嶋院様御代ニ、絹布衣類着用仕候儀、度々諸家中一統ニ御禁止ニ被仰渡候、然共加治木士之儀ハ由緒有之候付、御断被仰上着用仕候、殊ニ南原仁左衞門・寺師五郎右衞門・池田八兵衞・秋永主水等絹布着用仕候を、横目衆被咎目及御披露候得共、僊嶋院様より御用人伊東三左衞門殿被召寄候而、加治木士之儀者自分之家来ニ而者無之候、御預ヶ衆中之儀ニ候得者、格別之儀ニ候間、絹布を為着申候、其段御家老衆江被申上、可預由ニ而、其分ニ而相済申候事、

一不二院様御代ニ茂、絹布衣類御禁止ニ被仰渡候得共、加治木士之由緒を被仰上、

僊嶋院様御断之筋ニ被仰上、相違申候事、

○二二六　曽木氏由緒調帳（冊子）

（表紙）

『緒』
由諸しらへ帳

由諸書差上候様被仰渡候ニ付、左之通相調差上候、

曽木三郎重茂

一元祖重茂者、菱刈進士判官三郎坊相印重妙二男ニ而御座候處、親重妙菱刈院曽木郷致分地居住仕定家號申候、『定家號代ゝ居住仕候』

『重茂八代之孫』
曽木播磨守重治

『一重治永』
一従重茂八代重治、永禄年間参飯野。奉仕　義弘公。、『。龍出』『。御家臣龍成、別而御心易被召仕候』

元亀三年壬申五月四日、。於飯野木崎原伊東家と御會『合』『。義弘公』

『御雛儀之節』
戦之時、於三角田御馬前ニ而戦死仕候、同戦死鎌田大炊助・野田越中房・富永刑部左衛門、『播磨四人究竟之場ニ』都合四人ニ而御座候、而致戦死候故、御勝利為龍成由候』

『重治嫡子』
曽木播磨重公

一義久公　義弘公、父重治忠死ヲ被遊　御感、新恩地被成下、従少年奉仕　義弘公、三州凶徒及豊肥筑前後六州被遊御攻討候節御供仕候、『御發向之戦場江不離御側御供仕候』

一義弘公諸所江被遊御移候ニ付、重公御供仕、栗野・帖佐・平松・加治木罷移申候、『緒』

『重公嫡子』
曽木五兵衛重松

『重松、久保公相州小田原　御出陣之節、十五騎之騎馬御撰被召列』
一天正十八年庚寅春、殿下秀吉公相州小田原城主北條家候、重松事者其内ニ而御座候、此時御脇指上州住正重作拝領仕候』

御征伐之時、久保公御出陣、依台命不被召烈、『列』多勢『。之内御供仕候』

『敵』
勇散之士十五騎御撰。御供被仰付候内ニ而御座候、此時御脇指上州住正重作拝領仕候、

一文禄元年壬辰　義弘公朝鮮御渡海之時、御納戸奉行ニ
『久保公於朝鮮被遊御死去、　御遺躰御帰朝之御供仕罷帰
而御供仕申候、　家久公江朝鮮御供又ゝ罷渡り、於彼地相應之軍功も有之候
候而、
一従　義弘公御腰物（宇多國宗作）拝領仕候、
故、御感状并地行百弐拾石拝領仕候、左候而　義弘公御供仕、関ヶ原
一久保公朝鮮國於御陣中被遊　御病死、奉附　御遺躰
御合戦、日夜不離御側致粉骨候故、御下國之後御感状・地行百石拝領
帰國仕、其後　家久公御供ニ而再渡海仕、御帰朝之後
仕候、其後　御姫様為御質江戸江御出府ニ付、御供被仰付相詰候内、
御感状・高百弐拾石拝領仕候、
義弘公より被成下候御自筆之御状両通格護仕、右之外　義弘公・久保
公拝領物品ゝ被仰付』
一義弘公慶長三戊年、従筑州『。直ニ』被遊直ニ　御上京候時、
重松御供仕、同五年子八月朔日伏見城攻、其後九月十
五日関ヶ原御合戦御供仕、堺之浦より被遊　御乗船、
不離御側帰國仕申候、御感状・高百石拝領仕候、
一義弘公御姫様為御質江戸江御登之節、重松於久見崎急
ニ御供被仰付罷登、江戸詰内、御自筆之御状二通并白
銀拝領被仰付候、
一義弘公より御掛物一幅（花枝畫舜舉筆）拝領仕候、
『重松嫡子』曾木新左衛門重知
一光久公毎度重知奉近謁、『能被遊御存、節ゝ御前江も被召出、難有以御意、拝領物御紋付之御上下・御自筆之御
等毎ゝ被仰付候内、御紋付御上下頂戴仕、殊ニ拝領物被仰付候砌、御
書・御鉄炮之雑、又者病中之節以御使者拝領物被仰付、
自筆之御書頂戴、格護仕候』
其外以御使者等進数品拝領物有之候得共、略ス、
一従光久公、明暦元年忠廣主を以重知三子之内壱人可被
召仕蒙高命、三男忠諸　光久公江御奉公仕、無間茂川
上五兵衛忠盈養子罷成申候、
一高三百壱石餘持高之侭ニ而被召附候、
曾木仁左衛門重澄
『一弥五左衛門と申候節、親新左衛門御役人被仰付置候処ニ、役儀御断
一光久公江毎歳奉祝新春を、御樽代青銅百疋ツゝ、進上仕、
申上、　光久公被聞召上、弥五左衛門江御役人被仰付之由御沙汰御承
又者　御下國御祝儀・年暮御祝儀申上、進上物等仕候、
知ニ而之之被仰付相勤、一往御役御断相済罷居候由、又ゝ御役人被仰付
候砌ニ、弥五左衛門新左衛門と改名可致と　光久公御意ニ而候旨、市
正忠廣主より被仰渡候、
織木綿毎度拝領物被仰付、新左衛門より茂毎年為年頭之御祝儀、御樽
一従　光久公忠廣主を以新左衛門と改名可仕蒙　高命、
代百疋宛進上仕、年暮之御祝儀ニ茂毎年肥後織木綿壱端宛進上仕、年
名替仕候処ニ、差支有之、仁左衛門と相改候、
頭年暮共ニ御城通御番所迄参上仕候』
曾木弥五左衛門重喬
一光久公・綱貴公、寛文十一年亥二月晦日御参勤之節、
加治木館江被遊　御光儀、翌日三月朔日
光久公為御名代　綱貴公江御太刀進上仕、初而之御目

見被　仰付候、

「一同日加治木　御立、國分小村江被遊（ハリ紙）

御光儀候ニ付、翌日二日、於御旅館

綱貴公江御太刀・馬代進上仕　御目見被仰付候」

一吉貴公元禄九年子正月廿六日御参勤之節、加治木館ニ御光儀被遊候ニ付、御太刀・馬代進上仕候、御目見被仰付候、

一吉貴公江享保五年子六月朔日、於　御城御太刀・馬代進上仕、家督之御目見被仰付候、従是代〻。『家督』継目之節、於御城御目見被仰付儀ニ御座候、

一継豊公享保六年丑二月九日、鹿児嶋館江　御光儀被遊候ニ付、御太刀・馬代進上仕、御目見被仰付候、

一継豊公享保九年九月十一日、鹿児嶋館江　御光儀被遊候節、故有之役〻江御目見不被仰付候、然共以御取訳重喬迄御目見被仰付候、

曽木五兵衛重晧

一綱貴公元禄二年巳三月五日　御参勤之節、加治木館江御光儀被遊候ニ付、御太刀・馬代進上仕、御目見被仰付候、

一吉貴公元禄九年子正月廿六日御参勤之節、加治木江御光儀被遊候ニ付、御太刀・馬代進上仕、御目見被仰付候、

一継豊公享保六年丑二月九日、鹿児嶋館江　御光儀被遊候節、御太刀・馬代進上仕、御目見被仰付候、

一継豊公享保十一年午九月廿八日、於　御城御太刀・馬代進上仕、家督之御目見被仰付候、

曽木弥五左衛門實弼

一重年公寶暦二年申二月十五日、於御城御太刀・馬代進上仕、家督之御目見被仰付候、

曽木貢隆棟

一重豪公寶暦十一年巳八月廿八日、於　御城御太刀・馬代進上仕、継目之御目見被仰付候、

一重豪公御参勤之節、加治木御光儀被遊、御肴一折進上仕、御目見被仰付候、

曽木新左衛門隆亮

一太守齊興公江文化十二年亥十一月十五日、於　御城御

太刀・馬代進上仕、家督之御目見被仰付候、

一同十三年子二月十五日　御参勤被遊節、加治木
御光儀被遊候ニ付、御肴一折進上仕、　御目見被仰付
候、

一右之外。代〻家督継目御禮被申上節〻、『御代〻様御』『仰上候節〻』家格ニ付御目
見被仰付候、

右之通御座候、此旨申上候、以上、

月日　　加治木
曽木新左衛門

○二二七　島津吉貴江御目見次第外覚書（冊子）

（表紙）

覚書

一曽木弥五左衛門重喬後改實直、（ハリ紙）「後夢宅」享保五年庚子六月朔日
於　御城御太刀進上仕、
吉貴公江　御目見仕候次第左之通、
明十八日四ッ時分被仰渡御用之儀御座候間、麻
上下御着用ニ而御登
城可被成候、以上、

五月十七日

嶋津兵庫殿　　嶋津内記

嶋津兵庫殿

右者、家來新納仲右衛門御太刀進上仕、
御目見被　仰付事、兵庫殿儀候付而、御太刀進
上仕、　御目見仕候者、今壱人可被仰付候間、
相しらへ可被申出候、以上、

五月　　内記

口上覚

私家來新納仲右衛門御太刀進上ニ而　御目見仕候、今
壱人御太刀進上仕　御目見仕候様可被仰付者見合、可
申上由被仰渡、別而難有仕合奉存候、曽木弥五左衛門
与申者、加治木居宅江　御光儀之節、御太刀進上ニ而
御目見仕來者ニ御座候間、此者江被仰付被下度奉願候、
此等之趣可然様御申頼存候、以上、

五月廿一日　　島津兵庫

明廿三日被仰渡御用御座候間、麻上下ニ而四
ッ時分御出可被成候、以上、

五月廿二日

嶋津兵庫殿　　嶋津内記

右内記殿、切紙之通致登　城候処、内記殿より
口達ニ而、弥五左衛門儀弥以御太刀進上ニ而、
御目見可被仰付由致承知候、

口上覚

私家來之内、御太刀進上仕　御目見仕候者、今壱人可
被仰付候間相しらへ可申上由被仰渡候ニ付、曽木弥五
左衛門与申者江被仰付被下度旨奉願候処、願之通可被
仰付旨承知仕、難有次第奉存候、然者此節以御序、何
とそ
御目見被仰付被下度奉願候、此等之趣宜様御申頼存候、
以上、

五月廿七日　　島津兵庫

写

曽木弥五左衛門

右、新納仲右衛門同前御太刀進上仕　御目見可被仰付旨被仰出趣有之候、依之弥五左衛門事、此節御太刀進上仕御目見被仰付度旨被申出來候事、朔日御太刀進上仕　御目見可被仰付候、仲右衛門儀継目之節事　御目見被仰付事候付而、弥五左衛門事も右同前被仰付候、然共弥五左衛門儀ハ　御目見被仰付折目無之故、此節右之通被仰付事候、尤已後之儀ハ継目之節計被仰付筈候条、此段兵庫殿江申達候様ニ假屋等へ可申渡候、以上、

五月

内記

島津兵庫殿家來
曽木弥五左衛門

一

右、明朔日御太刀進上ニ而　御目見被仰付筈候間、支度長上下着用ニ而朝五ツ時ニ罷出、御目附江取合、其首尾可申出候、若當病差合共ニ而難罷出候ハヽ、其訳無遅滞可申出候、以上、

五月晦日

奏者月番
高橋七郎右衛門
嶋津左仲

一六月朔日朝五ツ時　御城江参上仕、鶯間江相詰候、
一御目見仕候節、御奏者番川上縫殿殿久盤、
一御目見相済、直ニ田之浦御屋敷江参上仕、
久季様御夫婦様江御礼申上候、
一御目見首尾能仕候ニ付、六月四日
久季様御夫婦様江御膳進上仕候付而、進上物左之通、
一御太刀一腰無銘、長弐尺四寸七部半白鞘ニ而袋ニ入ル
右、久季様江實直より
一金子五百疋
右、奥方様江實直より
一御籠飯一組
一御肴一折
一御樽一荷
右、御夫婦様江家内相中より

拜領物

一金子五百疋

右、　久季様より實直江

一同三百疋

右、　奥方様より實直江

一同三百疋

右、　久季様より實直妻江

一金子二百疋

右、　奥方様より實直妻江

一同二百疋

右、　久季様より實興江

一同百疋

右、　奥方様より實興江

一同百疋

右、　久季様より實興妻江

一金子百疋

右、　奥方様より實興妻江

一享保六年辛丑二月九日、

継豊公初而被成　御下向、鹿児嶋屋敷江被成　御光儀候節、重喬・重堅御太刀進上仕　御目見被仰付候、右親子御奏者新納左京殿久敦、

一享保九年甲辰九月十一日、鹿児嶋假屋江

継豊公御光儀之節、御役人其外諸役人　御目見仕來候得共、別儀を以此節者不被遊　御覧候、雖然實直事者、於　御城御太刀進上仕　御目見被仰付者之儀ニ候故、可被遊　御覧旨被仰出、伊集院権右衛門殿・谷山角太夫殿より右之趣被仰渡、奥より御休息之間被遊　御入候節、　御通懸ニ被遊　御覧候、假名御被露伊集院権右衛門殿、

一享保十年乙巳五月、重之字實之字相改、嫡家菱刈孫兵衛殿實詮證文有之、

一享保十年乙巳十二月廿二日、實直及老年御役御断申上、願之通御免被仰付候付而、御樽肴進上仕、右御礼申上候処、数年首尾好相勤候由ニ而、　久季様より御脇差拜領仕候長一尺四寸三部肥後守法城寺橘吉次

一元文三年戊午七月廿二日、行年八十歳ニ而實直死去、

法名本海湛然居士、吉祥寺江葬、

一實興（實直嫡子）　初重治　重晧　重堅　翁助　五兵衞　遊庭

但實名相改候ニ付記置候、

一享保十年乙巳十二月廿二日、實興御役人被仰付候、

一御太刀一腰

一御馬代白銀十兩

右、實興御役之御禮ニ付進上、享保十一年九月九日

被仰付候、

一御太刀一腰

一御馬代白銀十兩

右、同日實興家督之御禮ニ付進上、

一享保十一年丙午九月廿八日、實興於

御城御太刀進上仕、

継豊公江家督之　御目見仕候、御奏者川上縫殿殿久盤、

一右　御目見被仰付候付、　久季様御夫婦様江奉祝、十

月四日　御膳進上仕御禮申上候、進上物左之通、

一御太刀一腰

一御馬代銀一枚

右、　久季様江實興より

一金子二百疋

右、　奥方様江實興より

一御肴一折

一御樽一荷

右、　御夫婦様江實直夫婦・實興妻より

拜領物

一青銅三百疋

右、　久季様より實興江

一同百疋

右、　奥方様より實興江

一同百疋

右、　久季様より實興妻江

一同百疋

右、　奥方様より實興妻江

一享保十九年寅十月六日、

久門様御家督付而、御脇差一腰實興拜領（長一尺八寸七部　備州長船經家）

是より末實興子、實興妻ハ菱刈孫兵衞殿重敦女、

一翁助　夭亡

一女子　夭亡

一女子　貴嶋曽右衛門兼致妻

右女子者、誕生之節より菱刈藤馬殿養娘ニ而被差置候ニ付、藤馬殿より御願有之、養娘御免被仰付、福崎五郎左衛門殿江致縁與候得共、不縁ニ而、後貴嶋曽右衛門殿江嫁ス、

（ハリ紙）〔藤馬殿名子之事〕

一女子　夭亡

一女子　夭亡

實與嫡子
一實弼　初重長　甚吉　新助　新左衛門　弥五左衛門

正徳四甲午年七月十四日誕生、母ハ菱刈孫兵衛殿重敦女、

一女子　調所八左衛門殿恒堅妻

後貴嶋五十右衛門殿兼倫妻

二男
一實盈　彦九郎　弥右衛門

享保九年甲辰十月十日誕生、母ハ實弼同腹、

一享保九年甲辰八月八日、重長事、久季様御直元服被成被下、加冠書を以新助と被改、二種一荷・御太刀・馬代白銀十兩進上ニ而御禮申上、其時御脇差一腰拜領之長一尺三寸薩州住國平

一實與茂重長元服之御禮御太刀進上ニ而申上候、

一吉貴公御前様御逝去ニ付、久門様より継豊公江為窺　御機嫌、江戸江御使實弼被差登せ候、元文四年未八月廿三日罷立、御使相勤、同十一月廿五日着仕候、

是より末實弼子、實弼妻ハ内田仲左衛門殿政壽女、

實弼
一女子

實弼子
一弥五郎　夭亡

實弼
一女子　夭亡

實弼嫡子
一實　常袈裟

實弼二男
一喜八郎　夭亡

寛延元年戊辰九月八日誕生、

一寛延元年辰九月九日

宗信公御上洛ニ付、
久門様被遊　御供候ニ付、實弼番頭役ニ而御供仕、寛延二年巳四月廿三日罷下候、
一寛延二年壬巳五月五日、實興及老年御役御断兼而申上置、願之通御免被仰付候ニ付而、御樽肴進上仕、右御禮申上候処ニ、数年首尾能相勤候由ニ而、従
久門様御上下・御帷子拝領被仰付候、
一寛延壬巳六月三日實興隠居、實弼家督之願申上置候処、願之通被仰付候、
一同年六月十一日、鹿児嶋於御屋敷
久門様御直ニ實弼江御役人被仰付候、
一同年九月二日、鹿児嶋於御屋敷
久門様江御役之御禮・家督之御禮、御太刀目録進上ニ而御禮申上候、
一寛延三年庚午三月二日、
善次郎様御家督ニ付而、御脇差一腰實弼拝領刀銘書有之箇
一寛延三年午三月十五日、
善次郎様御家督、始而實弼居宅江御入、御膳進上仕候付、進上物左之通、
一御太刀一腰
一御馬代青銅百疋
右、　善次郎様江實弼より
一金子百疋宛
右、　善次郎様江遊庭・常袴裃・實弼妻より
拝領物
一白銀十両
一御時服一
右、　善次郎様より實弼江
一金子弐百疋宛
右、　善次郎様より遊庭・常袴裃・實弼妻江
一同百疋宛
右、　善次郎様より實弼娘并二男喜八郎江
一寶暦二年壬申二月十五日、實弼於　御城御太刀進上仕、
太守重年公江家督之　御目見仕候、御奏者町田郷九郎殿、「名乗書入（ハリ紙）有之箇」
一右　御目見被　仰付候ニ付、奉祝、同十八日、

善次郎様於登免様江御膳進上仕候、

〇二二八　万覚書（冊子）

（表紙）

慶安五年辰

萬覚書

辰ノ八月七日

一銀子百八十め内銭五貫文外ニ十六匁八借銭ニ引、掛米十四石、太兵衛・久太夫ニ賣付候内、米七石分代トシテ林太兵衛より納ル、一石ニ付廿八匁ツヽ、残而七石分久太夫手前米遣有之也、此節返弁済、

辰九月六日

一同四拾六匁八分八、三十枚拝領銀、大坂借銀ニ直ニ相

納候残り分トシテ請取候、
同十月廿日
一同廿五匁ハ関右衛門身ノ代之内、志摩助より納候、但刀ノ代ニ拂候、福永兵助殿より首尾有之候、
承應元年霜月四日
一太守様より御鉄炮ノきじ三羽拜領、御使斎藤監物、
同月
一新納仲左殿より三百石之知行御買候而可給之使八代次左衛門、其後別ニ被成様ハ無之哉と内談ニ折田勘左衛門、次左ニ相談候、別ニ頼儀無之之由候ニ付、新納善左衛門ニ而御内談申上候ヘハ、直ニ日野内膳・新左衛門へ御相談被成候、先手つまりニ而候間、借銀ニ而知行被買取候而可被遣候、いつれ仲左衛門ハ餘人ニ違候間、身躰落着之儀ハ　太守様へ御内意被得、御意次第可被成之由、両人申上候、其通ニ御合點被成候、それより鹿児島ニ者山民部殿へ御内談可有之由、善左衛門ニ而承候間、一段可然之由申候事、
辰ノ霜月十三日
一白尾利右衛門・濱田三左衛門を以被仰出候ハ、新納仲左衛門、黄門様より親分として為被相付人之儀ニ候、此度一へん被仕候ヘハ残多候間、仲左衛門手前之借銀、御物より被相拂、三百石之知行被持留候様ニ可申渡候由候ニ付、八代次左衛門を以仲左殿へ右之御意申渡候事、
霜月十九日
一右御返事、次左衛門ニ而承候ハ、今度御詫申ニ付、仲左衛門借銀被相拂候而可被下候由、忝奉存候、大分之儀ニ候間御請申かね候へ共、手迫ニ御座候間、先銀子可申請候、重而知行目録可指上候間、左様ニ可承置之由候事、
同日
一先日麑嶋ニて、敷根三右衛門殿御頼人加治木へ御奉公ニ可指候間、三右衛門夫婦ニハ飯米可被下候由、中村表右衛門殿より承候間、加治木ニ而相談之上を以可申上候、鹿府ニ而相済間敷由申候、其後爰元二階堂傳右衛門殿ニて三右衛門殿より承候ハ、御頼人之儀、鹿府ニ而申候へ共済かね可申候由、御尤ニ候、此度むすめヲ中村表右衛門へ頼置候、前ニ申たる首尾之儀ニ候間、可承置之由候事、
霜月廿三日
一新納仲左殿へ拜領之銀子、内膳両人ニ而首尾之儀御頼被成候由、白尾利右衛門・濱三左衛門ニ而重而被仰付

候、御返事ニハ、先度次第ニ御理り可申上候由申置候、私儀ハ数年在江戸之御供仕、壱人ニ而銀子取拂仕、御供銀も壱人之證文上方へ仕候、武庫様次第ニ御手迫りニ御座候、以来　太守様被聞召候而も、方々借銀ヲ御意次第我等仕ちらし候なとゝ御座候へハ、迷惑ニ御座候間、此度之是非とも御詫事ニ御座候間、餘方へ被仰付候而可被下候由申上候事、

同廿三日
一銀子貳百四十三匁ハ知行高九石、但壱石ニ付代銀廿七匁ツヽニ永代ニ買取代として米良弥兵衛殿へ渡す、

同廿七日
一新納仲左殿へ被給候銀子、借用重而御頼被成候由、白尾利右衛門・濱田三左衛門を以被仰候、此上ハ可仕様無之候、さらハ證文ニ判可仕候、借銀可仕處無御座候間、銀子之才覚物奉行へ可被仰渡之由申上候事、

同日
一鎌田伊賀久敷被召仕能奉公被申候間、是非とも跡目可被仕立通可申渡由、新納善左衛門ニ而被仰出候間、伊丹六左衛門ニ而鎌田勘兵衛殿へ申含候、御返事ニ、忝御意ニ而御座候間、十三ニ罷成むすめヲ可指上候間、誰之二男三男ヲ御取合被成、伊賀跡目被召立候而可被下之由被申候、内證ニハ伊賀知行五石ニ而罷成ましく候、定而御心付可有之と被察候由、六左衛門咄被申候事、

霜月廿七日
一瀬戸口十右衛門殿・森田二左殿ニ而被申候ハ、七兵衛身躰行迫りニ付、七兵衛むすこヲ手前ニ召置候間、以来御手付も御座候様ニ可申上候間、其段可聞置候由候事、

一又八郎様御誕生日、辰霜月十八日ニ、内膳殿内儀・手前女共、奥方之御相伴相留り候事、

辰ノ(ママ)霜月三日
一新納仲左殿と公儀方ニ付相判ニ付、日内膳殿より新納善左殿ニて被申上候ハ、前ニ談合衆と被仰出候、然處ニ此度御留主中ニ仲左衛門より連判可仕由再三申候へとも、難叶ニ付只今迄連判仕候、此作法不被仰付候處ニ慮外至極候、先申上候、就其新左衛門儀も内膳殿連判ニ付仕候、向後其儀有間敷候、御理り申上候由、新納善左衛門殿ニ而、白坂直右衛門殿所ニ而申含候、仲左衛門殿へハ竹内八右衛門殿ニ而右之訴詔申上候、落

着無之内ニハ連判難仕候間、可被聞召置之由申候、

辰十二月十日

一新納仲左殿へ拜領之銀子八貫め、八代次左衛門ニて相渡し候、此銀麑嶋ニて町衆之笠や主馬・森山吉左衛門ニ而相談仕借銀也、證文内膳殿・我等両人ニて仕候、

辰ノ十二月十七日

一銀子弐百五十め萬助身ノ代、内二百め伊右衛門殿江戸ニ而御物借用ニ付、直ニ御蔵へ相納候、五十めハ手前より伊右衛門殿へ取替ニ指引相済候、使十右衛門、

同日

一同四十二匁三分、銭十三文ハ百めかけ悪銀、御蔵より被取替候ニ付、返弁仕候、使十右衛門、

同廿三日

一銀子十五匁ハ辰ノ霜月桑畑久右衛門殿へ借用返弁、使八兵衛、

右ハ百め積銀ニたしニ成候、

同日

一同十匁四分、曽伊右衛門殿へ前々請取頼申候返弁トシテ相済候、

同廿四日

一白尾清右衛門弟花堂□(少カ)兵衛、平田豊前殿ニ奉公仕召置候銀子少々入候、猶銀子借シ候而、来春江戸へ召つれ度候、加治木改之人ニ而候間、爰元帳面被相除候而可給之由、弟子丸藤左衛門殿ニて豊前殿より承候事、

右花堂少兵衛之儀、辰十二月廿七日夜、新左衛門宿元ニ而、仲左殿・内膳殿へ申渡世人ニて岩や寺ノ門前札ニ而候、武庫様御かもひ無之人ニ而候間、豊前殿へ被相付候而可然候由両人被仰候、重而豊前殿へ計可遣由申候、

辰ノ十二月廿五日

一銀子百め、北俣知行四石五斗ノ代トシテ恒吉藤兵衛殿へ拂、

同廿六日

一新納仲左殿より川上慶左殿・八代次左殿ニて御承候ハ、前々身躰迫り候間、知行指上候而銀子可申請様申上候處ニ、銀子被下候、其節則目録可指上儀ニ候へ共、方々ノ借銀ニ取籠候故、重而目録可指上候由申置候、其通ニ存候、武庫様御借過分ニ成立候處ニ、銀子ヲ可申請事ニ而無之候、知行可指上候間、其段上聞候様ニ、扨目録之儀ハ麑嶋しちに召置候間、目録ハ来春可指上候、先年内々右之段披露候而可給之由承候事、

右知行是非ニ覚悟被成而可然之由、盛秀・宮内清右衛門殿ニ而いけん申候へハ、知行其まゝ覚悟可有之落着、巳十月九日ニ右両使を以仲左殿より返事被申候事、

辰ノ十二月廿六日

一銀子五百目者、餅田村之内知行高廿石、渡邊戸兵衛殿より永代ニ買取候代之内として相拂、残而百目ハ正月

可相拂候、但壱石ニ付代銀三拾匁之直成也、此内百目ハ毎年上銀子取替候而相拂候、

右百め、巳ノ三月十九日ニ目銀請取、川野吉兵殿へ銀子相渡候、證文有之候也、合六百めノ筈相済候也、

十二月廿七日
一嶋津圖書殿より歳暮之御使きしら作之丞、

同廿九日
一新納仲左殿と相談之儀、御返事、此中御留主居仲左衛門・内膳被仰付置候、相判被申候由ハ少も無御残慇懃ニ被申候、仲左老人ニて候間、向後弥以相判仕、萬事ニ相談之儀御頼被成候由、新納善左・折田勘左ニ而被仰渡候、御請不罷成候間、年明候而事分可申上候由、両人へ申置候、但年明候而相判被仰付候へ共、是非ニ御侘之由、右両使を以曽而可申上候事、

同廿九日
一川原少兵衛口事一巻ニ付、我らいけんニ同心無之ニ付、仲左殿・内膳殿より鬼塚久右衛門・白坂萬左衛門を以新左衛門いけんニ同心可有之由被申渡候、就其いか様ニも御下知次第ニ可仕候、新左衛門・内膳之いけんニ同心不仕候而残多候、是可申分之由、右両人ニて三人ニ承候、追付林九郎兵衛・川野吉兵衛迄右分被申候、先落着ニ而大慶ニ存候由、返事申候事、

巳ノ三月十四日
一川少兵衛ニ我々意見申通ハ、別人ニ禅宗よりなんだい被申候ヲ、少兵衛證跡ひかへ相尋可申之由申上候、尤ニ存候、内證ニ而意見仕候通被聞召達候、然其後下女押取可仕与女房被仕候、少兵衛不存訳ハ有間敷候間、是ハ別条ニ而候間重科可被仰付之由、折甚左衛門・新善左衛門ニて被仰出候、

巳ノ三月十六日
一木脇民部左殿より八代次左衛門殿へ一傳申候ハ、先年納右衛門出合以来、何とやらん世間之沙汰有之ニ付、加治木へ不参候、然共先日罷越候以来、又八様ニも御目見得申度候、私方へも少も無隔心候へとも、世上色々申候間縁慮仕罷有候、何そ別条無之儀ニ候間、以来共其段可被聞置候、今度流球(琉)ニ逐而参候間、先次左衛門を以、心底之通我等申候由傳言頼候事、加治木親類とも多候間、根清兵衛身躰之儀とも相頼之由承候事、此方より状遣し候、

承應二年巳ノ三月廿二日
一高四拾石五斗貳升、山之路村之内、日野内膳殿本知行
池田十郎右衛門より永代ニ買、使桑畑久右衛門殿、但
高之内廿石二斗六升毎年上分、
同日
一右代銀九百め、内四百五十めハ毎年上出分、四百五十
め新左衛門出分、

覚

一高七拾四石二升、内一高四十石五斗二升日野内膳殿（割印）
一廿石渡部儀兵衛殿　一九石米良弥一兵衛殿
一四石五斗恒吉藤兵衛殿
右知行永代ニ買取候、賣年より之差出し別紙ニ有之候、
我等高ニ可被相直為證文如此候、以上、
承應二巳ノ
三月廿二日　　曽木新左衛門
かち木
高奉行所

巳ノ三月廿六日
一山田民部老より使ニて承候ハ、森民部左殿兄ノ出合ニ
付数年恐入罷有候、御捨免ニ而候者、内儀ヲ親けんさ
うニ加治木へ遣度候仕合を以、武庫様へ可申上哉之由
候事、此旨申上、無別条御返事候事、
卯月七日
一去正月ノ末ニ、新仲左殿より野添惣右衛門殿を以承候
ハ、真がく寺被指越候川野少兵衛女房氣任申候ニ付、
御役人衆ニ對シ私ニ寺領仕由候而被参候、御引付無之
ニ付、自身指越被申入候、此上ハ別条有間敷間、仲左
衛門ハ承置候通返事申候間、私對面可申之由承候ニ付、
當所ニて真がく寺ニ對面申候、新仲左衛門へ為被仰含
儀ニ候間、我等承ニ及不申候へとも、被仰候儀ニ候間、
子細承置候由申候而、真がく寺ヲ返し申候事、
巳ノ卯月十三日
一先日鹿府へ武庫様御逗留之時分、筑前殿・種子嶋殿よ
り、有川与左殿を以、郡元ニ御不會御中被直候へと、
図書殿・兵部殿同前ニ被思候、御両所ハ御内縁ニ付、
先被仰候通、濱三左衛門取次ニ直ニ為被聞召候由候、
其御返事ニ付新左衛門罷越候、御返事之口上ハ被思召
寄忝存候、如仰郡元へ不會之段ゝ可被聞召候、先年始
テ證人ニ罷上候時分、右兵部殿内談候ハ播磨無分別共
有之候、殊ニ御袋方ゝノしやうげニ被為成候由候、又

八郎殿御為不可然候之由被仰候、就其又八郎儀ハ幼年ニて何事も不存候、此上ハれいしや之神文可仕之由申候、兵部殿尤ニ候、左候者北郷式部殿ヲあて書ニ可被成候、兵部殿ハ式部殿御供申御使可仕之由候ニ付、向後之證跡ニハ、袋へ不會仕へく候由書出し候神文之上ヲ返替申事不罷成候、向後御意見有之間敷為ニ、心底ヲ拂候而申候、御沙汰ハ御無用たるへく候、又八郎弟兵吉郎殿、権三郎ハ市正殿より年内被仰候儀ニ而、根占七郎殿同心ニ而郡元へ遣し候、此兄弟ハ折節ニハ見舞可申候、又八郎ハ兵庫同前ニ候由、有川与左衛門殿同心仕、御両所へ参候而直ニ申含候、御両所共ニ、其段之儀あらば無是非御事之由被仰候、御意之由候事、筑州咄ニ被仰候ハ、それ程之儀ならは、前ニ郡元へ御見舞為被成様ニ承候、いな事ニ而有之候と咄ニ被仰候、并又八郎殿ハ各別ニ而候間、向後御内意共候者、郡元へ御参会無之てハと被仰候、それハ左様ニ可有之と申候事、

卯月廿七日

一霧嶋座主より使清五左衛門へ金之目貫二具、鉄鍔二口、ふち一ツ、一包ニシテ渡し返遣候也、外ニ銀子百六十め之請取、文箱ニ入、同前ニ相渡し候、

同日

一銀子百六十めハ、刀大小こしらへ賃トシテ霧嶋座主より請取候、

内拂

六十四匁三分八　五匁四分、内金九分五り餘分霧嶋へ返遣候、

一銀廿壱匁五分金子弐匁壱分五りノ代　一銀廿四匁金弐匁四分ノ代　一同四匁五分漆楮さやノ代　一三匁五七

分鮫之代　一六匁二分下緒大小　一同三匁五分つか巻賃　一十四匁三大小金具賃　一三匁四分口へ申候銀之代

一同七匁長刀さや代　一五匁三分鮫一本代　一四匁七二

分刀柄巻賃　一同十三匁六分とき賃　九匁六六

巳ノ五月十四日

一銀子百六十め壱分ハ六りニシテ十二月限、

右銀子、新左衛門手前より長左衛門殿へ首尾有之筈也、

右者、有川長左衛門殿銀子曽木喜右衛門ニかし付、

證文有之、

内一銀四十めハたゝミ十六帖さし賃ニ引候間、重而手前より算用可有候、巳ノ十月廿日一同百廿め壱分○一残而利銀廿七匁二分不済、但巳十二月十二日ニ済巳ノ五月より同十二月迄九ケ月分、

右銀子出入帳ニ付候付、ケシ候、

同六月廿一日
一うねさし足袋二足、佐土原衆市来大蔵殿へ白尾利右殿便ニ遣し候、

巳八月五日
一銀子弐百め、日野内膳殿より借用仕候、

右銀子弐百め、巳ノ十月十七日ニ返弁仕候、使運平、

巳ノ八月廿六日、来ル廿八日ニ中西宿ニて能見物へ御越ニて候、
一新納善左衛門殿ニて被仰出候ハ、新納仲左衛門内儀、郡元御袋へ使ニ被遣候ハ、前ニ直證人ニ江戸へ御座候時之様子、覚有之ハ御けいづニ可被乗せ候、尋ニ被遣候間、郡元へ之進物可相調候由、内膳同前ニ承候、其段善左衛門前より、今度能見物ニ御越被成候臺所衆談合可有由申候事、

巳十月廿七日
一八朔日之使者之座并馬渡り所、當年相替り難心得ニ付、先日御内證ニ得其意候處ニ、乍案中思召寄被仰聞、一番座ニて使者之　御目見得、無口能間、御定之様落着仕候間為御心得候、平藤右殿・伊二右殿ニ而、右之首尾披露可仕由、圖書殿御留主故、出水九兵衛殿へ子細申置候事、

同日
一追付出水九兵衛殿かりやニ被遣候、八朔日之使者之首尾、前々御内意承候ニ付、存寄申候處ニ、圖書如申御同心候由目出度候、如右相替り候而も、武庫老御難ニ不罷成候間、弥其段ニ御落着可目出度候、新左衛門も其通ニ可心得候、前々両使を以御披露御尤たるへく由被仰候、則新納善左殿ニ而申上候、

巳十月廿九日
一平田藤右衛門殿・伊東二右衛門殿へハ、白尾利右衛門殿・波多与兵衛殿ニて右之首尾被仰候、両使共ニ御落着御尤ニ而候、其段御家老へ御披露可有之由候事、

同霜月三日
一於屋敷貴島五左殿内證トシテ被申候ハ、昨晩夜入而罷帰候ニ、川内勘右衛門殿寄候へハ、彼方へ中江左殿・米弥一兵殿・壱岐孫左殿・是枝八太殿被居候、勘右殿被申候ハ、関殿後家近頃ちやうたいへよばれ候而、御法度之本尊被見せ候、両度迄見申候、勘右衛門可聞置候ニ付、右之御人衆聞手ニよび申候、五左殿ハ横目衆ニ而候仕合ニ而候、可聞置由被申候、就其今朝万善帯

刀殿・藤彦左殿へ申合、是江左殿ロヲ堅申候へハ其通ニ候、御披露ハ各〻次第、我等ハ御尋可有時分可申上候由被申候と承候間、先仲左殿へ可被申由申候、私宅へ罷帰候而、仲左殿より川上慶左殿・濱田三左殿ニて、此儀いかゝ可有之哉と承候間、明日内膳殿横目衆同心仕候而参候而相談可申由申候事、

同四日
一日野内膳殿・藤山彦左殿・貴島五左殿同心申候而、仲左殿参候而相談候ハ、彼ノ後家へ入魂之時、二度迄本尊ヲ江左衛門被見候者、則可被申出事ニて候、押かくし後家と江左衛門下女ノ請きニ付、此比不會ニ而候、只今被申出候事、江左衛門一人之ロヲ證跡ニ而せんさく難被成候間、有川長二郎・白坂万左・米良弥一兵衛を以、別ニ證跡人有之哉可被相尋ニ談合相済、則右三人、米良弥兵衛宿元へ江左衛門ヲよび被尋候へハ、別ニ證跡人無之と聞候、いか様ニ成共各〻御指圖可仕由、右三人へ之江左衛門より之状被取候而被参候事、

同五日
一右江左衛門酒狂ニ落着候而、内證ニ而横目衆へ被申候事、

(割印)
一高廿貳石五斗ハ中山郷左衛門殿より永代ニ買取候、但賣手より之證文有之、高可被相直證跡ため如此候、以上、

巳十二月五日　　曽木新左衛門

高奉行所

一四本彦七、巳ノ年ノ改ニ加治木札ニ直ル、貴島五左衛門掛合、但新納仲左衛門殿役人之内、

巳
十二月廿九日
一銀十五匁ハ、先年江戸ニて鞍ノ代トシテ渡候、

但与一左衛門より返弁、

午
正月十日
一御宿之表具代四匁五分、外ニ染物二端ノ染代、宗富老手前ニ舟木平兵衛殿より前ニ江戸ニ而被取候焼酎代銀ニ而、平兵衛殿より相拂候而可給之由、日野内膳次ニ状上せ候事、

二月十六日
一石原主兵衛事、湯田之養子被相放候ニ付、内儀も同心ニ而被立除候間、宅万龍右衛門殿を以、甚兵衛殿所へ被立帰、跡目可被相つゝけ之由申候へとも、書渡候書

ヲ失候間、立帰申事曽而不罷成候由被申候事、

同日
一甚兵衛殿方へ孫殿より書物被遣候ニ付、以来下人家ざいハ別ニあらそひて有ましき由被申候ニ付、甚兵衛合点不被申候而、我等へ其書物被出候ニ付、又宅方新右衛門殿ニて申候ハ、是非共立帰、湯田之家ヲつゝけられへく候由申候、左候者猥ニあらそひて有ましく候、扨主兵衛殿内儀として被居候者、向後甚兵衛殿跡目より白紙ヲ一枚被相渡ましく候、左候者こうくわいたるへく候間、是非共此度分別をかへられ、甚兵衛殿家へ被立帰候而可然候由申候事、右返事、主兵衛内儀曽而立帰候事成ましき由、新右衛門へ被申候ニ付、此段桑久右衛門殿ニ而湯田甚兵衛殿へ申候事、

一甚兵衛殿より書物被指出候間、宅方新右衛門殿ニ而、右書物主兵衛殿内儀へ可被見届候、甚兵衛跡目ハ別ニ養子可有之候、向後主兵衛内儀へ甚兵衛方より白紙ヲ一枚被相渡ましく候間、其段可聞置之由申置候、子細承置候由、新右衛門殿ニ而二月廿二日ニ承候、是通ニ而、主兵衛殿内儀方へ三度新右衛門殿ニ而申含、相極候事、

午
二月十六日中村市右衛門殿薬
一薬三服新三郎　一同三服伴六　一同二七日山助
廿四服　六月十九日
一同四六日母上　一同廿六服母上　一十五服同　一八服
〃〃〃
金作　一同五服山伏　一同廿七服母上　合百廿五服
但十八七日□服不足、
代銀卅六匁

午
三月九日
一銀子五十めハ太郎右衛門身ノ代トシテ相納也、
三月十四日
一踊より曖衆津曲伊賀殿・加茂鷲右衛門殿、行司池田隼人・馬場盛右衛門・池田六郎左衛門、案内者勘解由、上別府田之清左衛門・弟竹右衛門・親清助、竹右衛門より安楽村へ使長峯志賀允・小谷喜右衛門、

午ノ六月吉日
一新納善左殿・白尾利右殿ニ而訴訟申候ハ、當分日野内膳も在江戸ニ而候、新納仲左殿ハ老人ニ而役儀難勤(勤)と見え候、然時ハ我等一人ニ而御家中指引之様ニ世間ニ見え可申候、殊ニ手前筋氣ニ候、御事かぎも可有之候間、相役ヲ被仰付可被下候、若左様之儀不罷成候者、吟味衆被仰付候者相談可申由、右両使を以申上候事、

午ノ七月十二日
一談合衆訴訟之御返事、両使ニ而被仰出候ハ、新左衛門

儀持病折々さし起候、其時分ハ私宅よりもさし引可被申候間、しゐて被仰付度候へ共、談合衆ニ而も吟味衆ニ而もと被申候時ハ、相方ともニ御同心なくてハいかゝ敷候間、稽古之為ニ談合衆被相加へく候、就其前々ノ談合衆新地被仰付候、自今以後御高ニ相應ニ役扶持ノ員数可被相定候間、表より談合申可申上候由候事、

同日

一右御返事、則申上候、手前持病氣ニ而、相役之訴訟申上候處ニ被聞召達候而、談合衆可被相加之由、先以幸ニ奉存候、是等之御禮申上候、就其使衆へ咄申候ハ、役扶持之員数相談可申之由候、定而我等も相役之衆へ可被給、御給分之内之新左衛門ニ而候ハん間、我等前より此儀何分と、或申上候、新仲左衛門殿へ被仰候而、彼方より被相定候而可然存候由申候事、御使善左衛門殿・利右衛門殿、

八月九日

一踊之衆被見舞候衆、津曲伊賀殿・池田六郎左衛門殿・馬場盛右衛門殿・木佐貫五郎右衛門殿、清左衛門・竹右衛門、

同月

一四寸釘五十七本・三寸釘三百本・二寸五分釘五百本・一寸釘五百本、安右衛門より請取、代銀ハ蔵ノひぢつほ安右衛門へ渡置候間、重而出入算用有へく候、

一日野紫染上帯壱長女帯代銀七匁八分

一同上帯壱長男帯　代銀拾匁三分四リ

一から紙五十枚　代銀弐匁五分

一郡内嶋壱端染うこん五所紋□か染いたし代十七匁五分

右染□相極之由候

一白紬壱端　代銀十七匁五分

一右紫染代　銀八匁

右六色、本田源右衛門殿便ニ午九月廿八日ニ相届請取候、いつれ代銀不済、

午十月二日

一革はな一具、一女房帷子二ツノ内しめしさらし、未五月七日ニ池勘兵衛殿より請取候、代不済、

一弓掛革二さし并弓つる、前ニ池田勘兵衛殿被相下候、代不済、

一鏡一面、一す二通、一引手四ツ、一掛手十、一打釘五ツ、

一はりかね、一とちかね一ツ

右未ノ五月ノ九日ニ勘兵衛殿より請取候、代不済、

午ノ十一月十五日
一新納善左衛門・白尾利右衛門為御使被仰出候ハ、前々談合衆可被相加之由、新左衛門より申候次第ニ御見合を以可被仰付之由、御意被成候、新左衛門之儀ハ各別ニ而候、数年致苦労御奉公申候、少分なから此度知行五十石為新地被遣候由承候事、

右御返事申候ハ、我等数年御奉公申候先功ニ而此度新地五十石被仰付候由、忝存候、何そ御奉公為申儀ニ無之處ニ、御心付ニ而候間可申請候、時分を以五十石ハさし上可申候、乍去我等并之衆少身ニ付、前々知行被出候、我等儀ハ持留之高相應ニ御座候間、此度之新地ハ、我等之相應之役分として被仰付候而可被下候、左様ニ御座候へハ覚悟仕候て、其通ニ名寄之奥書ニ有之様ニ候、右両使ニて新地御返し申上候事（但身ニあてゝ御詫之由申候事、）

午ノ十一月廿一日
一右知行重而被仰出候ハ、相應之役分たるへく候由候へ者、数年苦労申儀ニ候間、為新地被仰付候由候間、先其儀ニ落着申候事、

午ノ十二月十四日
一川上慶左殿・白尾利右殿ニ而被仰出候ハ、役儀被仰付候間弥御頼被成候由候事、則御返事申上候ハ、江戸以来其儀ニ被召仕候、何そ只今之御奉公ニ相替儀有之間敷候間、いか様ニても可罷成所迄ハ相勤可申之由、御返事申候事、

一同廿八日　御太刀進上申候、取次鳥井堅介殿、

一同日　御太刀拝領之御使本田源右衛門殿（但役儀ニ付之御祝儀也、）

午
十二月廿七日
一銀子六拾八匁八分、勘蔵身之代百めノ内トシテ相納也、

未
正月十八日ノ朝善行院へ申候、同廿二日ノ朝市正殿へ申入候、
一御にし様御嫁入、来年秋冬ノ間ニ可被申請候、作事来年夏迄ニ首尾可申候、就其御人数等之儀、此家之数ニ相應ニ御座候様被仰付可被下候、為御心得ニさし圖掛御目置候事、但指圖市正様へ上置候事、

同日
一兵庫頭殿へ子共達数多御座候、又八郎殿之儀ハ申ニ不及候、捨（舎）弟一人ハ兵庫殿御分別ニ而相應ニ知行等被相付成（ママ）〻〻ニ可被仕候、兵吉郎殿儀ハ　少将様御小性なとニ御奉公候而、御取立被成候而被下度存候、但高之多

少ニよらす可然人之跡目ニも被仰付候哉、いつれとも殿様御分別を以、兵吉郎殿身躰之儀御取立被成候而可被下由、右両条市正殿・善行院頼存候、御両人御納得候而御仕合次第可被達　上聞候由、御受取候而罷帰候事、

未ノ二月十日中村市右衛門薬覚
一薬二七日久太郎　一同三七日山助　一同三服千蔵
卯月十三日市右衛門殿　六月朔日　六官ノ
一同十服内小薬三服かゝ　一薬廿服伴六　一同十六服同人

十月吉日紹甫
一ふり薬七服　紹甫一薬六服あちやこ　紹甫一ふり薬五服

一合六七日三服薬十二匁九分中村市右衛門殿　一合八七日薬代十六匁紹甫

一印判并書判之形、承應四年乙未四月廿八日ニ安楽村ニ湯治ニ逗留申候而、彼地ニ而落シ候間、印判替候、書判ハ曽同前ニ候、

三月廿九日
一踊衆加茂鶴右衛門殿・池田六郎左殿・同隼人殿へ扇子二本ツヽ、安楽村より遣し候、

一琉球國上ノ王子へ箱扇子三本、午ノ年遣し候、

未ノ六月
一西之別府之助右衛門と御道具衆久二郎、入組候而相はつれ候と承候、西ノ別府もはや五六人入人はつし候、不可然儀ニ候間、能可被申付由盛秀へ申候、就其久二郎作敷如前〻と盛秀より被申渡、田方助右衛門・久二郎へ相渡候間、又久二郎鹿府へ番之留主ニ畑方六枚おさへ候ニ付、久二郎番より罷帰、則西之別府相はつし候事、

未
六月十四日
一就其物奉行衆竹八右衛門殿ニ而承候ハ、久二郎相はつし申たる由候と承候、就其物奉行より郡奉行宅万殿・原田殿へ相談候而、西之別府へ両度迄被参候而、右畑方如前〻ノ可相付候間立帰候へと、久二郎方へ被申渡候へ者、いか様ニも御曖次第と申候ニ付、助右衛門方へ被申渡候へ共、勝手合(點)然不申候事、久二郎親次右衛門畑方之茶木為切候由候、先助右衛門當分預ニ罷有候而、名奉行之曖有之事いかゝ、其上盛秀より如前〻旨与申渡候處ニ、取替候而、畑方ヲ久二郎留主ニ押取候事いかゝ之事、此曖名奉行之手前ヲ助右衛門相背候ニ付、有川長二郎殿ヲ被頼候而為被相済之由候事、彼助

右衛門氣任之儀ハ宅万新右衛門存、

一未ノ六月十九日之朝、御屋敷廣間ニたゝミ三帖敷かけたるこも、ぬきちらし、枕なと御座候間、慶斎召寄、何とてヶ様之聊尓ハ候哉と申候ハ、此中番衆如此被仕候由申候、先掃地可被申由申付候而、夕之番衆召寄候へハ、湯田弥二郎・圖師久太夫・東傳内被仕候間、林九兵衛・江田藤右衛門ニ而申渡候ハ、常式番衆不行儀之由被仰出候、さりとてハ曲事ニ候而番所ニ不被居さへ御座候ニ、御客人之為之座之たゝミヲ上ケたるこもヲちらし、人足之縄ないヶ様ニ被仕跡ヲ、茶湯坊へ掃地させられ候事不届由、きひしく申渡候へハ、御尤至極、申分無之由被申候事、

未ノ六月廿日

一銀子六拾三匁八分五りハ、内一廿五匁七分知行代之内十匁ハ借銀、十四匁ハ糸嶋代、七匁ハ京都染代、四匁七分五り油ノ代、年ノ暮ニ取替、六匁四分赤米代越し上方より返弁、

未八月廿三日

一西之別府助右衛門妻子、仲左殿もらわれ、助右衛門一人追放之、使鬼塚久右衛門・川野吉兵衛此衆より被尋候ハ、仲左殿口上有川長左殿へ未不申候、後日助右衛門被召直間敷候哉、又ハ長二郎前より侘可有之儀も候ハん哉と、長左衛門殿可被尋儀も可有之候間、いかゝ可申候哉と被尋候、我〻三人申候ハ、尤仲左殿一旦曖之儀ニ候間、以来ノ掛合成ましく候、我〻内存ハ、遠島為申者も年月立候へハ侘有之事ニ候、妻子共ニ追放ニ而も後年侘御座候者、時分ニよつて可被召直候、此度一旦之追放と候へハ、助右衛門かろく可存候、相手ノ方もいかゝニ候間、其口上前〻より不出候、後年侘候時分、久右衛門・吉兵衛侘之使被申候共、侘請間敷ニてハ無之候、其時之談合たるへく候由、両人之使へ咄申候事、仲左衛門・内膳・新左衛門存、但助右衛門専自ノ科、寺領之内ニ子共ノ踊候とて衆并踊之場ニ罷出候儀ハ免シニ而候哉、いかゝノ事、

未十月廿一日

一高十二石五斗ノ中山は目録壱ツ、六斗掛米ノしち物ニ出し置候、

未霜月二日
一高十六石九斗三升一合三勺五才目録壱札、加久藤小屋しき一石、掛米之しちニ出し置候、
十二月四日
一干鮭一本、革足袋一足、扇子二本、江戸材木や淺永三郎左衛門、
同十六日
一九年母ミかん一籠、三郎左衛門へ遣し候、
同廿五日
一加左衛門身之代百四十二匁八分済、残而七匁二分免シ候、
同日
一内蔵允身之代百廿め相渡し候、

覚

溝邊村之内私領輪地百姓、未進有之ニ付、下人権介此方へ相渡り候、先當分ハ輪地へ召置可申候、後而ハ手前ニ可召寄候間、左様ニ可被聞召置候、以上、

未十二月廿九日　　曽木新左衛門

咎人
御嘱衆中

一薬五服嫁との　一五服仙千代
申ノ二月吉日紹甫
一薬廿服新左衛門　同日同一同二七日久太郎　一同二服金作
卯月吉日
一ふり薬三服　同一同二服　卯月吉日一同三服久太郎　同一同三服
嫁　同一同六服久太郎　同一同三服たね　同一同三服金作
六月
一薬八服久太郎　一十五服新左衛門　一同九服岩蔵
申ノ同十日
一銀子弐百目ハおみつ身ノ代ニ拂、外ニ六匁合力トシテ親ニ遣し候、
同三月五日
一證人衆御賦相下り候ニ付、麑嶋へ参、圖書老・筑前老へ御内證申候而、二階堂城之介殿ニ而致披露候、口上ハ證人衆賦相下り候由承候、いかゝニ而候哉と公役座へ御尋申候へハ、又八郎賦六十人之由書付被出候、兵庫殿具ニ被見届候、就其被申候ハ、又五郎殿・大膳殿五十三人之由候、与力加五十六七人たるへし、高ノ多少ニ而もわつか三四人相付候儀ハ申分有之候、殊ニ證人衆之内、親父之賦よりハ人数之相重ミたる衆も有之候、大膳殿・又五郎殿ハ両親父之地賦ニ而候間申分有間敷候、兵庫賦百七人ヲ八十人ニ相下り、数年證人役相勤候時ハ、兵庫地賦八十人たるへく候處ニ、又八郎一人迄ヲ親之作法ヲ被相替候儀ハ何としたる御相談ニ而候哉、難心得候、證人衆惣別親之作法ニ被相替候者、

其儀たるへく候、又八郎一人迄之儀ハかつて合點不申候、此儀達而御理り申へく候由之事、申候事則城之介殿ニ而御返事御座候ハ、勘解由殿より御家老衆へ御相談被成候、近比御尤之由御申分ニ而候、　殿様御上洛前ニ御帳相堅り候間、御談合ヲ被相極、御耳ニ立度有之候者、御帰國之時分被達上聞へく候、少も如在有之間敷候、若公儀御取籠ニ而延引候者、御帰國時分、新左衛門前より城之介殿迄理り可申候由被申候付、罷帰候事、

一右御返事、申ノ七月廿二日ニ於鹿府喜入久右殿・鎌田太郎右衛門殿ニ而、地賦ノことく八十人ニ落着之御返事有之候、子細ハ御屋敷之日々記ニ相付置候、

一申ノ六月十八日ニ鹿府参候而、御にし様御こし入之日取、八月十八日九日たるへく候由、二階堂城之介殿ニ而披露仕候、罷帰候、但三ツ盃ニ而御三献可上之由申入候、

一同六月廿九日ニ可参候由、鹿府より被仰越、諏方玄右衛門殿ニ而、御こし入之日取、八月廿八日九日可然候由被仰出候、

一七月廿一日ニ鹿府へ伺公仕候、兵州老・筑後老へ罷出、御祝言事萬御尋之書立差上候、先可罷帰候、彼方より書立ニ押札被成可被遣之由候間、罷帰候、兵部殿へ進物こねり一籠、筑後殿へ数寄てぬくひ進上申候、

一申ノ六月十九日ニ、新納仲右衛門殿へ御夫婦御入被成候、御盃之臺上り候而より荻野良右衛門可被召出之由、御意之通新納慶左衛門被申候、是ハよそ之人之由候、おく方へ可被出事、合點難仕由申候、就其不被罷出候、其後濱田三左衛門殿・新納善左衛門殿へ申候ハ、一昨晩良右衛門申候儀よそ之人之由候間、おく方へハいかゝ之由申候、其様子ハ、先日日野内膳殿所へ御入之刻、執印久左衛門殿よそ之人之由候而おく方へ不被掛御目ニ候而、　又八郎様表ニ御差出御酒被給候、然時ハ良右衛門も吉松衆之由候間、おく方へ被参候而ハ内膳殿可被存所も可有之と存候旨申候、其外此家中之衆おく方へ被参候衆、多勢無之候、彼是ニ存合同心申さて有之と申候事、

一申ノ八月廿四日、　太守様御光儀ニ付、青銅二百疋ツヽ、

新納仲右衛門・日野内膳・曽木新左衛門へ被下候、
一同日、阿多藤十郎殿を以、新左衛門之儀ハ別条ニ被仰付之由候而、御肴一折・御樽一荷拝領仕候、
一同廿六日、西おく方ニ而於御前ニ御上下拝領、
一同廿九日、小村より鎌田新左衛門殿御使ニ被越候ニ付、新左衛門事、氣色悪敷被聞上候、養生ノ為ニと候而柿一籠拝領、大山三郎右衛門殿迄状を以御禮申候事、
一九月五日ニ小村へ参、　太守様へ松たけ五本一籠・柿なし一折致参上候、御取次和田讃岐殿・御近所衆へ干塩一重ツ、遣し候、安藝様へこぬか漬ノゑぶな五ツ、
一同廿一日、武庫様・又八郎様、おく表申請、拝領之御酒びらき、御座新納仲左殿夫婦・阿多藤十郎殿・山野殿・新太夫殿・お竹殿・大藤江殿、以上十三人、
一十月三日、木ねり一籠・色柿一籠　太守様へ進上、
但西奥御前ニ而御かわらけニ而御酒被下候、
一同十二日、鳩二羽、　太守様より拝領、御使おすき、
一十月十三日、木■嶋一端、　太守様より拝領、御使財部淡路殿、
一同十四日、たこ・法連菜・せり・おやし・大根拝領、御座、御西様　兵庫様　又八郎様　兵吉郎様　権三郎様　安藝様　新左衛門
一同十六日、御城東於御前ニ茶わん二ツ・肴鉢、女房へ油入壱ツ拝領、
一川貝一籠ツ、　市正様・鎌田左兵衛殿・財部淡路殿へ遣し候、
同日一いか三盃　伊東三左衛門殿へ遣し候、一柿一籠　和田讃岐殿へ、
同日一野菜三色　霧島座主へ、
同廿三日一杉重一遍・ぬり樽壱荷酒廿五盃　御姫様御袋へ、
同廿八日一うねさし足袋五足　御袋へ、　真綿一わ・帯一筋　御袋より女房嫁へ、
同日一同三足　おちやいへ、
同十日一兵吉郎殿・権三郎殿御奉公之儀、鎌田左兵衛殿ニ而致披露落着候事、
同三日一御西様御座可為相定由、諏方采女殿ニ而申候、伊勢兵部殿直ニ被仰候ハ、此度は先可被仰上儀御無用ニ候、

おく方ニ而御座之さし引く口能有之間敷由、御老中衆思召寄之由候ニ付、其儀ニ御座候事、

一申ノ十一月十六日ノ朝、鹿嶋御臺所ニ而、新納大蔵殿を頼候而、　太守様へ御内意申上候ハ、此度又八郎居所、不慮之火事出来候ニ付、作事ニ打立可申様無之候、御船銀四十貫程御借可被成候、兵庫殿高之内地方五百石可被指上置候、後年御算用合候時分可被返給事、御おんたるへく候由申上候、頓而鎌田筑後殿可申入之由候ニ付、筑後殿へ於御城御直ニ申上候、當分借銀廿八貫め程御座候由申上候、同廿二日、諏方采女殿ニ付御老中より、今御座ニ而御返事被仰出候ハ、新納大蔵を以御内意之儀、當分御蔵へ銀子無之ニ付、近比御残多儀ニ候へ共不相調候、就其作事等いかにもかろく被成候而可然候、材木等御給之由、采女殿咄ニて候、其後御物座より書状を以松角五百本御給候由被仰越候、

一申ノ十二月より鹿嶋へ百目掛銀一前加候、東郷十左衛門殿主取、外ニ未ノ三月より初候百目掛銀一前、喜入久右衛門殿主取、

申ノ十二月廿六日
一銀子百五十めハ西別府ノ喜左衛門身ノ代渡候、
同日
一同六十めハ岩穴口ノ覚助へ渡候、
十二月廿九日御歳暮之御禮
一山いも一折　西奥方、一小鳥三羽　一うねさし足袋二足　御姫様、

酉正月六日
一翁介身躰之儀、白尾利右衛門殿ニて申上候、　御前御出合之儀被聞召届候、一段之仕合ニ被思召候間、早々鹿嶋へ伺公仕候而落着仕候様ニ可申由、御返事被仰出候、

一酉ノ正月八日ニ、塩鯛二ツ・ぬか樽壱荷但四十六疋市正様へ、同おく方へ濱くり一躰、

一明暦三年酉ノ正月十日ニ、鹿嶋奥御前ニ而、　光久公へ翁介十一才御目見得仕候、御取成島津市正殿、通番前より比志嶋彦六殿同心ニ而奥へ通候、直ニ大山三郎右衛門殿・財部淡路殿、善行院へ翁介召烈候而、御目見得之首尾申候事、

正月十一日
一中紙二束、市正様へ、翁介御目見得以後進上候事、
同日
一筑前老・兵部老・筑後老へ参候而直ニ申入候、我等三番目ノせがれ、此度市正様御取成ニて御内證ニ而昨日

御目見得仕候、以来御奉公申上候者頼存上候由申候、筑後老へハ掛御目ニ候へ共、御直ニ不申入候ニ付、善行院へ頼置候、町勘解由殿ニハ御出仕故、八代権右衛門殿へ右之趣頼置候、

同十二日
一圖書老へハ金山御帰宅ニ付、當町十蔵宿ニ而、翁介儀御直ニ御内證申置候、

同廿二日
一良順坊下女、此方与ニ相渡候ニ付、源右衛門殿・弥五左衛門より市来勘解由兵衛殿ニ而良順方へ被申渡候、新左衛門よりハ鬼塚久右衛門殿・米良弥次兵衛殿を以良順坊へ申候、右下女、此方へ相渡り候間、御方へ可被相渡候、口事之落着ハ如前ゝ御曖ニ被任候而可然候、去春相済候時分、其女三百め程可仕之由候付、半分ニシテ百五十めと御座候、當分ハ人高直ニ候間、四百め程可仕候由候間、其半分ニシテ二百目たるへく候由申候、良順方五人与衆・門中衆へも、其段申渡シ、いつれも帖ニ被入候而相済候様ニと談合申候事、

同廿三日
一良順坊より右返事被申候ハ、此中下女之儀ニ付、御無心申上候處ニ、此度御与頭被入御情、下女良順方へ被下候由忝奉存候、對御与頭此入組さし捨申候、何方へ可被召置共かもひ申儀ニて無之候、初より下女ヲ可被下由申候、此上ハ銀子ニかもひ申儀ニ而無御座候条、代銀之儀ハ曽而請取申間敷由被申候、

一右返事、則良順方へ申候ハ、女之儀与頭へさし上、口事篇被相済候由、至而尤ニ存候、乍去銀子請取申間敷由被申候、難心得候、此中与頭衆情ニ被入、原田郷兵衛方よりたしかね候女ヲ申取、良順方へ相渡し候而、身之代之所ヲ御曖ニ可被任之いけん可申ためニこそ情ヲ出し、下女ヲ此方へ申取候處ニ、口事篇ハ被相済候、銀子ハ申請間敷由被申候事不心得候間、是非共御曖之筋目ニ銀子被請、無出入被相済候事、大慶ニ存候由申渡候、右使之衆四人ニ申含候事、使市来勘解由兵衛殿・吉野舎人・鬼久右衛門・米弥二郎兵衛、

一正月廿四日ニハ、良順御役所へよび候而、いけん与中より被仕候へ共、弥銀子之儀不相済候ニ付不相調候事、

一同廿五日、御屋敷ニて内膳殿・仲右衛門殿へ申候ハ、良順方下女札与頭へ差上候而、此口事相済候、初より

下女ヲ可被下之由申候、銀子之儀ハ不申候間、少とても代銀請取申事不罷成由、此三日与中衆・門中衆寄合いけん候へ共、右之通ニ候て手札与頭へさし出され候、いかゝ可仕哉と内談申候、仲右衛門殿・内膳殿よりも、手札之儀ハ先如此中良順手前ニ覚悟可被申候、此度太守様御立被成候者兵庫様へ御耳ニ可被立之由、与頭より良順方へ可申渡置之由候間、此首尾則座ニ而、鬼塚久右衛門・米良弥兵衛へ、右首尾可被聞置之由申候、良順方へハ市来勘解由兵衛殿・吉野舎人殿ニて、弥五殿・源右衛門殿より被申渡候事、

一右口事篇、去年之嘆ハ半そん之嘆ニ而候事、此度下女原田郷兵衛より与頭へ被相返候ハ、有川長右衛門殿内證之肝煎を以被相返候ニ付、右不相調候、首尾正月廿五日ニ御屋敷ニ而内膳殿と参合候而、長傳左衛門殿へ申候而、長次郎殿方へも傳左衛門殿より右之首尾被申候事、

明暦四年戌ノ五月より萬覚書

一六月廿二日、武庫様御直ニ被仰候ハ、此度江戸より又八郎様状被遣候、慶左被申様ニ付、兵吉郎殿と中悪敷候つれ共、只今ハ御入魂之由被仰下候間、此度下向候而より直ニ御尋被成候へ共、其理何分と不被仰候、いか様之事ニ而候哉と御尋ニて候、左様之儀ヲ我等ハ不存候間、又八郎様へ我等前より御尋可申由申候而、同廿三日ニ又八郎殿へ御尋申候へハ、左様之状被遣候事御覚無之由被仰候、乍去いか様之儀も慶左不被申候哉と御尋申候へハ、九郎兵・市右衛門口悪敷人ニ而候間、彼両人ニ御縁篇可有之由、慶左・利右衛門被申候由被仰候間、我等も今少分別可申候、又八郎様も今少御分別可有之候、右之状之首尾分明ニ不分候へば、武庫様御合點有之間敷由申置候事、

六月廿三日
一又八郎様へ御内談申上候ハ、右両人之口悪敷由被申候を出し候者、事六ヶ敷可罷成候間、去年以来兵吉郎殿へ執心之人御座候、左様ニ内意之御咄御座候間御縁遍可有之由被申候ヲ、又八郎殿へ御心得そこないニて、一節兵吉郎殿ヲさしのけ為被成と被仰、尤ニ候、是ハ

若衆数寄之事ニ候間、御直ニ難被仰上ニ付、此中其儀ニ候由御申被成候而可然由申候ヘハ、又八郎殿御同心有之候事、

同廿六日
一右之通、武庫様ヘ申上候、尤左様ニ可有之候ヘ共、さし付寺ヘ御宿之時より中悪敷由候、愈弥左衛門被参候ハ、新屋敷之事可為由御意候、又八郎殿より御状ハ、何比ニ而候哉と御尋申候ヘハ、此二月ノ状之由被仰候、扨者右之首尾ハ會申候間、御状之御ふしんハ無残所候、其前之様子ハ、両人より両人ヲそしり為申事有之之由候、それハ役ニ不立候ほうばいヲそしりたる迄之儀ニ候間、此儀相知候ヘハ、大口事ニ成事ニ而御座候条、御他言有ましく候、先御状之一まきハ分明ニ候間、又御所存も候者重而可被仰付之段申上候、則又八郎様ヘ右首尾申含候事、

一翁介、川上五兵衛殿ヘ養子落着之事、萬治元年戊ノ十月六日ニ麑嶋ヘ召例(列)罷越、六日ノ晩ニ五兵衛殿宿元ヘ見舞候而祝有之候、五兵衛殿ヘ鳥目百疋、袋ヘ中紙二束指上候、但太守様より五兵衛殿ヘハ黒葛原少右衛門殿ヘ被仰渡候、手前ニハ市正様ニ而被仰付候、御禮申上候ヘハ、外城之者麑嶋ヘ被召移候事、御法度ニて候間、太守様より直ニ表ニ可被仰出之由承候間、五日鹿府逗留申候、其中ニ五兵衛殿之袋煩ニ付中戻り仕候事、

十一月十二日
一太守様より生鯛二ツ拜領、本田九左衛門殿手紙ニ而かりや被遣候、同月十四日ニ麑嶋ヘ致参上、御禮申上候、濱ぐり一目籠進上、

十二月二日かこしま於御臺所ニ
一太守様より御鉄炮之きじ二ツ拜領候、有村六兵衛殿より請取候、戌ノ十一月、権三郎殿、麑嶋之御供衆池田源次・寺師八介・上床慶之助、此三人賄ノ食不足由候而、使ヲ立らうせき被申候由、其聞え候間、麑嶋ニて林九郎兵衛を以犬童吉左衛門ヘ内證ニ而尋候ヘハ、其通ニ候、調衆・筆者衆迄之食ヲ出し候ヘ共、不足之由被申候、日数八日ニ三人前ニ米一斗三升相重ミ申候由、九郎兵衛殿ニ而承候事、

一同月、鬼塚久右衛門ヘ右之通ノらうせき有之由候、定而賄衆之手前ニ聊尓可有之候間、賄之様子可被書出候、せんさく可申由申渡候事、

一それより久右衛門より返事無之候ニ付、十二月廿二日ニ御兄弟麿嶋へ御越ニ付、林九郎兵衛・有川狩野へ申渡候ハ、右之通之出合有之候、いつれ此儀ハせんさく可有之候、其内又候哉、ヶ様之出合有之候へハ、重り候而六ヶ敷候、せんさく極り次第いかゝへ可相済候、先其内世間定り之賄ニ此度より申渡候由、竹内八右衛門を以、右両人へ申渡候、其時之若き供衆、何れも同前ニ申渡候、いか様ニ而も御下知次第可仕之由被申候ニ付、長傳左衛門殿へ申渡候而、彼方より臺官へ被申渡、此度よりもり切食ニ相定候ハ、右三人之らうせき故如此候、其前ニハ色紙殿食鉢ヲケチラカされたる由候、彼是賄ニ付、氣任有之ニ付如此ニ候、

一万治元年戊ノ閏十二月廿五日ニ、翁介　御目見得、奥御前納戸衆小嶋甚兵衛殿取次、塩鯛二ツ・御樽一荷進上、新左衛門中紙二束進上、翁介御座ニ、安養院権三郎殿・佐多三次殿・傳心雲斎伺公、御杉其外御女房衆被居候、川上五兵衛殿・新左衛門同前ニ被召出、御酒被下候、

一同廿六日ニ五兵衛殿召例(列)、評定所ニ而御老中へ翁介御目ニかけられ候、同廿七日ニ翁介同心ニ而罷帰候、同廿六日ノ晩ニ五兵衛殿宿ニ而祝有之候、川上助二郎殿・川上四郎右衛門殿相伴、市来八右衛門殿後ニ御座候、付衆志弥之允殿見舞、

卯月廿六日
一波多与兵衛殿高四拾五石相直候ニ付、以来ハ二男分ニ高五拾石、桑畑久太郎へ可相付候間被聞召置候様ニと、濱田三左衛門ヲ以披露申上候、

同廿五日
一又八郎様御夫婦間ニ付、彼まし水一大事ヲ申候哉、麿嶋之御袋、何と色ハ不被仰候へ共、さりとてハ無情又八郎様御心中候由、奥方へ被仰候ニ付、我等も武庫様御夫婦より直ニ御内證承候、

同廿六日
一阿多藤十郎殿ヲ此方へよび申候、内談申候ハ、此度又八郎殿御夫婦入組ニ付、別而被入御精事能済候而目出度候、就其何そ一大事ヲまし水申候哉、御袋ノ奥方へ何とハ不被仰候へ共、きよくなき様子有之候、其後西ニ而毒薬、又八郎殿紹甫へ御尋被成、御存之様ニ出入候、いつれ又八郎手前ニ様子有之候哉、まし水落身

ニ成候而偽ヲ申候哉、とかく又八郎殿へせんさく被成、又八郎殿手前ニ如在有之ハ、武庫御家ノたをれ口御座候間、御分別可有之候、御姫様ハ御給り之儀ニ候間、舎弟両人有之候間、御意次第ニ縁与ニ而跡目ヲ可申付地ばんニきハまり候由、藤十郎殿へ申候、

卯月廿六日

一藤十郎殿被申候ハ、以之外之儀、夫ハ女儀方ノ出合ニ候、何ニよつて又八郎殿悪事ヲ可被思召立候哉、とかく御夫婦間さへ能候者無口能、於此一儀ニハ以来藤十郎殿可承候間、御心安被思召、又八様へ御せんさく曽而有ましく候、とかく武庫様御地ばん之通候、御袋へハ内證可申置之由候事、

同日

一就其申候ハ、いか様ニても藤十郎殿さし引次第可仕候、左候者状ヲ壱通可給候、それヲ證跡ニ仕、又八郎殿へ内證ノ御せんさくヲ御延被成候而、御夫婦間之様子ヲ御見合被成候而、可然候者可申上と、藤十郎殿へ申合候事、

同廿七日

一右返事、於新地藤十郎殿被申候ハ、昨日之儀、袋被為聞おとろきニて候、新左衛門へ對面候而、涼しく可被仰合之由候間、奥へ参、御袋・新太夫との・山野殿・お竹との・藤十郎殿・新左衛門、座六人、袋被仰候ハ、武庫様御地ばん被聞、今朝食も不参、おそき御昼、先日おく方へ又八郎様きよくもなき御心中と承候ハ、先月廿三日より御一代御精心被成、御夫婦別角ニ御成可被成約束、まし水ニ被成候由、まし水申候、又御作法も如其有之候、就夫きよくもなき事と無情事とおく方へ申候、其後西へ御出之時、右首尾ヲ可被仰と被思召候へ共、無仕合候而、其首尾無之候、少も別ニ様子無之候、武庫様被思召立候處ヲ、新左衛門より可然之様ニ可申候、少も別條無之由御座候間、尤左様ニこそ可有之候、左様ニ御座候へハ、いつかたへも目出度事ニ而候、則御心中之通可申由申候而罷立候、

同日

一則武庫様御夫婦へ申候、別ニ様子無之候哉、無紛所由被仰候（扨まし水毒がいノ事ハ、落身ニ成為申様子ニ有之候と聞届候、）

同日

一則新地へ参候、藤十郎殿ニて袋へ申候、御内存之通申入候へハ、尤左様ニこそ可有之候、左様ニ御座候者別ニ無紛所由申候、御返事ニ一段目出度候、此儀又八郎

様萬一被聞召付候者、袋口かましき事被思召へく候間、たがい他言有之間敷由申候而罷帰候、尤御袋・御女房衆三人、直ニ申合候間、其上ハ藤十郎殿之状入ましき由申候事、就其武庫様申済候事、

六月九日
一今度御支配ニ付、小木原村之三十石ノ門壱ツ指上候而、北俣村之内大嶺ノ西屋敷■名ヲさし付申請候、小木原荒田村之内ニ高四十九石、但高ノまハしニて へ山有之ニ付、御蔵ヲ立ニ付如右候也、但荒田村へ高五拾二石一斗五合出候、

手翰

(割印)
一銀子六百目者　　山之上六兵衛殿
(割印)
一銀子三百目者　　折田市左衛門殿

右者、垂水より借用之銀子九貫目之内を以、利足壱割(分)壱部ツ、ニして為借銀可被相渡候、郡方本銀九貫尤各手前ニ借状可被取置候、利銀八年拂たるへく候間、其心得尤ニ候、以上、目返弁候時分、本利相揃堅固ニ可有返済者也、

万治二年亥十月九日　　曾木新左衛門

丸目仲兵衛殿

山上六兵衛殿

亥ノ十月廿三日
一又八郎殿、武庫様御名ヲ被為立候由候ニ付、川上慶左衛門・白尾利右衛門之儀より本ニ成候ハんと存候、其上利右衛門・慶左衛門所へ又八郎殿御出可有之由、被仰通傳聞候ニ付、江戸より又八郎殿御下シ被成候御状申下シ、うつシヲ又八郎殿へ御目ニ者いかにも被為行當候、阿多藤十郎殿へも見せ候而申候ハ、又八郎殿御あやまりニて候、此状一ツニて、右両人武庫殿大方ニ被成候間、此度よりハ又八郎殿御あやまり被成、武庫様ニも御申分被成、御免を以慶左衛門・利右衛門方へも有筋ニ御あやまりノ通被仰聞候付、尤ニ存候、弥其通ニ御相談御申可有之、新左衛門へ御まかせ被成候者、御使可申候間、左様ニ御心得可被成由、申置候、

同廿四日
一新地之様ニ可参由、又八郎様より御使被下間参候、昨日之儀、弥以御あやまり被成候、武庫様御前ヲ御頼被成候間、いか様成共新左衛門へ御まかせ被成候由候、

藤十郎殿其座ニ被居候、於其儀(猶カ)心得申候、尤御申分之御使我等仕候へとも、利右衛門・慶左衛門躰之儀、新左衛門も存候ハんつれ共、かくシ候ハんと定而可被思召候間、藤十郎殿へ御使御頼被成候而、尤ニ候由申ニ付、御申分之御使、藤十郎殿被請取候、御口上ハ川上慶左衛門・白尾利右衛門儀ニ付、去年新左衛門ヲ以承候へ共覚不申候間、其儀ニ申上候處ニ、去年二月下シ候状ノウツシ新左衛門ミせ候ニ付、あやまり申候、少も覚不申候、於江戸見物なとへ折々罷出候時分、右両人しゐて留申事も候、其時分彼両人ヲ悪敷存候而罷居候時分、酒ニよい候而書申たる状ニて御座候ハん、無是非候、此中武庫様御手前ニかゝり候而御座候事残多候、右両人少も無奉公不申候へ共、被聞召分、如前々被召仕候而可被下候、此上ニも無御心元被思召候者、神文ヲ可被指上候、御免ヲを以右両人ニも、又八郎しハざ迄ニて、此中武庫様被思召加すめ候通可申分之御口上也、但藤十郎殿へ申合候も、先新左衛門前より武庫様御内證つくろい申候而注進可申由、罷帰候、

十月廿七日

一武庫様へ御直ニ右首尾申上候、藤十郎殿・又八郎殿御あやまり之御使被請合候、追付可被申候間、先段事々御かもいなく、此一巻ヲきハヲ立見事ニ被相済、慶左衛門・利右衛門如前々被召仕候者、此中悪行ノ御談合ニ与仕候衆も必しつまり可申候、先御覧可被合之由申候、御合點候、奥方も御指出被成候間、其段申含候、中村表右衛門ニも後ニ御座ニよび出し、其通申聞候、此度又八郎殿へ志かりヲかい候衆五六人有之由候、其内両人本ニ而候て、善左衛門儀も侘ニ付、在江戸ノ御供可被指置候由申候、権三郎殿御近所之人儀も、次第ノ事ニ可被成由申入置候、それより直ニ新地へ参候而御内證御つかい候間、御使之首尾可申上之由藤十郎殿へ由候、今日ハ丸ニ而も明日可申上之由候事、

一同廿八日ノ夜ニ入、曽伊右衛門ヲ以藤十郎殿より承候ハ、今日又八郎様より御申分ノ首尾、武庫様へ申上、慶左衛門・利右衛門手前被聞召分、又八様御状も被相返候、則右両人よび申候而、又八郎様より被仰分候通、右両人へ可申渡候由候事、

一同廿九日ニ慶左衞門・利右衞門方、鬼塚久右衞門ニて、昨晩阿多藤十郎殿ヲ以、又八郎様御理り承候、無残所由承候、それより新地へ参候而、藤十郎殿へ會候而様子承候、弥無相替儀相済候、とかく武庫様・奥方方へ被召出候而より新地へハ可被召出候由、藤十郎殿被申候、同晩者慶左衞門殿・利右衞門殿、御酒持参候而祝ニ被参候、

万治二年亥ノ十二月廿四日ニ初ル

一三百掛銀拾六人、主取相良左近殿・有川弥兵衞殿・新納喜左衞門殿、右内五前、内一前ハ物奉行衆存、一前ハ濱田三左衞門存、一前ハ八代次左衞門存、一前ハ中村表右衞門存、一前ハ曽木新左衞門、五ツ目ノ鬮さし付、毎年霜月十三日、一年ニ一度、

正月廿二日

一中村表右衞門より川野吉兵衞ヲ以、民部老より使参候、就其御用候由被申ニ付、表右衞門所へ見舞候、昨日出水より使参候、民部殿より御内證候ハ、先出水之風聞ニ付、兵吉郎殿ヲ兵庫殿御跡次ニと被思召由、名字ハ不相知候狩野と申人、又八郎殿へ為被申上候由候、就其御親子之御中しかと無之と風聞申候、萬一左様ニも候者、御分別ちがいニ候、就中奥方御分別之入處ニ候、無心元被思召候間、表右衞門へ御尋之由候ニ付、かつて左様之御心持無之候、去年九・十月時分、狩野別而又八郎殿御かつてニ而候ニ付、ふしんニ被思候衆御座候、然者兵庫様御夫婦御間ニ御念遣有之間敷候、爰元之様子細々申含、使ハ相返シ候、此段ヲ奥方へ可申上哉と、表右衞門被尋候間、御心得之可入事も可有之候間、早々御内意可被申上候由申候而、罷帰候事、

子正月廿日

一又八郎殿、来月四日御立ニ付、武庫様より新納仲右衞門・新左衞門御使被仰付、御口上之様子、急度御上洛候、江戸火事しけく有之候間、左様之時分、諸人之心得、前ニ替り心得入事ニ候、専目酒ニよわせられ候時分ハ諸事さし引成ましく候、随分其御心得可入候、此度仲右衞門老者トシテ長谷場傳左衞門御供申候間、前条可被申時分ハ一段御念比可有之由候事、

同日

一就其武庫様、我々両人ニ御心底之程御咄被成候、世上風聞にハ、又八郎ヲ腹ニ無之、兵吉郎ヲ跡目ニと存候由、有方より注進可有之候、先我々も分別申候而見可

申候、又八郎ヲ専目ニ被思召、御姫様ヲ申御(ママ)申請被成候上ハ、何事ニ付左ニ可被思哉、扨曽伊右衛門ヲ以又八郎へ御いけん被成候、返事も不被成候間、伊丹六左衛門ヲ被相添重而被仰候へ共、御同心無之候、其後仲右衛門・新左衛門両使ヲ以為被仰儀候へ共、無同心候、ケ様ニ氣任ニ於有之ハ、何事も不作法ニ可有之候、然時ハ世間等ゆるし申間敷候、殊ニ　薩州様御前遠候者、加治木ヲふミ留ハ成ましく候、然時ハ武庫之いか様ニ被思召候而も跡目つかれ候事成ましく候、然時ハ何ともなげかしき事ニ而可有之、時折〻被仰候ヲ兄弟衆・女房も被聞、左様儀ヲ又八郎へ申聞せ候而、世上にも風聞候哉、能上にも能様と被思召候而被仰候事ニ候と、武庫様御咄ニて候、右段〻又八郎殿へ子細ニ申上候事、

子正月卅日
一又八郎殿御返事ニハ、御意之通承届候、随分其心得申へく候、就其御心底之程ヲ承、忝奉存之由御申ニ付、則武庫様へ右御返事申上候事、

一喜入久右衛門殿夫婦被為参候ニ付、新地納殿衆より山元十左衛門ヲ以、内儀初而ニ候間、御姫様より御引出物可被遣候、指引可申由候、佐土原八右衛門殿被居候間、指引可有之由申候へ共、八右衛門殿ハ及不申之由候間、我等申候ハ、兵庫様より錢二貫文、奥方より百疋被遣候間、御姫様よりも百疋可然候由申候、又山のとの・御竹より被申候付、(とて)寺師市左衛門被申候ハ、百疋少分たるへく候由、其時申候ハ、兵吉郎様御□ニ并候てハいかゝ敷候、御部や住ニ候間、向後其心得可入候間、百疋ニ而可相済由申候、次目寺師市左衛門被参候而被申候ハ、久右衛門殿被為立候而、山のとのより承候ハ、御袋ノ御指引ニて、御たしなミノさや一端、内儀へ被遣候、はせを二端、孫とのへ被遣候、百疋之錢ハ其まゝ御座候間、御蔵へ被返候ハんや、納殿衆分別被成候由候ニ付、先錢ハ御蔵へ可被納由申候、

子卯月廿三日
一市正様被仰候ハ、根占右近殿去年向之嶋ニてしゝヲいさせられ候、其後もきじ・くびかも被射候由、嶋より(なと)申承り候、筑前殿も被為聞せ、もはや過去たる事ニハ候へ共、武庫殿よりきひしく被仰候而可然候由、我等

前より申せニて候、それより筑州様へ参、掛御目ニ候、筑州被仰候ハ、いつれも此儀可相知候間、御下向之時分、武庫殿より御申出被成候者、右近殿御科かろく可有御座哉と、市正殿へ為被仰候御咄ニ而候、則罷帰候故、市様へハ此首尾御尋被成申候事、

同日
一筑州へ御直ニ申上候、岩原并木御役所之御返事、鎌田慶右衛門殿ニて相済候間、切可申由候、其通たるへく由被仰候事、和田十助殿其座ニ被居合候、

同日
一市正様被仰候ハ、伊東金兵衛郡元御腰元之下り女ニ近付候而くわいにんニ成候、金兵衛色〻下り薬のませ候へ共、其しるしなく候而しらしニ而候、御袋様も殊之外御立腹ニ候へ共、むかし之様ニ被思召候而ハいかゝ敷候、新左衛門へ御合被成、可然御調可被成之由被仰候、先此儀ハ他言なしたるへく候、大場吉右衛門より被申候ハ、吉右衛門よりハ右一儀ハ被申間敷候間、其心得可有由御内意候而より、吉右衛門殿よびニ被遣候、

卯月十三日
一大場吉右衛門殿被参候、市様も御同座ニ而吉右衛門殿被申候ハ、伊金兵衛御袋御意悪敷候由専一候へ共、出米油断被申候而于今皆済御取無之候、其上はそん銀も一ヶ月油断候而、利銀相付被成候、次ニ花段其外屋敷ノ竹なとも心ノまゝニ被仕候、其上あまり▒▒まゝニ被申候へく候、今様ニ候時ハ、金兵衛御奉公方御合點無之由候間、先一節ハ郡元へ参上無用たるへく候、左候而吉右衛門よりハ緩〻と申上候而御▒もくつろぎ候ハゝ、仕合候、弥御いきとをり御座候者、次第ニ代り役人市様より御申可被成候、此度くり野ニ薬買ニ被越候間、直ニかち木ニ被召留候而可然候由、吉右衛門殿より承候間、相心得候由申候事、

子卯月廿一日
一阿多藤十郎殿・佐土原八右衛門殿、勘兵衛借銭之事、松かき扶持之事、濱田三左衛門ヲ以御内意申上候ニ、直ニ御相談候、先松かき扶持之儀者、其儀たるへく候由候間、則曽木伊右衛門ヲ以藤十郎殿より様子承候ニ付、衣將扶持、新地御女房同前可出候、下女なとノ儀ハ、武庫様被聞召候ハてハ不成候、次第之事たるへく候由申渡候、藤十郎殿身躰之儀ハ御袋へ被仰含、小嶋甚兵衛殿へ相談被成、先今般ハ被付置候様ニ御申尤ニ

候、左候者麑嶋納戸ノ代り可有之候間、少分なから知行五十石ニ、只今切米十石御合力可被成候、其上ハ武庫様之御身躰ニ者成かね候由可被仰入之由▒、八右衛門事ハ中村表右衛門并ニ知行四十石、甚兵衛ハ只今切米四石ニ御捨免被成、御里役ニ被召仕候者、少分なから御里役切米弐石七斗たり儀可申候間、其段御相談被成、右之両人之儀ハ次第ニ藤十郎殿へ相談可被成由、御袋へ可被仰入由申上候ニ付、いつれも其通ニ御袋へ内談可申由御意ニ而候事、

子ノ卯月廿三日
一阿多藤十郎殿儀、御袋へ直ニ申候、小嶋甚兵衛殿へ被仰含、太守様ニ御耳ニ可被入候由、但納戸衆之代り可有之候、左候者藤十郎殿へ相應ニ兵庫殿より御合力可有之候間、其心得候様ニ甚兵衛殿へ可被仰候由申候、知行之儀ハとかく不申候、過分之儀ハ兵庫殿御身躰ニ而ハ不罷成候間、相應ニ御合可被成候由、御袋へ御内意申置候事、

同日
一佐土原八右衛門殿へ知行四十石可被遣之由、藤十郎殿へ先内談候由申候、忝儀ニ候、八右衛門方へ申渡候而、其首尾可申由被申候、御小者衆甚兵衛殿御姫様より御捨免候者、役儀方ニ而増扶持可有之様ニ可被仰付候由申候事、

子ノ卯月廿八日ノ夜
一先月権三郎殿より鬼塚久右衛門ヲ以、有川狩野御所望ニ候間、我等より武庫様へ可申上之由御頼候、相心得候、御使トシテハ申間敷候、我等前より可申上由、御返事申事候、就其中村表右衛門ヲ以、狩野身躰之儀御内證申上候ニ付、今晩於奥ニ御夫婦様直ニ御相談申上候而、狩野之儀、権三郎殿へ被相付候ニ相極候、則権三郎殿へ狩野之儀申上候ハ、武庫様御意ニ而候、狩野前々より被召仕候間、此度被相付候間可被召仕候、若々無作法之儀共有之候者、被相付候而も武庫様御指引可有之候間、其段可被聞置之由御意之通申入候事、

子ノ卯月廿八日ノ夜
一有川狩野へも、則直ニ申渡候ハ、権三郎殿へ被相付候間、向後慥ニ御奉公被申候様ニ御頼被成候、若無作法之儀共有之ハ、何時も御指引可有之由堅申渡候事、

子五月十八日
一木キヨヲ御調被成、念佛ノ御つとめ、御里方ニ聞へ候間、御縁(遺)慮可入候、此頃義堂和尚ノ堂ニこゝつぶせ仕

候由申候、ケ様成も武庫様よりあまり御馳走過候ニ付、悪事出来申儀候間、能ゝ御分別入可申由、濱田三左衛門ヲ以御内意申上候事、

一子七月十日　朝五ツ半時より同十一日ノ六ツ時ノ御立之由候、魔嶋かりやへ　御光儀被遊、太守様御前ニ而、木綿二端拜領、但おすき取次、

一九月朔日段土村浮免之内、木田村餘地仕明地ノ替地ニかり支配仕、竿以後又木田村へ支配可仕由、御直ニ申上置候事、

一九月朔日山上六兵衛、郡方達而侘仕候、先段土村へ二百石之當年之増高、六兵衛手迫之儀ニ候、脇よりいか様ニ申候而も一かどノ奉公仕候、田畑之さし引ハ随分こうしやニて候、右侘事之通、重而使ヲ以可申上候、御意次第ニ可仕候間、先御内意可被聞置之由、御直ニ申上置候事、

一九月御支配之時分、地下知行取衆之地方不足ニ付行當り候處ニ、山上六兵衛地下之取分之内、高廿石可指上候間、小山田村へ可被仰付由被申出候、いつれも小山田ニいやかりニて候處ニ、被申様一段之儀ニ候間、如其支配有之候而、六兵衛へ地下取分高十石之内ニ春日水流畑高五石程さし付ニ六兵衛へ令支配候、是ハ川原ニて、畑ニ而ハ何もなき所ニ候へ共、仕明地ニ可罷成候、先手前より被仕明候者、御竿以後ハ増高之儀ハ定而十石程も可有之候間、六兵衛事、御仕明方ニ御奉公被申候、御為ニ成程之事候者、水流高之内増高只可被下由可被申候間、随分被仕明候様ニ六兵衛ニ申渡候事、但水流畑廿八坪程か

一九月七日春日寺道作之儀、丸目仲兵衛ニ申渡候、返事ニなしニ役所ヲ被立候間、合點不申候間、新納八右衛門證跡ニ而候、後日御相違無之様申置候、就其白尾利右衛門殿・林九郎右衛門殿・川野吉兵衛ヲ頼、侘言被申ニ付、先此度ハ用赦申通返事仕候、仲兵衛去年支配ニ牧ノ瀬殿地下ノ知行被買、地下串ヲ被取候へ共見のかし置候、其上段土切貫百日ノ普請ニ二度為見舞由候、郡奉行トシテケ様ニハ有ましき事ニ候事、

一（朝印）銀子十貫目ハ利元銀壱貫めニ付壱分月ニ利銀五匁ツヽ

右ハ此度金山御蔵銀七拾貫目御借銀之内、御借銀返弁方相渡候内、我等借用仕候、何時ニても御借銀返

弁之時分、同前ニ各〻へ首尾可申候、為後證如此候、
以上、
万治三子ノ十月二日　　曽木新左衛門
十月二日
白尾与兵衛殿
八代次左衛門殿

子十月五日
一金山御蔵銀七十貫め、九分ノ利ニシテ糸や七右衛門へ二百め御借被成候内、七右衛門より借用と名付、圖書老御入魂被仰付候、魔嶋方一割一分ニ而候、二分ノ御借銀不残拂候、八代次左衛門分別を以此借銀相調候事、武庫様ニ十月四日ニ御直ニ此段申上候而、圖書老へハ御禮状被遣候事、次左衛門へ後日御手付可有之事、

十二月七日
一肥後之薩摩問屋正左衛門持参、紙子一端・うねさし一足・きせり二通、

万治三子十二月九日
一銀子弐貫六百目ハ、川上五兵衛殿末吉諏訪方ニかりや薗之門高四拾石之内、高廿石永代ニ買取候、代銀トシテ八代次左衛門殿便ニ五兵衛殿へ相渡し候、

丑二月七日
一太守様かりや御光儀被遊、御用之由候ニ付罷出候、表御座ニ而御意候ハ、又八郎於江戸無作法之由、御横目衆より伊勢兵庫殿へ被申候ニ付、鎌田蔵人より申越候ハ、若キ者ハ一旦さも可有之候、萬一不慮之出合ニ而仕すまし候而も、仕そこなへ候而も、國之かけニ成事ニ候、専目大酒可然からす候、餘人ニ替り、兵庫殿子ニ而有之候付、就中念遣ニ候、只今者吉原せんじニなをり、其道いかにも悪事ヲ仕候由候、加治木ニ下り候てハいか様ニ而もくるしかるましく候、江戸之儀ハたしなミ入事ニ候間、兵庫殿よりも其心得可入、就中新左衛門前より、能かつてんヲ又八郎殿へ可申させ候、きツク申てハ成ましく候心得ニ而、イケンヲ可申由御意候事、則申上候、難有御意、随分其心得可仕由申上候事、但太守様よりも御上洛候間、又八郎之方ニ可被仰候由御意候事、
一内〻兵庫殿より□ケチボニ而候間、又八郎請返度由申事□、
一就其弥五左衛門ヲ使ニ可上せと武庫様申候處、其覚悟

ニ候而、二月八日ニ市様ニ参候而、右之段申上候へハ、弥五左衛門上せ候而ハ又八郎殿可被行當候、左候而萬一無分別なと候へハ大事ニ候、其上頓而帰國ニ候間、弥五左衛門ハ可召留候、御仕合ヲ以弥五左衛門江戸へ遣し候由、市正承付、右之通ニ存相留候由御申可有候、又此度海道ニても又郎(八カ)郎殿御會被成候間、新左衛門へ御直ニ御意被成通御座候間、可被(得脱カ)其意候由咄、又八郎殿へ可被仰候由候事、

(ハリ紙)

「丑二月

一江籠新溝破損ニ付、中村表右衛門方へ普請可被仕由、上野八右衛門ヲ申(以脱カ)渡候へ共、前ニ一旦掘可申由被仰付候、以来六兵衛ハ(ママ)

一於其地ハ古溝仕明郡方へ可被相談候由申渡候、

一左様ニ御座候ハヽ、前ニ様子共有之候へ共、御下知次第ニ仕へく候、左候者新溝掘候日用賃可被下由被申ニ付、則六兵衛ニ申渡候、林九郎兵衛ヲ以、山六兵衛ニ仕明地被仰候、日用賃首尾可有之由□衛門より被申候由、九郎兵衛咄ニ而候間、それハ郡方より右仕明望為被申事ニ而無之候、新左衛門分別ニ而申渡候間六兵衛ニ使ハ入間間(ママ)敷由、九郎兵衛へ申候へハ、其段表右衛門へ被申候由候事、

□(一九カ)郎兵衛ニて表右衛門被申候ハ、前ニ八右衛門ヲ以御返事申候ニ不相替候、少之所ニて候間、指上候日用賃ハ可被下由被申候、何そ別ニそこハ有之とハ不承由九郎兵衛へ被申候、」

二月十四日

一出水ニ佐五左衛門召列(ツレ)ニ参候、道具衆弥兵衛・平馬、出水ニて之佐五左衛門黄言、有川長二郎殿より弥五左衛門ニて承候、宮人ニ而候黄言、法元源八左衛門より上野八右衛門ヲ以承候、

丑三月四日

一太守様より壱部金拝領、御使おすき、

一六月五日、御姫様御入被成候、帖佐之あやつり御物(見脱カ)被成度候間、御頼被成候由、御袋同前ニ承候、御配有之間敷候、武庫様へ可申上由申候事、

一同六日、當番新納善左衛門ヲ以申上候、あやつり昨日より初り候、次第ニ御談合可有之由候而、落着無之候

事、

一同七日ニ、善左衛門へ御返事相尋候へハ、御談合有之様ニと、濱田三左衛門御よび被成候由被申候、其後善左衛門ヲ以御返事承候ハ、前ニあやつり御見物ニ参入事とハ被思候へ共、其成ニ可有之候、両人間ニ一人御供申候而、御供衆等之事、人衆ヲ可申付候事、

一則新地ニ被参候寺師市左衛門ヲ以申上候ハ、あやつり御見物一段能可有之候、此方よりこそ可被仰ヲ不被聞召付候而不被仰候由申候、則奥ニ参候へハ申叶候而、御大慶之由、御袋被仰候、

一御暇之時分、善左衛門御咄ニ被参候、佐土原八右衛門へ善左衛門御申候ハ、あやつりの御使被仰付、昨日より今日ハ二度参候而やう〳〵相済候、定而御よろこひニて可有之由被申候、聞手狩野吉兵衛、やかて奥ニ可被通之由候、新左衛門口上ニいかう相違之由、吉兵衛被申候事、

丑ノ七月五日

一中村表右衛門ヲ以、御内證之由ニ而御意候ハ、御隠居之儀ヲ兵部殿ヲ御頼被成、麑嶋へ御隠居ヲ可被成由被仰候ハ、所中ニも御隠居候ハ、かち木ハ二ツ成、兵庫殿被召仕候衆ハ迷惑ニ可及候、然時ハ麑嶋へ御座被成、彼方より御指引有之候者可然候ハん哉と被思候、御家ヲ専目ニ被思候處候、我等申候ハ、もはや御頼之儀ニ候間、其成ニ可有之候、乍去我等へ兵部殿よりも御尋ニ而候者、左様ニ申上間敷候、御隠居ニをゐてハ、先新地ニ御移り替り被成、二三年も御さし引ヲ被成、又八郎殿御作法能御覧被合候而御隠居所ハ落着可有事と、此中存候間、弥其通ニこそ可申上候間、左様ニ可被聞召置候由表右衛門ニて御返事申上候、乍去次第ニ校量仕、存寄も御座候ハ、、重而可申上由申候事、

一丑ノ五月十六日ノ夜、私宅、同六月五日ニ新地ニて太守様御意之趣、又八郎殿へ申上、就其存寄段〻申入候、御酒弥過候由承候、此中舟中ニて加子しかり候事、先日濱ニておく方よりしかり候由候間、七月六日ニハ阿多藤十郎殿へ申合、新地ニて又八郎殿へ存寄段〻申入候事、七月十一日ニ被仰出候、御使本田源右衛門殿、日野堅助殿、

一新納善左衛門儀被仰出候、則仲右衛門殿より仲左衛門殿内談候、此方同心之由候、七月廿日、御屋敷ニて長谷場傳左殿にて鬼塚久右殿・林九郎兵衛殿へ此儀いかゝ可有之と談合候、いつれも同心被申候、

丑ノ七月
一武庫様ニハ麑嶋へ御隠居思召立ハ、又八郎殿今度江戸ノ出合散々ノ仕合ニ付、　太守様より御いケン新左衛門ニ被仰付候間、武庫様よりハ可被仰出覚悟ニ無之候、とかく武庫様被仰候ハヽ、結句さし當り氣任可有之候、前々も其通ニ而、御家ノつゝき候事専一ニ候、殊更御姫様ヲ申請候間念遣ニ候、加治木へ隠居被成候ハヽ、結句中悪敷候而氣任ニ可有之候、又武庫様被召仕候者共ノため ニ成ましく候間、麑嶋へ隠居被成、相應之御奉公ヲ被成、御家老衆へ折々ニ御相談候而、彼方より御おさへ可有之トノ思召立ニ候、

八月廿三日
一又八様へ曽伊右衛門ヲ以申候ハヽ、今度御ちやい・お杉・おちよほへ、又八郎様よりも銭百疋ツヽ被遣候、初ニおちやいニ出候ヲ藤十郎殿へ被仰候へハ、さらし一疋取替可遣由為被申ニ付、寺市左衛門分別ニて一貫文遣し候由候、御袋ノ袋へハ御私(ママ)より二貫文被出候、御へや住ニ而候處ニ、武庫様よりも一貫文出候、御同前ニ可有之事ニ者無之候、向後其御心得入可申事候由申候、御心得被成候間、向後此方へ御相談可有之由候事、伊右衛門咄ニ、加兵衛殿之袋ハ御物より可出事と為被仰之由候、

丑ノ八月
一去年喜久右衛門殿内儀参上候時分、出物候由候、此方よりも一貫文被遣候、御姫様よりも一貫文可然由候而出し候へハ、納戸衆へはね戻し、御私より巻物為被遣由候、右銭ハ後、御里ノ後室ニ被下由候、

同日
一今度　御姫様御煩ニ付、おちやい・お杉・おちよほ参上候、引出物、武庫様より一貫文ツヽニ而候間、御姫様方へ一貫文ツヽ、出し候へハ、是ニてハ不成合由候而、御私より一貫文相添、二貫文ツヽ、為被給由候、寺市殿御存、付衆・女房衆へうねさし足袋遣候、

同日
一御姫様御相伴不断息女被仕候、納戸衆・包丁人かつでん無之事、

同日
一御姫様麑嶋へ逗留之時、不断御相伴之事、右同前、

〇二二九　代定取納帳（冊子）

（本文書ハ省略ス）

〇二三〇　伊藤玄宅覚書写（冊子）

（表紙）

伊藤玄宅覚書

覚

一手前先祖之儀、親之被申候、若輩之時分ニ而大形承候得共、其方者被存間鋪候条書付進候、常陸坊親者、信太壱岐守与為申由候、常陸國小田之城主信太伊勢守殿弟之由候、其時分者諸國共弓箭重キ由候、伊勢殿戦場江無差出時茂、壱岐守大将ニ而幾度も合戦御座候由候、然處壱岐守父子同日ニ戦死候故、其日小田落居之由候、

常陸坊八九歳之比、母之召烈時宗寺江為被居由候、其砌御先祖様加世田江被成御座候、加世田衆伊尻神力坊儀、為御名代被為廻國、於東國被及聞、常陸坊ヲ可被為子ニ由候而被成所望、為被烈下由候、上下三十人計、牛茂餘多被為牽由候、先年飯野江被居候豊前坊茂其時被烈下由候、是者本國抔之儀者不承候、無余儀屋形筋之由候、常陸坊より年増ニ而候故、真幸之大明神領十貳町被相渡、常陸坊江者本給之分為被相渡由候、常陸坊十六七歳之時分、如本國参度由候而、暇を被乞候處、神力坊　殿様江被申上、被召留、知行二町被下、女房茂以御下知御持せ為被成由候、當時鹿児嶋江被居候和田圓覺院親圓覺茂神力坊被烈下候、是者北國能登衆之由候、其後小田より出家一人、加世田江為被尋下由候、其時國元之左右委被為聞由候、常陸坊母者、隣國衆やはき越前殿江祝儀候而被相越候与為申由候、

一慶長十五年庚戌　家久様始而江戸江御下之刻、我等茂御供仕候ニ付親之被申候者、一家之衆佐武殿家中江可有之候條承合候得与被申候、かん田御屋鋪之時、佐武殿屋形屏一重越ニ而候、御留主之日、我等御番前ニ而罷居候、此仕合、佐武殿屋形江尋可申与存、廣間之番衆へ申理候得者、老者之人被出合候条、御家中江信太名字之衆御座候哉与申候得者、當屋形之致留主居候信太兵部少与被申候、為何御用ニ而候哉与被申候間、薩摩江信太名字之者罷居候條申候、無御用候間罷帰候与申候而引帰候得者、門外迄其番衆被出、吾等名宿共被相尋候條有躰ニ申候、其人者高橋太郎右衛門与申候、小田ニ為被居人之由候、其晩ニ我か小宿江被参、兵部少より委被為聞度通被申候間、我等親類ニ而茂無之候、江戸ニ為参儀ニ候条、ちと承候而可申聞与存候由申候、次日又太郎右衛門被参候而、屋形江是非ニ可参由承候得共、奉公仕者ニ而不罷成由申候、其後両度兵部少殿被差出、内へ可有御座候へ者、同宿衆有之由候条馬場へ出候得、可被為逢由候而種々咄共候、其様子伊勢兵部殿江申上候へ者、我等も内江者不参、一禮申候而可然由被仰、御道具衆五人ニ供被仰付候間致禮儀候、内江可参由、遮而被仰候得共、内へ者不参候、其より門

番所江腰を懸候得与被仰、兵部殿茂被懸腰、硯取寄信太之様子預書付候、此兵部殿者伊勢守殿筋目之由候、一家衆餘多佐武殿家中江御座候、花むろ筋ゑいミん之孫共之由候、

一慶長貳年、我等事高麗江被召寄候間、十三歳ニ而其十一月打立候得共、無順風候而、限之城之大源寺ニ而致越年、次正月高麗江相渡候、　忠恒様御側へ夜白御奉公仕候、其年十月、かんなん人猛勢泗川御城江寄来稜以飛札案内御座候ニ付、三日前ニ御下知を以ちんてう之番衆者被引取候、古官之番手衆茂同前ニ被仰付候得共、程近候間、物頭を見申候而引可申与被罷居候處、夜中猛勢寄懸、古官を責崩候、其朝夜中ニ不断衆之内財部甚兵衛殿御使ニ而、急番手之衆引取候得と御座候へ共右之通ニ候、然共甚兵衛者敵之中を返り御使を申届、又切出被罷帰候、相良玄蕃殿・川上六郎兵衛殿物頭ニ而被居候、玄蕃殿者則戦死ニ而、鹿児嶋衆勝目兵右衛門殿者御城近迄被退候得共、跡より参候人江被相尋候得ハ、玄蕃殿討死之由申候ニ付、其より返合討死之由候、六郎兵衛殿ハ中間肩ニ掛為被退由候、則忠恒様被成御出被為御覧候、我等茂御供仕候而見申候、半弓之矢過分中候間、具足を被抜候儀茂不罷成由候而、其儘被居候、其日者かんなん人古官致野陣罷居候条、勝目殿死骸退ニ餘多被出候へ共、首を取候間見分難成候處、勝目殿者連々金細工ニ而、大指之爪ニやすり形御座候を、徳永助右衛門殿能被存為被退由候、左候而次朝御城へ猛勢相掛候、忠恒様夜中ニ被召合、未明ニ御馬ニ而大外廻を被為御覧、直ニ大手之口江被成御出候、中途ニ而御側衆被申上候者、御稲荷二ツ敵ニ被被(ママ)懸候、御勝軍ニ而可有御座候、目出度与被申上候、直ニ御馬上より被成御覧、御拜被遊候、則大手之口左之御櫓江被成御上候、敵ハ程近ク寄來候、中々猛勢無限候、先御鉄炮被遊、其より御弓ニ而被遊候、敵方より石火矢・鉄炮を餘打候、御櫓之身隠は外をみかき候而光候間、有馬次右衛門殿莚を取寄楯ニ被掛候、其中ニ御弓之弦両度きれ候、両度共ニ次右衛門殿弦を被懸候、御働候衆ハ息茂はつミ申程之儀ニ候、其時水を上候へ

と　御意候間、大樋二ニ水を入、御器を餘多入候而御座候、其御器ニ而両度水を我等上申候、御矢倉之前ニて敵方塩硝ニ火を落入、先雷之様ニ鳴候、其火過分ニ有之、塩硝ニ移、大雷之様ニ候而盡焼崩候、其仕合ニ御城より切出被成候、我等ハ若輩手明ニ而候間、御差替之御腰物を御持せ候、其時大手之本城戸ハ人数込ニ而不被得明、小城戸より皆々被出候、　忠恒様御馬ニ召、御馬之口をゆるせと被成御意、御中間御しかり被成候處、本田與兵衛殿・鎌田次右衛門殿・木脇三左衛門殿、御馬之口を取、静ニ御出被成候、得と被申上、前之原迄御出候時、　惟新様より曽木五兵衛殿御使ニ而、敵方大将之手こみ返し候間、急城江御篭可被成由候、御返事茂不被成内ニ其衆又崩候、是ハ故圖書殿御忍被成崩候与、野添帯刀殿度々被申候を承候、夫より御馬をかけ出被成候条、我等者若輩ニ而取放候、此大将之手者皆赤支度、惣別者黒支度ニ而候、敵之大将者御城向之岳、長宗我部殿古陣ニ天蓋をはり被居候、我等事召烈候者共、敵方之馬を何疋茂乗せ候得共無然々候、其内ニ走廻候馬を取候而乗候条、我等もちんてうまて五里乗候、其間ニ　忠恒様江参逢候へ共、御馬早候而追付不申候、　忠恒様御馬御乗放被成御働候中ニ、御馬を敵取候間、北郷作左衛門殿馬を被為上、作左衛門殿ハ家中衆之馬ニ被為乗候と承候、其晩軍ばひハ惟新様被成候、次日より敵之首御取せ候首数三万八千七百余有之由候、

一兄休兵衛者前稜より高麗江被居候、慶長三年戊戌霜月御引陣之刻　惟新様御供被仕、なむはい表ニ而同十八日朝番船ニ懸合、廿一歳ニ而戦死候様子ハ、小西殿をちやくせん嶋ニ而御待可被成由御約束被成候得共、遅御座候、然處小西殿へ被参候御使敷根仲兵衛殿、関船ニ而ちやくせん嶋江被参被申上候者、番船海上を張きり申候間、小西殿被為引候儀者不罷成由候、我等茂小西殿より被召留候得共、使船と申候而可罷通候条、通ズを可被申由被申、番船之中ニ被乗入候得者、方々江引廻候得共、種々申候而罷通候与被申上候、依其惟新様可被及御覧由候而、霜月十七日之晩七ツ時分、

ちやくせん嶋を御出船被成候、帖佐方之衆計可被召烈由候得共、鹿児島方衆茂餘多被参候、次十八日之朝、番船相掛候間、御供立之船皆〻漕懸被伐乗候得共、番船ハ上を為張廻舟ニ而候間、内〻人を被切候儀茂不被成由候、被漕掛候を敵方よりハ幸存、かぎを掛、此方之船を引付火を入、皆〻為焼崩由候、其火者小つぼけまり程有之ニ塩硝をつめ、つほのはしより火縄を引通シ、火を付幾ツ茂なけ入為申由候、つほハわれ候条、其侭焼立由候、其十八日之朝夜中ニ石火矢之音殊〻鋪ちやくせん嶋江聞得候ニ付、　忠恒様無御心元被思召、早朝御出船被成候、御供立之船も不殘参候、なむはい近ク御船を召候得共、鉄炮之音一茂不仕候、煙ハ過分ニ立候間、小西殿江被成御取合、濱遊共御座候哉、御船よりハ被申候、然處六端計之小船流候而参候而、中乗伊尻弥五介申上候者、　惟新様御船計無何事候、御供立之船ハ不殘焼崩申候、此船茂皆〻手負ニ而候得共、流候而茂参、御左右可申上由被　仰付候与被申候、我等も御船ニ乗候間委承候、其より　忠恒様被成御驚、其時御鎧を召、関船ニ御乗移被成御急候、本御座船ニ者御南戸衆宅間與八左衛門殿一人・我等共被召乗候、本船茂櫓数ニ而候条、関船ニ不後参候間委見申候、忠恒様御船を　惟新様御船ニ御乗付被成、敵船と惟新様御船之間御乗入被成、敵方江船之はなを向御座候、　惟新様御船・宗對馬殿船、何も敵方江ともを向御座候、其より御供立之船過分ニ参候条、御退可被成由候而、御迦被成候、諸船一里程参候迄茂　忠恒様御船者其侭御座候、然共櫓数ニ而候間、ちやくせん嶋へ者早御着被成候、

一宗對馬殿茂　惟新様被成御座候所へ被為出、　忠恒様御座候へハ則被相逢、なむはい之城本へ船を乗付、漸人計船ニ乗被為引由候、其跡ニ樺山権左衛門殿、其外士衆七十人番船ニ御懸合、船を焼崩、海ニ被入候衆なむはい之城ニ被籠、権左衛門殿大将ニ而城を為被為持由候、對馬殿衆武具・道具・衣裳・刀迄捨置、食茂調其侭召置候条、無口能城を被為持、捨置候小船を以唐嶋之瀬戸御船御座所へ注進被申上候ニ付、迎舟餘多被

遣候、番船程近居候条、迎舟ハちやくせん嶋へ召置、小船を以くり渡ニ其衆被引取由候、権左衛門殿者人数を不殘船ニ被為乗、跡舟ニ乗為被成由候、　惟新様被成御座候所へ番船相掛候ニ付、跡を明候条、其間ニ小西殿者被引取之由候、

一中兄甚六殿　惟新様御小姓ニ而被致在京、慶長五年庚子八月朔日、伏見御城責、十八歳ニ而戦死候、深水金右衛門供仕候間委承候、何れも仕寄之内より鉄炮被為打候得共、甚六殿・財部傳内殿・大口衆川俣仁兵衛殿抔五六人者、楯をつき仕寄之前ニ被出居候、其五六人之衆、朔日之朝夜中ニ責入城戸ニ被付候へ共、惣人数一人茂見次手無之由、金右衛門申候、甚六殿者石打ニ被逢、甲共者損候へ共、具足之上ニ而不痛之由候、帖佐之衆山崎助右衛門被見次、五六人之衆を為被退由候、左候而小宿へ相帰、食共調候而より又如本仕寄之前ニ被居候處、他國之仕寄より弥太〳〵と被申、城内より切出と為被申由候、新納弥太右衛門殿者仕寄之奉行ニ而候間、如右為被申由候、其時五六人之衆又責入城戸ニ被付候得共、惣人数ハ遅為被懸由候、甚六殿ハ鉄炮之玉三當、則被相果候間、金右衛門引立、城之石垣ニ寄懸為被居由候、其より間候而惣人数被懸候与申候、

一常陸坊儀、加世田江被居候時分、日州を被召持、御側衆堺目江被召移候ニ付、都於郡へ被移由候、肥後・豊後方〻之御弓箭ニ被相働為被致辛労由候、身之内古手之跡餘多所御座候、其後　太閤様御下之時、所〻被居候衆御引せ候ニ付、常陸坊者一節高岡之内深歳江被致中宿、其より蒲生へ被移、慶長五庚子年出水へ被移候、其時分加藤殿被仕出、小西殿領分宇都・八代・水俣迄被取候、日州表茂伊藤(東)殿家老稲津掃部被切出、殊之外六ヶ鋪候、出水之儀茂御城取最中ニ而種〻被入御念候刻、常陸坊嘱役ニ而辛労被成候、左候而慶長十九年甲寅九月十八日死去被成候、其次卯ノ年、我等江嘱役被仰付、承應二年癸巳三十九ヶ年嘱役相勤候、餘長〻鋪候間、数度侘を申上候得共、不被聞召分、権左衛門へ嘱役被仰付候而より、我等ハ被成御閣候、親以来より者五十四ヶ年、其より権左衛門嘱役ニ而于今其分ニ而

候、是又為心得候也、

寛文四年甲辰六月吉日　　玄宅判

伊藤傳兵衛殿

右借別府殿之手筆、未明寫早、

寳永二年歳次乙酉春三月日

市来源右衛門

〇二三一　金銀貨幣被仰出留写（冊子）

（本文書ハ省略ス）

〇二三二　諸士由緒（冊子）

（本文書ハ省略ス）

〇二三三　在江戸中覚書（冊子）

（表紙）

明暦三年酉ノ正月四日

在江戸中萬覚書

同十三日

一香ノ物一樽、へにや六郎右衛門持参、一水瓜二ツ大、同日

了渕へ遣し候、

同十九日。海老原益右衛門殿

一松本段右衛門殿。今日打立ニ付、仲右衛門殿・内膳殿

〃〃〃〃〃〃

・傳左衛門殿・長二郎殿・伊右衛門殿へ状遣し候、宿

元へ一通、

一七月十九日より持病再發、

一同廿三日ニ眞用養院へ竹内傳兵衛殿らを金貳分(以脱カ)遣し候
而、祈念頼存事候、
同廿七日
一中らう拾丁、置物蔵へ預ヶ候、使徳之丞、外ニ五丁前
ニ預置候、右小らうそくニ而済、
同廿九日
一香之物一樽　新養院へ遣し候、
八月朔日
一伊勢左近殿来ル三日ニ打立ニ付、宿元へ状壱通、役人
へ遣し候、状之内ニ包籠、御文箱ニ入候而下し候、桑
久右衛門殿へ屋敷之禮申遣し候、
八月朔日
一銀拾八匁　蚊や代、川上佐吉殿より済、八次左衛門持
参、
同二日
一御國元より御使岩切太兵衛殿便ニ加治木より状参候、
同五日
一小魚一鉢　鎌田太郎右衛門殿より
同七日
一酒徳り壱ツ・西瓜二ツ　本田九左衛門殿持参、
同八日
一西瓜二ツ　清二郎殿帰國ニ付太郎右衛門殿へ遣し候、
同九日
一来ル十二日ニ本田九左衛門殿帰國ニ宿元へ状、有川長
左衛門殿へ状遣し候、しふしやへも状箱遣し候、但九
左衛門殿へ数寄や手拭二ツ遣し候、
同十五日
一明十六日ニ渋谷二郎左衛門殿帰國ニ付、宿元へ状遣し
候、又菱苅孫兵衛殿より杢之助殿火事ニ付、掛銀之儀
状参候間、爰元よりハ何分と難申候、来年冬ニも相延
候者、来夏ハ罷下候而御談合可申候由、状之返事仕候
事、
同十九日
一来ル廿二日、了渕帰國ニ付、市正様へ状壱通、宿元并
紹甫・濱田三左衛門殿へ状遣し候、阿多藤十郎殿同前、
一同日、桑次五左殿帰國ニ付、内膳殿・仲右衛門殿并宿
元へ状遣し候、付朝倉城ニ状二通遣し候、
同廿九日
一五月朔日ニ森喜右衛門殿便ニ有川長左衛門殿・柴宗左衛門殿・八代
権右衛門殿・今井八左衛門殿へ状遣し候、加治木へハ
宿元へ状遣し候、弥五左衛門より比志嶋久右衛門殿へ
面かいたすけ遣し候、
一八月廿九日、證人奉行衆へ鰹節一箱ツヽ、但百入、公
儀より相渡り候間、弥五左衛門使者ニ持参申候、北郷
作左衛門殿よりハ生鴨、平田用右衛門殿一昨日持参被
申候、
九月朔日
一北郷作左衛門殿より平田用右衛門殿ニ而承候ハ、此度
小袖御法度被仰出候、證人衆ノ分り無之候間、鎌田太

郎右衛門ラを。中書殿へ可被得御意候、又八郎殿いか（以）
ゝ可有之哉と承候間、先作左衛門殿御手前可被御意候、（得脱カ）
又八郎へ申聞、此方ハ重而之事ニ可仕之由申候事、
同二日
一来ル三日、石之蔵ノ道具衆市之介、飛脚ニ下りニ付、
宿元へ状壱通、池田勘兵衛殿へ壱通遣し候、
七月十九日ヨリ八月卅日迄
。一薬五拾六服内七服運平、但八七日永井宗左衛門殿、
外ニ。十七日
三口
合拾二七日分、外ニ丸薬ノ薬種代有、
九月七日
一算田ノ玉泉寺より使僧、せんべい一折、
同十日
一来ル十一日ニ相良吉右衛門殿帰國ニ付、菱孫兵衛殿・
左近允八右衛門殿返事壱通ツゝ遣し候、加治木宿元へ
状壱通、八右衛門殿迄遣候、
一九月十八日、　薩州様御光儀御通ニ取次衆五人、川上
慶左衛門・白尾利右衛門被罷出候、其節御盃被下、御
前ニ罷有ニ付、前ゝ被罷出候林九郎兵衛殿・八代次左
衛門・城慶右衛門、御通ニ不出候事、残多存候由、上
野八右衛門を以右三人へ断申候事、
九月
一十八日、御相伴衆七人、振舞奉行佐多六郎右衛門殿・
市来八右衛門殿、包丁人竹内助市・御茶湯主慶阿弥、
御前御一人前干物折敷、御座次ぬり折敷、但新敷漆茶
わん御座次迄通、喜入攝津殿より御太刀参候、馬代銀
壱枚、
一同十九日ニ、　若御前様へ御折一合・御樽壱荷・諸白
縄巻、虎寿様へ御重箱一与、鈴三對持参被成候、
同廿六日
一高崎たはこ二把、あさり一折、諏方杢右衛門殿新屋敷
へ逗留被成候ニ付、遣し候、
同廿八日
一芝肴三色一折　諏方杢右衛門殿より
同日
一生肴きす十五　白坂市兵衛殿へ遣し候、
十月朔日
一榊原新左衛門殿便ニ有川長左殿より状二通、加治木宿
元状并布壱端参候、
一十月二日ニ飛脚ニ内膳殿・仲右衛門殿へ状、御状箱之
内ニ入候、其内ニ宿元へ之状壱通入下し候、
同日
一銀子拾八匁、蚊や代トシテ伊丹善次郎殿より済、
同十六日、小野龍右衛門殿へもかちき宿元へ之状壱通
頼候、
一鎌田四郎右衛門殿便ニ加治木宿元へ状壱通御文箱ニ
いひ付遣し候、

但佐久間権之佑殿屋敷へ状二通、東海寺臨川院松野九郎兵衛殿へ状壱通、さゝや平兵衛殿より参候、

十月十六日
一京都ノ便ひめちや三郎兵衛宿きち橋酒井内記殿屋敷、
同廿五日
一さゝや宗富内鶴や五兵衛宿、本石町二町目北がわニて
と申
丸や。といや、
同廿六日
一生すゞき二ツ　半田より、則諏方杢右衛門殿へ進し候、
一霜月二日ニ家村杢左衛門殿帰國ニ付宿元へ状一通、但
尾上一郎右衛門殿仕合之儀、将監殿夫婦へも状遣し候
事、有川長左衛門殿へ状壱通、加治木迄遣し候、日野
詣之首尾、重而可相下由申遣し候、
同日
一舞扇子二本、無難道人へ持参、
同六日
一酒井紀伊守殿御移徙ニ付、きじ五四羽御物座より相渡り、
城慶右衛門使ニ持参候、
一同八日ニ上原小十郎殿下りニかち木宿元へ状、有川長
左殿へ壱通、左近允八右衛門殿迄遣し候、伊六左殿状
ニ相添頼候、
同十三日
一小刀壱本、毛ぬき大小、松岡宮内太夫、
同十七日
一銀子五拾目、伊集院六左衛門殿借用、證文有、
同廿一日
一日野紬壱端、代廿。三匁五分、内。二匁染代、内壱匁下ル、弐匁五分正

内壱匁染代下り候間、国元ニ而返弁可有之候、
右有川長左衛門殿頼ニ付相調、須田仲左衛門殿へ
右別帳ニ有之候、
便次第被相下候而可給由申候而遣し置候、
同廿六日
一ふくさ三ツ　かち木奥方より
同日
一もとい　山野殿・新太夫殿より
十一月卅日
一矢二十　矢師吉山伊与　宿弓町ノ御弓掛や吉右衛門
十二月十一日
一手拭壱ツ　御にし様御袋より
同十二日
一豆腐一折八丁分　安養院へ進し候、
同日
一上下一具　さゝや宗富より、頭巾壱ツ　弥五左衛門へ、
同日
一太守様よりかも一羽、中野二左衛門殿御使ニ而拜領仕
候、村田藤兵衛殿より為承由被申候、
同日大興寺便ニ
一伊勢左近殿便ニ宿元へ状遣し候、権三郎殿召料紬二端
くたし候、

加籠こし注文

一高さ弐尺五寸五分、敷板よりやねうらまて、内のりノ
尺、
一長さ三尺四寸、敷板ノきわ、内のりノ尺、
一横壱尺五分二分、同断、
一引戸なし、すたれニて下半分ござこし板有、

つゝミ後ゝハ何時も包かへ候様ニ
一惣ござ。つゝミ下五六寸かこたるへく候也、
一棒桐　但さしぬきニシテ取はなし、
一ひちかけ敷ごさ仕合テ
右書立ニも悪敷所有之候者、其元ニて能様ニ被仰付候而可被下候、乗物見かゝりハ悪敷ハ不苦候、かろくつよき□望ニ候、来年三月中ニ出来候様ニ頼存候、
十二月十五日　狩野栄甫殿　曽木新左衛門
十二月十五日
一大興寺便ニ　宿元へ状箱遣し候内、銀五匁壱分母上進し候、久右衛門殿・三左殿・有川長左殿へ状遣し候、京都御物染物下地袋壱ツ、自分より染物下地袋壱ツ上せ候、
同日
一守札切餅　真養院
同日
一ミかん一折　酒徳り壱ツ　朝隈利左衛門
同日
一権三郎殿召料紬二端、伊地知文右衛門殿下向ニ付、伊勢左近殿より頼相下され候、
同十七日
一たてたはこ　三寺宇右衛門殿より安養院ニ遣し候、
同日
一うねさし足袋二足　安養院
太守様御咄衆より夢ニ付歌
かねひろふ夢ハゆめにて夢之内に
はこする夢は夢の正夢
七本やり
平野運平　片切市之正　福島太夫　加藤主計
脇坂中言　藤堂和泉　加藤左馬
十二月廿一日
一銀子五十め、宿元清左衛門借用
同廿四日
一木脇民部左衛門殿便、日野内膳殿并宿元へ状壱通ツ、遣し候、
同廿五日
一證人奉行衆へ歳暮ノ御禮上下三具ツ、、小杉原廿束ツ、公儀より出候、弥五左衛門使ニ参候、
十二月廿五日
一鬱屋一次兵庫よりまなはし一對預り候、
同廿六日
一海江田仲左衛門殿帰國ニ、宿元并阿多藤十郎殿・濱田三左殿状遣し候、朝倉座頭状下し候、
同日
一銀子拾匁壱分、三助刀代之内取替候、
同日
一兵吉郎殿御奉公之作法、御さし引次第可仕候、鎌田蔵人老・島津中書老へハ我等参候而申入候、新納右衛門老へ八代次左衛門殿申入候、近比尤ニ被思召候間御相談申上候、何分と可被仰出候由候、但今月十四日ニ申
別帳ニ有之

入候、

同日
一新屋敷御門出入之札、中書老中屋敷へ御移ニ付、鎌田筑後老御着之間、一節又八郎殿當所へ可被召置由、有川八右衛門殿ニて承ニ付、今月十日以前ニ請取置候、鎌蔵人老へ其首尾申上候へハ、札奉行被仰付候而御請取可有之候間、其間ハ可被召置之由、指宿仲右衛門殿ニ而承候間、于今覚悟申候事、

同廿九日
一塩小鯛十　鳥羽や三郎左衛門より

右伊東三左衛門殿へ遣し候、

同日
一塩小鱈二ッ　暦庵より、則九年母十二遣し候、

十二月廿九日
一葉たはこ　三くぶり　内田小兵衛殿より

同日
一同たはこ　五くぶり　伊東三左衛門殿より

戊正月二日
一同はらゝご　一折　島津清太夫殿へ進し候、

同日
一ミかん　一折　真養院へ但ミかんハ木やより

元日
一諸白　五盃　安養院へ

同三日
一ミかん　一折　酒　利左衛門・源右衛門持参、

同日
一箱扇子二本入　へにやより

同日
一ひしやく　ちやせん　革や長三郎

同日
一延命散　一包　北庵より

同六日
一来ル七日ニ紹与帰國ニ付、加治木宿元へ状壱通　仲右衛門殿・内膳殿状之内ニ入候而下し候、

同日
一扇子二本　中紙壱束　真養院より

同七日
一銀子六拾六匁ハ壱分金。四切ノ代、白尾与兵衛ニ拂、使徳之助、

同八日
一葉たはこ　五くぶり　無難ニ進し候、

同日
一同三くぶり　安養院へ　弥五左衛門持参、

同日
一本田美作殿移徙ニ付、生すゝき二つ御物座より相渡り候、本田源右衛門使ニ被参候、

一四斗樽壱ッ　内白徳り壱ッ　盃十　茶わん二ッ
□鉢(引カ)壱ッ　十献徳り壱ッ　つほ二ッ

正月十七日
一薬拾五服　暦庵

同廿五日
一兵庫殿・又八郎殿、年頭之御太刀馬代、銀子六匁ッゝ
ニ御物座より切紙ニて被仰渡候、

二月二日
一川野治十郎殿明日打立ニ付　宿元へ状、并有川長左衛門殿・同長二郎殿・船木九兵衛殿・治左衛門殿・桑久右衛門殿・新納善左殿・阿多藤十郎殿へ状遣し候、

一疝氣之立願、肥後之國木之大明神へ鰯ノ魚立候事、曽山佐左殿相傳、此立願ニ而快氣為被申之由候、

同四日
一春日寺ノ弟子堯音坊酒持参、

一二月二日ニ神田方へつば見ニ御越可有候間、供衆弥五左衛門・善二郎、其外一両人可申付由候間、日高八左衛門・伊左衛門・木原喜右衛門ニ申渡候、御使川上慶左衛門、

一二月五日ニ三郎右衛門殿御同心ニ而、遊山ニ御出ニ可被成御約束被成候、弥五左衛門・善二郎・木原喜右衛門、御供ニ可申付由候間、丸目仲兵衛・白尾与兵衛申付、御使川上慶左衛門、。仲兵衛ハ七ツ下刻ニ虫氣ニ而被罷帰候、御使川上慶左衛門曽木甚右衛門殿・鶴市右衛門殿も御同道申由候、

一同九日ニ島津三郎右衛門殿御同道ニ而御さし出被成候間、弥五左衛門・善二郎、其外ニ一両人見合ニ而御供可申付之由、白尾利右衛門を以承候間、大脇早二郎・弓下伊左衛門へ申渡候、就其利右衛門へ内談申候ハ、先此度ハ銀子拂之衆ハ可召置之由談合申候事、

二月九日
一吉山伊与宿、京六。原、波羅、但かうしニ弓やと有之由、

一紬屋やぶ屋四郎兵衛宿、嶋町

同十六日
一鎌田蔵人老、此方御宿ニ御出被成、證人代り合之儀、北郷作左衛門殿詰とをし之由被仰付候、作左殿よりも申分有之候へ共、兵庫殿先年六年被相詰候、此度又八郎殿へ又詰通之□難被仰渡ニ付、其事之由、重而御意を以被仰渡相済候間、今朝三雲太郎左衛門書立を以、伊沢隼人殿へ被参候而口能有間敷由被仰候事、是ハあぶなき事ニ而候處ニ、蔵人老御分別迄ニ而又八郎殿替合ニ相済候事、

同十九日
一らうそく拾丁小　暦庵老へ遣し候、

同廿日
一川上慶左・白尾利右被参候而内證被申候ハ、又八郎殿御行儀相替り候、此中ハ不存躰ニ仕候へ共、もはや数度之儀ニ候、我等存寄なと申上候而もとても御合點有之間敷候、御勝手之人も可有之候間、左様儀ニて御申可被成候哉、とかく今躰ニてハ咲止ニ存候間、御分別可入由被申候、我等も左様ニ見及候、此中先見合候、今少分別仕候而相談可仕由申候事、

二月廿一日
一らうそく拾丁、指宿才渕へ遣し候、
同廿二日
一別府平左衛門帰國ニ付市正様へ状壱通、新仲右殿・日野内膳殿へ状壱通、昨廿一日之火事之儀申遣し候、安渡(堵)なし、
同廿三日
一相良助太夫殿廿四日ニ打立ニ付、仲右衛門殿・内膳殿へ状箱壱ツ頼候、宿元へも状壱通遣し状、
同日
一川上慶左・白尾利右ヲ以申上候ハ、此中折々御遊山トテ御さし出被成候、永々ノ御旅ニテ候間、左様ニ可有之候、併當分火事シケク候、殊三郎右衛門殿と御両所ハ火事之御下知御當ニテ候處ニ、御留主ニ火事出来候時ハ不可然候、尤御遊山ノ儀も若き衆ハ一旦左も御座候、あまり過候ヘハ殊之外悪敷事ニて候、今より以後、御遊山ニ御出之儀御分別可入候、專目武庫様御きらいニて候、御不孝ニも可罷成候、御禮儀も遠候、彼是以御さし出之儀御無用たるへく候、今少之御旅ニ候間御勘忍可入候、又三郎右衛門殿と御付合之事、一段之儀ニ候、乍去あまりニ入魂過候ヘハ、先々不届物ニて候間、只有様ニ御座候而御尤ノ由申上候事、
一二月廿五日、三郎右衛門殿御同道ニて天神へ御参被成候間、御供衆之由白尾利右衛門ヲ以承候間、城慶右衛門・本田源右衛門・田口吉兵衛・古江少左衛門・長田作之丞・二見九郎右衛門へ申渡候、
三月四日
一干大根二把　無難ニ遣し候、
同五日
一焼酎徳り壱ツ　花井佐右衛門殿へ遣し候、
右焼酎、嶋津三郎右衛門殿より弥五左衛門へ給候、
同六日
一大栗百　太守様江進上、御取次白尾金左衛門殿、
右籠　長さ壱尺二寸　横八寸五分　ふかさ二寸五分
かね尺
同日
一さや八郎右衛門、高崎足袋二足持参、
焼酎六盃遣し候
右宿、本町二町目、礒田助右衛門
同十日
一茶鐺壱ツ、ひしやく、茶せん、羽箒ハき一ツ、数寄や長持ニ入候、休斎存候并會尺ノ帳ニ、いゝ合同前あつらへ候、御文掛かね十くさり・ひばし二ツ右同前、
同八日
一同日三郎右衛門殿御同心供衆市来太郎左衛門・伊丹善二郎・弓伊左衛門・長田作之丞・古江少左衛門、右供衆之内両人被相帰候、馬も被戻候、無心元ニ付、八代

次左衛門日入時分より迎ニ遣し候、夜る之五ツ過ニ被為帰候事、

同十一日
一あミノから小つぼ壱ツ　三雲太郎右衛門殿より

右塩から、白尾金左衛門殿へ進し候、

三月十四日
一嶋三郎右衛門殿・又八郎殿・兵吉郎殿、御同道ニ而天神之茶やニ御出候間、御供衆可申付由、川上慶左衛門ニ而承候間、日高八左衛門・大脇早二郎・江夏善二郎・田口善兵衛・木原喜右衛門・二見九郎右衛門申付候、兵吉郎殿供衆林九郎兵衛・中村市右衛門・松田仲兵衛、晝時分ニ　薩州様新屋敷御茶やニ御光儀候而、御兄弟共ニ御召之由、鎌蔵人老より被仰遣候間、則長田作之丞を以早々御帰宅可有之由申越候、日入時分ニ御帰ニ付、御茶や被為入候、

同廿一日
一軍法士用集之事、京都ニ而可見合候、

同十九日
一嶋三郎右衛門殿御同道ニ而御さし出ニ付、川上慶左衛門ニ而供衆之儀承候、城慶右衛門・丸目仲兵衛・竹内八右衛門・弓伊左衛門・松田仲兵衛・秋永七之丞ニ申渡候、

同廿日
一花野身躰之儀、御談合之由聞付候間、林九郎兵衛を以御尋申候へハ、年き明候而御存知可有之由被仰由候、則曽木甚右衛門殿へ内談仕、館小左衛門殿頼候而、彼方へ遣し候而、以来相調間敷由申聞せ候、三郎右衛門殿へも甚右衛門殿を以、右之首尾申入置候、尤又八郎殿へもさりとてハ沙汰ノ限ニて候、則彼方届候間、其首尾可被聞召置之由、林九郎兵衛を以申入置候事、

三月廿二日
一銀子三拾めハ　貫喜借用、

右別帳ニ有之候、

同廿三日
一三郎右衛門殿ト御同道ニ而御さし出、御供衆八代次左衛門・大脇早二郎・田口善兵衛・木原喜右衛門・秋永七之丞・松田仲兵衛・二見九郎右衛門・川上慶左衛門ニ而申候ハ、今日迄ハ供衆申付候、もはや御立餘日無之候間、重而ハ御供衆申付候事、曽而以罷成間敷候間、左様ニ御心得可有之由申候事、

同廿五日
一あい已ノ兄蒔繪や市左衛門、蒔繪ノびんげ持参、

御元服ニ付、又八郎殿より

虎壽様
一御腰物関孫六　　大隅守様
一御太刀
薩州様　　両御前様
一御太刀　　一柳壱荷二種ッ、
同廿七日
一御替合ニ付登城有之候、のしめ半袴
右御返禮
一御太刀一腰　御馬代銀壱枚
一袷三ッ

證文　　内百目　三百三十四匁
六十六匁
（割印）　　弥五左衛門
銀子五百目者　　本田源右衛門
〃〃〃〃〃　　■左衛門
林九郎兵衛

右者、借用申所実正也、壱ケ月ニ利銀百めニ付弐匁ッ、之算用を以、来ル十二月限ニ堅返弁可申候、為後證如此ニ候、以上、

明暦四年戌
右別帳ニ有之候、　卯月十二日　曽木新左衛門
安養院様

卯月三日
一白尾利右衛門を以承候ハ、村尾三右衛門殿より平式部左殿ニて、近日御帰國ニて候、長屋ニ申請度御座候へ

ともせまく御座候間、明日天神方へ御さし出可被成候、茶屋ニて御酒進上申度由被仰候、取次伊木善二郎ニて、必御出可被成候由御返事被仰候間、御供衆可申付通承候間、則利右衛門を以、御供衆城慶右衛門・市来太郎左衛門・弓下伊左衛門・田口善兵衛・松田伊兵衛・秋永七之丞へ可被申渡由申候事、
四ッ半時迄御帰宅無之候付、曽甚右衛門殿・山元助右衛門殿迎ニ被参候、藤江少匠・二見九郎右衛門、道具衆五人相付候、
九ッ半時ニ御帰被成候、■右衛門殿御供被申候、甚右衛門殿先迄被通、夜明時分ニ被帰候、
卯月五日
一うねさし足袋壱足ッ、、御道具利左衛門源右衛門遣し候、
一御門出之日三月九日、善行院被成候、御立之日取卯月九日、竹内傳兵衛被仕候、
同六日
一銀八拾六匁二分、弥五左衛門海道并江戸八日分地賦、
内七拾五匁六分ハ内壱部金三切　銀廿六匁一分
弥五左衛門へ渡す、
十匁六分ハ前ニ取替ニ引、

同日
一甲ノ鉢二ツ、野中市兵衛殿より頼、新納又左衛門殿へ首尾可有之候、并付状有、御物荷ニ入候、

覚

嶋津兵庫家来之者竹内傳兵衛、為学文江戸へ逗留申度由申候ニ付、御事御近付之町屋へ被召置可給之由、仕合ニ存候、就彼人何篇六ヶ敷儀出来由候共、御方へかけ申間敷候、宗旨ハ禅宗ニて候、御法度之宗旨ニて無御座候、此者其付又ハ勝手能所共申候て参候ハヽ、何時ニても御かゝり合可被成候、御入魂頼存候、為其如此候、以上、

明暦四年戊
卯月六日　　曽木新左衛門
野瀬固庵老
参

右書物固庵より案帋被出候て、竹傳兵衛懇望候故、如此ニ候、

同日
一樽三ツ　内壱ツ小喜介・ひつ壱ツ、大廻り船ニ下シ候而可預由申候而、曽木甚左衛門殿へ頼置候、
同日
一小喜三ツ・小屏風ほね壱ツ、新屋敷長屋蔵へ入置候、
一嶋津三郎右衛門殿より明後日御立之儀ニ候間、今日ハ茶や方へ御供可申由御使有之候由、弥五左衛門申ニ付、則弥五左衛門を以与力衆仁禮清右衛門殿へ申候ハ、今日又八郎殿御同道可被成候由傳承候、明後日被罷立候ニ付、客人多候、其上武兵衛被参候約束ニて候、専目方ゝ手遣仕候而供衆無之候間、外へ可罷出と被申候共、御留被成候而可給由申候、則三郎右衛門殿へ申上候、御心得被成候由御返事候處ニ、則村尾三右衛門殿私宅へ御出候而被仰候ハ、今日ハ三右衛門御供可申候間、少も如在有之間敷候間、是非ニ出し可申之由被仰候間、三右衛門殿御同心ならは念遣無之候間、其儀ニ可有之由申候而、供弥五左衛門・古江少介・弓下伊左衛門、此三人供ニ申付候、又三右衛門殿宿へ参候而、供衆無之ニ付若輩之者まて三人遣し候間、三右衛門殿御同無之候者曽而出し申間敷候へとも、御同心ニ而候ニ付御

入魂申候、必夜不入内ニ御帰之様ニ頼申候事、

卯月七日
一数寄屋足袋五足　町田源六殿より
同日
一同手拭二ツ　白尾金左衛門殿より
同日
一薬二包　松本昌庵
同日
一手拭二ツ　新納喜右衛門殿
同日
一はながミ袋壱ツ・ふくさ壱ツ　長谷場伊角殿より
同日
一菓子二袋たはこ一包、有川八右衛門殿へ遣し候、
同日
一干飯二袋、新納喜右衛門殿へ遣し候、
同日
一うねさし足袋二足　鳥羽や三郎左衛門より
卯月八日
一酒大徳り壱ツ　新納仲二郎殿より

右酒、安養院同宿中ニ遣し候、

同日
一酒いか五盃　伊集院六左衛門殿より
同日
一たはこ五くふり　村瀬江庵より
同日
一菓子二袋　新納二左衛門殿へ遣し候、
同日
一たはこ・納豆・漬物一曲　安養院より

尚〻銀子弐枚ハ、従又八郎御祝儀迄ニ進申候、

一筆令啓候、然者又八郎道中無事ニ今日石邊へ参着被申候、先書ニ如申、此度者大坂之ことく直ニ被罷下候間、京都用所ニ付日高八左衛門・丸目仲兵衛上せ申候、其元御さし引頼入候、左様ニ御座候へハ、京都買物ニ銀子拂底ニ御座候間、彼両人より可申入候間御取替頼存候、二貫め程も入可申かと存候、此度大坂より必上せ□返弁被申候、御心可安候、去春之呉服代并壱貫め之借銀、御手前ニ相拂可申由申渡候、御請取被成候而可給候、右之外ニ銀子壱貫め我等借用申度候、別紙ニ借状遣し申候間、御入魂頼存し候、今度上京申候而何様可得御意候之處ニ、直ニ被罷下故、御残多候、大坂より状を以、互ニ可申承候、恐惶謹言、

卯月十八日　定知

船木宗富様

證文

（割印）
銀子壱貫め者　内　七百目者　新左衛門
〃　〃　〃　〃　〃　〃　弐百目者　八代次左衛門
〃　〃　〃　〃　〃　〃　百目者　上野八郎右衛門

右者、借用申所実正也、利足之儀、百目ニ付壱ケ月ニ銀壱匁弐分ツヽ、算用を以堅返弁可申候、若一両

年も延引申儀ニ候ハヽ、利足ハ年拂ニ可仕候、為後證如此ニ候、以上、

右証文ノ留、別紙ニ有之候間、ケシ候、

明暦四年戌

卯月十八日　曽木新左衛門

船木宗富老
まいる

（本文書ハ全文抹消サル）

卯月廿一日
一銀子拾匁ハ　八兵衛借用

戌卯月廿一日
一関、十二端帆壱艘、船頭茂左衛門

一供舟、自由丸十一端帆、船頭仲兵衛

一同、伊勢田丸十端帆壱艘、船頭休右衛門

一馬船、はミ丸十一端帆壱艘、船頭惣右衛門

右者、　又八郎御下向ニ付、船賦如此候、今般喜右衛門殿ニ頼存候、

同廿二日
一墨二丁　稲恒正兵衛殿より

同廿三日
一諸白手樽壱ツ　一漬物樽壱ツ

右しふしやより

一大坂宿山鹿やノ又右衛門扇子ノ仕手おふち

大坂直段
一三寸釘百本ニ付代壱匁　一二寸釘百本ニ付代三分

一壱寸釘百本弐分

卯月廿五日
一きさらし帷子壱ツ

同日
一今織帯壱筋

同日
一長手拭壱ツ　弥五左衛門へ

右者、さゝや宗富より

戌卯月廿六日
一楠板一枚　長さ一間横三尺但はき候ても不苦候、厚さ二寸二三分

一木のはへゝ木

右者、宗富より頼ニて候、

一卯月廿六日之七ツ時分川口迄相下候、

同日
一下食籠　野村太兵衛殿より預り候、

一五月十六日ノ晩之六ツ過ニ向田へ着津、

同十七日
一扇子三本　執印久左衛門殿へ遣し候、

一向田御かりや國分平兵衛殿、

○二三四　大隅薩摩郡由緒書（冊子）

（本文書ハ省略ス）

○二三五　田畠上米宅地税金台帳（冊子）

（本文書ハ省略ス）

○二三六　曽木隆棟元服一巻写（冊子）

（表紙）

寶暦二年十二月

元服一巻写

曽木五兵衛

口上覚　写

（ハリ紙）

「寶暦二年日帳有之」

私嫡子曽木常袈裟　御直元服被仰付被下度奉願候、右ニ付而者、私儀　報國院様御直元服被仰付被下候節者、二種一荷・御太刀目録進上仕、烏帽子・素袍・袴着仕、相勉申候、左候而御盃頂戴、御脇差・御加冠書拜領仕候、

右之通先例御座候、然處、先年日野監助嫡子日野五郎右衛門元服仕候節、私江御直元服被仰付候先例を以可被仰付哉之旨被相伺候處、郷原金太夫様より嶋津大蔵様へ被相伺候得者、元服人日野五郎右衛門より御太刀一腰・御馬一疋但馬代之儀者青銅百疋、親監助より御太刀一腰・御馬一疋但馬代者年頭進上之通、銀壱匁、左候而元服人支度長上下着用被仰付候、先様役人嫡子　御直元服願出候節者、右之通可被仰付旨、此節より被相改候段被仰渡、御先代右之通被仰付置候、右之次第御座候故、此節私嫡子常袈裟事、　御直元服之願申上候ニ付而者、私家格之通願申上度念望奉存候得共、　御先代被仰渡置候趣茂御座候得者、監助嫡子五郎右衛門元服被仰付候通、進上物等茂仕覚語ニ御座候、此等之趣御申頼存候、以上、

十二月五日　　曽木弥五左衛門

右之通願被申出候付、　御前江申上、伺書を以御差引之御方江申出候處、願之通御免被仰付、進上物之儀も願之通御免被仰付候、委曲伺書ニ有之、八日座ニ留付有、

覚

曽木弥五左衛門嫡子
曽木常袈裟

右曽木常袈裟事、此節　御直元服被仰付被下度旨、親曽木弥五左衛門より願申出、進上物等之儀、委細以願書申出候、弥願申出候通、　御直元服被仰付、進上物之儀茂申出候通被仰付被下度奉存候、尤拜領物之儀者、先年日野五郎右衛門　御直元服被仰付候節、御脇指拜領被仰付候間、此節之儀茂弥其通被仰付度儀と奉存候、此段奉伺候、以上、

新納仲左衛門

十二月五日

覚

御同氏常袈裟殿　御直元服被相願候書物、今日當座江曽木源助を以被差出候ニ付、早速御前江申上候処、弥願通可被仰付候間、御差引之御方江可申出旨承知仕候ニ付、伺書相調差越申候間、拙者より福永重内を以差出候筋ニ而、平左衛門様江御書可被成候、弥願之通可被仰付旨、兵部様より茂被仰渡候ハヽ、来ル十三日ニ可被仰付旨

御内々承候間、其内存を以平左衛門様江茂重内より申上候様可被仰付候、扨又御方願書之内ニ、此節より被相改候段被仰渡、　御先代御承知之上、右之通被仰付置候間、御認被成候、依之堅助殿申談候、　御先代御承知与有之二字、兵部様被成御覧候間、何様ニ歟可被仰付間、只御先代より右通被仰付置候間、御書被成候而者何様ニ可有之候哉、尤御差引之御家老被相改候儀を、　御先代被成御承知候と申儀ニ而可有之候得共、右通　御書候而ハ、何様可有之哉、於御同意者、右之所御書直重内へ御渡被成度候、此段乍推参申越候、以上、

十二月五日　　新納仲左衛門

曽木弥五左衛門殿

本文之通被仰付候由、兵部殿御差圖ニて候、以上、

十二月七日　　肥後平左衛門

加治木役人中

〇二三七　島津斉興江御目見一巻帳（冊子）

（本文書ハ省略ス）

〇二三八　島津重豪江御目見一巻帳草案（冊子）

（本文書ハ二四二号文書ト同文ニツキ省略ス）

〇二三九　島津斉興江御目見一巻帳（冊子）

（本文書ハ省略ス）

○二四○　曽木実弼元服一巻帳（冊子）

（表紙）

享保九年申辰八月八日

新助江　御直元服一巻

六月十七日

口上覚

同姓五兵衛（重時）嫡子曽木甚吉（実弼）十一歳ニ罷成候ニ付、此節元服為仕度御座候、依之乍憚奉願候者、二種一荷・御太刀進上仕、　御直元服被仰付被下度奉存候、私事先年於　御城御太刀進上仕、

吉貴公　御目見被仰付、以後之儀者継目之節　御目見可被　仰付之旨御承被遊、冥加不少仕合御座候、右一筋を以申上儀ニ御座候間、願之筋被仰付被下候様ニ宜被仰上可被下候、以上、

辰六月十四日　　曽木弥五左衛門印

右口上書伊東五次右衛門を以達　貴聞候處ニ、被仰出候者、願書物之趣委細被達

聞召候、新納仲右衛門儀　御直元服被仰付例を以、此節弥五左衛門願之儀茂、願之通可被仰付旨被　仰出候、右ニ付而者、二種一荷・御太刀進上仕度旨、書物ニ相見得候、仲右衛門　御直元服被仰付候節、進上物何様ニ有之候哉、程久敷儀ニ候得ハ、不被遊御覚候間、仲右衛門元服被仰付候節之通、此節甚吉元服ニ付而之進上物茂可被仰付之旨、

御意ニ而候、尤仲右衛門元服之節、何様之進上物ニ而有之候哉、相糺可申上旨、是又被　仰出候故、當座より相糺可申上筈ニ而候旨迄、江田吉左衛門ニ而弥五左

衞門方江申渡候、

十九日

一曽木弥五左衞門より口上書を以、同姓五兵衞嫡子曽木甚吉當十一歳ニ罷成候間、乍恐　御直元服被仰付被下度旨、委細書付を以願被申出候間、伊東五次右衞門ニ而達　貴聞、願之通可被仰付之旨可被　仰出候ニ付、去ル十六日、川上市右衞門を以弥五左衞門江江田藤右衞門より被申渡候、依之右願申上候處ニ、願之通可被仰付之旨被仰渡、奉承知候、別而難有奉存候、右之御禮市右衞門を以弥五左衞門より今日當座へ被申出候間、當分日木山江被成御座候間、書付を以御礼之段、當番之御南戸(納)衆より可被申上之旨申遣候、委細願書之趣、去ル十六日之座ニ有之候、

廿三日

一此節曽木甚吉江　御直元服被仰付候ニ付而、甚吉より進上物之儀者、先年新納仲右衞門　御直元服被　仰付候節之通有之可然旨、先日被　仰出候、就夫御役所日帳并御納戸方日帳見合候得共、何分ニ茂不相見得候、仲右衞門方江茂進上物之訳覚無之、書付等ニ茂右之訳不相見得候故、此節改り進上物御究可被　仰付哉之旨、伊東五次右衞門ニ而相窺候處ニ、進上物之儀者追而御究可被　仰出由、右同人ニ而被　仰出候、其旨曽木弥五左衞門江申達候、

七月廿二日

一曽木五兵衞嫡子曽木甚吉
御直元服被　仰付候ニ付、進上物之願被申上置候處、願之通二種一荷・御太刀可致進上之旨、伊東五次右衞門ニ而被仰出、弥五左衞門へ直ニ申渡候、早速御禮被申出候間、右同人ニ而達
貴聞候、

八月八日

一曽木五兵衛嫡子曽木甚吉元服被　仰付候ニ付、今日表御書院江被遊　御出座、甚吉烏帽子・素袍・袴着ニ而、理髪召列罷出、元服被仰付候、

一甚吉事、新助与名拜領被仰付、加冠折紙御書付、月番之御役人是枝治右衛門御取次ニ而候、

一式御三献上ル、

一御土器新助頂戴、

一脇指一腰新助江拜領、御取次右同人、

一新助より御太刀一腰・馬代銀壱枚・二種一荷進上仕候、

一五兵衛長上下着用ニ而、御太刀一腰・青銅百疋進上仕、御禮申上候、

一理髪桑畑孫七、長上下着ニ而相勤候、

一右ニ付、組頭早晩之通御座江相詰候、

一進上物取次小番役より相勤候、

曽木甚吉御直元服被仰付候次第書

一御對面所江　御出座、

一甚吉素袍之下計着用、理髪桑畑孫七召列罷出御目見、相済直ニ下ル、

一打乱箱御小姓より　御前江相備ル、

一甚吉右同断之支度ニ而、理髪召列　御側江罷出、髪御はやし被下、少シ相下り候時、加冠之名被下之、御取次月番御役人是枝治右衛門、加冠之折紙甚吉頂戴仕、理髪請取、甚吉召列相下ル、

一御前江備置候打乱箱、御小姓役取納持下ル、

一進上之二種一荷、取次役　御前江備置可相下候、披露之取次役御太刀目録持参、備置、披露之席江扣居、御禮之節、加冠之名唱致披露候、

一甚吉素袍・烏帽子着用仕、最初之通理髪召列罷出御目見、直ニ着座、

一式御三献差上ル、

但甚吉江ハ三ツ肴

一御土器　御前江被召上、甚吉江被下　御土器頂戴之節御道具拜領御取次月番御役人、甚吉頂戴仕、理髪相請取、甚吉召列相下、　御目通迦ニ而自分小サ刀差替、

理髪召列、又　御前江罷出御礼申上、頂戴之　御土器
被下納、本之席江持下り着座仕、其時御銚子　御三献
下ル、左候而頂戴之土器・理髪請取、甚吉召列持下ル、
一進上之御太刀・二種一荷、取次より御勝手へ持下ル、
一曽木五兵衛御太刀進上ニ而、元服之御禮申上、披露取
次役直ニ御勝手江持下ル、

○二四一　島津重年江御目見一巻帳（冊子）

（表紙）

宝暦二年壬申二月十五日
重年公江於御城
御目見一巻帳
曽木弥五左衛門

口上覚

私家筋之儀者、代々家督并継目被仰付候節者、於　御
城御太刀進上仕、　御目見被　仰付来候、然者私親曽
木五兵衛及極老隠居御免被仰付候、私江家督無相違被
仰付、難有仕合奉存候、依之私儀以御序家格之通於
御城御太刀進上仕、　御目見被仰付被下候様被仰上被

下度奉願候、此旨被仰上可被下候、以上、

正月廿日　　曽木弥(実爲)五左衛門

覚　　曽木弥五左衛門

右者代々家督并継目被申付候節者、於　御城御太刀進上仕、　御目見被仰付候、然者右弥五左衛門親曽木五兵衛隠居仕、弥五左衛門江家督被申付候ニ付、御序ヲ以於

御城　御目見被仰付被下度旨願申出候、依之先年新納仲左衛門江　御目見被仰付節、願被申出候書物写相添差上申候、此節之儀茂御願被仰上被下度儀奉存候、此段奉伺候、以上、

二月二日　　日野監助

本文濱田藤右衛門を以、平左衛門様江差出候處、兵部様江被差上、右之通兵部様より右之通御願被仰上候由ニ而、平左衛門様より藤右衛門江御渡被成候ニ付、留付置候、

口上覚

島津善次郎殿家来曽木五兵衛嫡子　曽木弥五左衛門

右者、五兵衛隠居、家督弥五左衛門ニ被申付候間、家格之通於　御城　御目見被仰付被下度旨、善次郎殿被相願候、幼少故、私より申上候間、此旨御申可被成候、以上、

二月三日　　伊勢兵部

右御書付、申二月三日御書被成候、

写

島津善次郎殿家来曽木五兵衛嫡子　曽木弥五左衛門

右者、此節五兵衛隠居、弥五左衛門江家督被申付候ニ付、被願出候通、來ル十五日御太刀進上ニ而、　御目見被仰付候条、如例可申渡候、

二月十二日　　典膳

右之通御書付を以被仰渡候由、新納仲左衛門殿より被仰渡候、我等儀御用ニ付、鹿児嶋へ罷越居候ニ付、直致承知候、

一十五日朝五ッ打候而、福永重内同道ニ而　御城江弥五左衛門罷出候而、溜之間江相詰候、兼而貴嶋五十右衛

門殿・貴嶋曽右衛門殿江　御目見之節者、萬事頼存候
通申入置候故、右両人相附被居候、上村藤之丞殿儀御
目附役ニ而候ニ付、萬端引廻シ、夫々御書院御座拝見
被仰付筈候得共、前以致拝見候様承、同道ニ而致拝見、
又々溜之間江相詰居候處ニ、藤之丞殿より又々承候者、
今日　御目見之惣人数御座席関拝見被仰付、稽古在之候
間、可罷出旨承候ニ付、長上下致着罷出候處、町田郷
九郎殿御奏者之筈ニ而、一通　御目見之次第、稽古被
仰付候、尤挾箱小サ刀・長上下取揃入付為持候、権兵
衛・二平召烈候、挾箱江者岩元勘八相付候、御太刀箱
為持候、

一御目見之惣人数、御書院下梅之間江相扣候、左候而諸
御役目月并　御目見相済、地頭所御給之御方御礼、夫
より初而　御目見、家督継目　御目見、我等儀御太刀
進上ニ而、首尾能　御目見相仕廻候、尤鹿児島衆進上
之御太刀備所御目見之席不相替候、御奏者町田郷九郎
殿　御目見相仕廻、九ツ過御城退出いたし、直仕度之
まゝ　御前江罷出、御礼申上候、

一御城江被相附候貴嶋五十右衛門殿・貴嶋曽右衛門殿江
福永重内殿所ニ而一汁二菜之料理出候、

一御目見ニ付御礼廻り、御家老・若御年寄・大御目附・
御奏者御勉之御方江御禮申上候、

一御屋敷中且又加治木より之詰人数へ祝候而、取肴ニ而
酒出候事、

一御目見被　仰付候為御礼、　善次郎様・於登免様江御
膳進上仕度旨奉願置候處、十八日可被召上由被仰出候
ニ付、折節　主右衛門様ニ茂御越被成御座候間申上、
尤肥後平左衛門殿へも御相伴ニ御頼申上候、左候而一
汁三菜之御料理差上、御献立左之通、

拝領物

一青銅百疋
　右、　善次郎様より弥五左衛門江

一銀弐兩
　右、　善次郎様より弥五左衛門妻江

一同二両

右、　於登免様より弥五左衛門江

一同二両

右、　於登免様より弥五左衛門妻江

進上物

一御太刀一腰

一青銅百疋

右、　善次郎様江弥五左衛門より

一金子百疋

右、　御登免様江弥五左衛門より

一鮮肴一折

一御樽一荷

右、　善次郎様・於登免様江弥五左衛門親遊庭并弥五左衛門妻より

右之通進上物・拜領物被仰付、進上物・拜領物且亦御膳進上、先例ニ者軽ク被仰付候、右之段ハ當時物事軽ク被仰付時節候故、兵部様御差圖を以、右通被仰付候、一鹿児嶋一門中江祝候而、貴嶋曽右衛門殿宅ニ而料理出候、

一進上之目録江御納戸蔵役人衆より裏書請取ニ而相渡候、御目録、御太刀一腰・御馬一疋と有之、青銅百疋・御馬代上納いたし候、

一加治木一門中江祝候而、料理出し候、

○二四二　島津重豪江御目見一巻帳（冊子）

（表紙）

宝暦十一年巳八月

重豪公江
御目見一巻帳

曽木五兵衛
實術

今朝御用之儀有之候間、可罷出旨弥一兵衛様御使被下候ニ付、則致参上候処ニ、被仰聞候者、昨日圖書様鉄炮場江御出候處、御帰之砌、中途ニ而圖書様被仰候由、曽木弥五左衛門先比相果候、　御目見被仰付候家筋ニ候得者、継目　御目見之願御物江申出筈候、先年重富役人肥後善助　御目見之願申出候儀、其身者不及申、役々氣寄無之、　御目見不致相果候、至當善助代周防様より御願有之、漸相済候、五兵衛継目之　御目見願及延引候而者如何之由、御内分被仰候間、此儀早速飛脚を以申越、先年右弥五左衛門致　御目見候願書見合、書物相調差出筋可然由致承知候、此跡代々　御目見有之候書留可有之候条、先例之通被願出候様、急度可被申渡候、

一右代々　御目見被仰付候書物写、此節願書被差越候節被遣度候、此跡之儀、得与御覧可被届候由、被仰儀も可有之候、

一右通圖書様被寄御氣、御沙汰有之候段者、別而難有儀ニ候間、詰合役人より一通御禮申上候迄ニ而者不成合候、同役之内新納平兵衛明日罷越、拙者列立　御城江罷出、弥一兵衛様江相付、御礼申上方可宜候由被仰候、尤平兵衛殿右御礼被申上候得者、外ニ何そ御用無之候間、直ニ被罷帰可然旨被仰渡候、

一右御禮ニ付而者、五兵衛罷越申上ニ者及間敷候、夫ニ而者事軽キ候、役人之内より罷越、御禮申上候得者、

引受厚有之候由被仰候、

一明日者圖書様御舎弟様御元服被成候付、弥一兵衛様御城より直ニ圖書様御宅江御出之筈候、右御礼　御城ニ而申上候ハヽ、被聞召置、圖書様御宅ニ而可被仰上由被仰候、

右之通被仰渡候条、平兵衛殿事明朝爰元江四ツ時分着有之候様可被差越候、若天氣悪敷通船無之候ハヽ、陸地可被差越候、右御礼明後日迄及延引候而者不相成候間、此段以飛脚申越候、以上、

三月廿七日　　川上慶左衛門

新納仲左衛門殿

日野監助殿

新納平兵衛殿

一翌廿八日、新納平兵衛殿鹿児嶋江被差越、詰合川上慶左衛門殿同道ニ而、　御城江被為出、相良弥一兵衛様江御頼被申上、圖書様江御禮御申被成候、平兵衛殿日『貫術』帰ニ而致承知候付、翌廿九日朝平兵衛殿宅江五兵衛御礼ニ罷出候、

口上覚

私家筋之儀者、代々家督并継目被仰付候節者、於　御城御太刀進上仕、　御目見被仰付来候、然者私亡父曽木弥五左衛門先頃相果候付、私江継目被仰付被下度旨、願申上候処、継目無相違被仰付、難有仕合奉存候、依之私儀御序を以家格之通、於　御城御太刀進上仕、御目見被仰付被下候様奉願候、此旨被仰上可被下儀奉頼候、以上、

巳四月三日　　曽木五兵衛

右之通ニ而御役所江差出候、

曽木五兵衛事、先比継目之願申上、願之通被仰付候、然者代々奉願、於　御城　御目見被仰付事候間、此節之儀茂　御目見被仰付被下候様被仰上被下度旨、別帋之通願申出候間、何分ニ茂御差圖次第可申渡候、以上、

四月四日　　新納仲左衛門

右伺書、拙者願書ニ被相添、相良弥一兵衛様江被差上候処、當分加治木御差引御家老衆鎌田隼人様江被差上、隼人様御願書弥一兵衛様より月番御用人町田主計様被

差出、被請取置候由致承知、左之通、

口上覺

加治木家跡家來
曽木五兵衛

右者、継目之御礼家格之通御太刀進上仕、　御目見被仰付被下度旨願出候、私月番ニ而加治木家跡致差引候付申上候、此旨御申可被下候、以上、

四月十一日　　鎌田隼人

加治木家跡差引被致候由ニ而、鎌田隼人殿より家來曽木五兵衛継目之御礼、家格之通御太刀進上仕、御目見被仰付被下度旨被申出趣有之、

本文被申出候通、来廿八日御太刀進上ニ而、　御目見被　仰付候条、此旨如例可申渡候、

八月十九日　　左中

右之通首尾有之候処、今日月番御用人町田主計御取次ニ而、左中殿より来ル廿八日御太刀進上ニ而、　御目見可被　仰付之旨、別紙之通被仰渡候、後年為見合、委細書記相渡候、

巳八月十九日　　相良弥一兵衛

加治木
役人

右之通被仰渡候付、新納平兵衛殿より此方へ申来、新納仲左衛門殿より八月廿日、於御役所致承知候事、

写

一曽木五兵衛継目之御礼、家格之通御太刀進上ニ而、御目見被仰付被下度旨、五兵衛書物ニ添書を以御差引隼人様江被伺置候処、隼人様より御願書差出被置候付、來ル廿八日　御目見被仰付候旨、別帋御書付を以被仰渡候、写差越申候、

一五兵衛書物壱通

一右江各添書壱通

一右弐通ニ弥一兵衛様御添書壱通

右之通弥一兵衛様より浦右衛門江御渡被成候付、此方仰渡帳ニ都而留付差越申候、

一來ル廿八日　御目見被仰付候付而者、萬端弥一兵衛様御世話を以、願之通被仰付候付、先五兵衛早速被差越候而、弥一兵衛様江御礼被申上方可然哉と存候得共、何れ廿八日前以被差越賦ニ候得者、其内仕廻方も有之

取込之筈候間、其儀ニ及間敷と存候、依之弥一兵衛様江者拙者罷出、御礼可申上置候、左候而近日被差越候節御礼被申上可然与存申候、

一鎌田隼人様より御願為被仰出儀候故、彼方江者御礼者御目見相済候節、屹御礼可然哉と存候、右之段者其内弥一兵衛様江御尋申上、何分可申越候、早々以飛脚如此御座候、

一先年弥五左衛門殿　御目見被仰付候、則日肥後平左衛門様を以、従　善次郎様御礼被仰上、御取次伊集院十蔵様之由、帳留書抜ニ相見得候、此節何様可有之哉之旨、弥一兵衛様江浦右衛門を以御尋申上候処、夫ニ者及間敷候、始而共為被仰付儀候ハヽ、左様ニも可有之候得共、先格之通被仰付候儀候故、不入事之由致承知候段申出候、此段為御心得申越候、以上、

八月十九日　　新納平兵衛

新納仲左衛門殿

白尾傳左衛門殿

右之書付写被相渡候付、留付置也、

一今廿二日、鹿児嶋江罷越候、

廿三日

一相良弥一兵衛様此間より　御目見願ニ付而者、段々御世話被成被下候付、右御礼且又來ル廿八日　御目見之節、何欤御取計奉頼候由為可申上、樽肴・素麺一折今晩致持参候、尤新納平兵衛殿同道ニ而候、

一廿三日晩、弥一兵衛様より被仰候者、　御目見ニ付而者、弓進上以上之人者、前以稽古ニ不及候得共、御座為見馴、廿六七日比　御目見稽古致候ハヽ可然由、致承知候、

一今日二見浦右衛門殿江弥一兵衛様より被仰渡候、明廿六日　御目見稽古ニ罷出候様被仰渡候由、致承知候、

一今日四ツ時、貴嶋源蔵殿・新納平兵衛殿・二見浦右衛門殿同道ニ而、　御城江罷出、　御目見稽古被仰付候、弥一兵衛様被召列、御書院江罷通、御奏者番衆・御目附衆江稽古方御頼被成、弥一兵衛様ニ者御月番之故御隙無之、直ニ御用人座江御引入被成候、左候而稽古八ツ時相済候付、其段弥一兵衛様江浦右衛門より首尾被

申上、罷帰候事、

写

御太刀

加治木家跡家来継目之御礼　曽木五兵衛

右者、明廿八日右之通進上ニ而、継目之御礼被仰付筈候間、當日朝六ツ半時、長上下着用ニ而罷出候様ニ可被申渡候、此段申達候、以上、

八月廿七日　町田主計　伊勢兵部

相良弥一兵衛殿

右之通弥一兵衛様江被仰渡候由ニ而、被相渡候、

一今廿八日朝六ツ半時、御城江新納平兵衛殿・二見浦右衛門殿同道ニ而罷出候、若黨松助・小者仁平、挾箱小サ刀・長上下入付為持候、

一御太刀箱為持候、足軽竹迫間金兵衛相付、

一兼而内田嘉右衛門殿・貴嶋源蔵殿江御城ニ而、萬事頼存候旨申入置候故、右両人必至と被相附、溜之間江相詰居候処、御目見之惣人数御書院江可罷通由ニ而、梅之間江何れも同前ニ相扣候処、諸御役々月次之御礼相済、初而之御目見家督継目之御礼、我等儀御太刀進上ニ而、首尾克御目見相済候、尤鹿児嶋衆進上之御太刀備所御目見之序(席)不相替、諸事先格之通ニ而候、御奏者北郷民部様、左候而九ツ時退出いたし候、

『　此表

進上

御太刀　一腰　一御太刀一腰

御馬　一疋　一銭壱貫文　銀ニシテ拾五匁

以上　御馬一疋代

曽木五兵衛　右之通相受取也、

巳十月十七日　伊地知八兵衛印　村田仲右衛門』

實術

右進上目録裏書迄記置也、右目録加治木家跡家来と肩書いたす筈候処、代々右目録之通肩書なしニ而進上いたし来候先格ニ而候段、此方御差引御用人相良弥一兵衛様江申出、弥有来通肩書なしニ而進上相濟候、

一御家老衆・若年寄衆・大目附衆・御奏者御勉之御方江御目見相済候付、御礼廻りいたし候、内田嘉右衛門殿

同道ニ而候、

但嶋津若狭様・嶋津圖書様・鎌田隼人様江者、當分御月番廻ニ、加治木御差引被聞召候付、干肴一折・御樽一荷ツヽ、進上いたし候、

一相良弥一兵衛様江、鰹弐献・四盃入樽一荷致持参、御礼申上候、

一鮪一献・手樽壱ツ、弥一兵衛様より　御手替より被添被下候、左之通

御目見、今日者首尾克御安堵致推察候、先刻者御見廻両種被懸御意、入御念儀忝存候、従是も祝候而、両種致進覧之候旁、申入候験迄御座候、以上、

八月廿八日　　相良弥一兵衛

曽木五兵衛様

口上覚

『本文申出之通被仰付候旨乍恐申上候、来年　御参勤大口筋御通路、加治木御屋敷江被遊御光越候ニ付而者、御太刀進上仕、　御目見此面殿御差圖ニ而候、

十一月三日　相良弥一兵衛

被仰付被下候様奉願度奉存候、私継目之　御目見、於御城家格之通被仰付度旨奉願候節者、願書役所江相付加治木役人』

差上申候、此節新納仲左衛門　御目見願書、御内用御頼御用人衆江相付差上候付而者、私家筋仲左衛門同前之儀ニ御座候間、願書御用人衆江相付差上候様被仰付被下度奉願候、此旨御申可被下候、以上、

酉十月晦日　　曽木五兵衛

右之通、明和三酉年願之通御差引御家老様より被仰渡候付、為見合留付置也、

一内田嘉右衛門殿・貴嶋源蔵殿・二見浦右衛門殿江、福永十内殿宅ニ而、一汁弐菜之料理差出候、

〇二四三　島津継豊江御目見一巻帳（冊子）

（表紙）

享保十一年丙午九月廿八日
於　御城　継豊公江五兵衛
御目見之一巻

口上覚

私事此節家督被　仰付、去九日御役并家督之御禮迄被仰付、有難次第奉存候、然者父曽木弥五左衛門事、子六月　吉貴公江御太刀進上仕、於　御城　御目見被仰付候、其節以後之儀者継目之節計　御目見可被仰付通御承被成、其旨被　仰渡置候、依之不相替御太刀進上仕、　御目見被仰付被下候様ニ被仰上被下度、乍憚奉願候、乍推参為御覧合別紙二通相添差上申候、此等之趣宜御申上可被下候、以上、

九月十七日　　曽木五兵衛

写

嶋津兵庫殿

一右江御光儀之砌、家來御目見被　仰付候節、役人中熨斗目致着、与頭者不洗物可致着候、右之外　御目見被仰付候者有之候ハヽ、いつれ茂木綿衣服可致着用候、

一江戸江使被差上、　御目見被　仰付候節者、不洗物可致着候、

一新納仲右衛門・曽木弥五左衛門、両人之儀者訳有之者候故、有來通熨斗目可致着候、

右之通此節被相定候間、可被致承知旨可申渡候、以上、

五月　　杢

兩家者熨斗目着用之儀ハ、無役ニ而茂熨斗目ニ而　御目見仕候場所ニ而有之候得ハ、可致着用候、其上与頭

之内　御目見被仰付候節ハ、不洗物ニ而候得とも、右両家ハ熨斗目着用ニ而候、　御目見可有之事と弾正殿被仰候通、谷山角太夫殿、兵庫様へ可申上之由、辰五月十五日濱田伊左衛門へ承、其旨伊左衛門より田之浦へ参上仕申上候、

写

曽木弥五左衛門

右、新納仲右衛門同前御太刀進上仕、　御目見可被仰付之旨被　仰出趣有之候、依之弥五左衛門事、此節御太刀進上仕、　御目見被仰付度之旨被申出、來月朔日御太刀進上仕、　御目見可被　仰付候、仲右衛門儀、継目之節計　御目見被仰付事候付而、弥五左衛門事も、右同前ニ被　仰付候、弥五左衛門儀者　御目見被仰付折目無之故、此節右之通被　仰付事候、尤以後之儀者、継目之節計被　仰付事候条、此段兵庫殿へ申達候様ニ、假屋守へ可申渡候、以上、

五月　　内記

此外之留ハ差上申ニ及不申候、尤弥五左衛門長上下着用仕候、

九月十九日
一右口上覚書并杢殿・内記殿御書付留写別紙二通、川上市右衛門ヲ以御役所江差出候處、江田藤右衛門殿被請取候、左候而、我等儀九月十九日鹿児島御假屋へ参上仕、伊東五次右衛門ヲ以御内〻より申上候ハ、此節家督之　御目見御願被仰上被下度旨、加治木御役所へ願申出候得共、私儀其邊ニ而難罷居奉存候故、参上仕候、乍憚御願被仰上被下度奉存候通申上候処、被　聞召達、伊東五次右衛門を以被仰渡候ハ、明日谷山角太夫殿御招被成、御願書物地取御頼可被成候、夫迄ハ相詰罷居御願書物地取拜見仕、可罷帰由被仰付候、

十九日
一鹿児嶋於御假屋詰桑畑孫七殿より被申渡候ハ、五兵衛家督之　御目見願書物、江田藤右衛門より被差越候ニ付、伊東五次右衛門ニ而達　貴聞候處、願書物之趣被届　御覧候、此段者　上より為被　仰出儀候間、其通社可有之候、五兵衛より願不申出候迚茂、御願可被仰上儀と被　思召候間、弥以御願可被仰上旨被　仰出候通承達候、

一廿一日御願書物地取御願付而、谷山角太夫殿御假屋へ被為出候、伊集院弥八郎殿・伊東喜右衛門殿・角太夫殿より同心被成、於小書院地取被成候、我等儀茂罷出相詰居、御地取拜見仕候、

口上覚

拙者家來曽木弥五左衛門事、此節隠居、嫡子曽木五兵衛江家督申付候、家筋新納仲右衛門同前被仰渡置候趣有之候間、五兵衛事以御序御太刀進上仕、御目見被仰付被下度奉願候、此旨宜御申頼存候、以上、

九月廿一日　嶋津兵庫

一右之通御願書物ニ而、福永重右衛門持参候而、谷山角太夫殿へ被差出候故、我等儀者加治木之様罷帰候、

一中務殿より伊集院十蔵殿御取次を以、曽木五兵衛家督被仰付候ニ付、御目見之儀御願有之候、右付而來ル廿八日御太刀進上ニ而、御礼可申上旨被仰渡候、此段御申上被成、五兵衛方へ早々可被仰渡候、兵庫様より御礼之儀者、私より可申上候、以上、

九月廿五日　谷山角太夫

加治木
仮屋守

一廿五日右之通、角太夫殿より以御書付被仰渡候通、鹿府詰桑畑孫七より被申越候由ニ付、江田藤右衛門殿より我等方へ被申渡候ニ付、御目見之覚語ニ而、翌廿六日鹿府へ罷越候、

覚写

嶋津兵庫殿家來
曽木五兵衛

右者來ル廿八日御太刀進上ニ而、家督之御礼被仰付筈候間、支度のしめ・長上下着用ニ而、朝五ツ時ニ罷出、奏者番方へ其首尾可申出候、以上、

奏者月番
伊集院十蔵

九月廿六日　北郷四郎

一右之通御觸状ニ而被仰渡候由、桑畑孫七殿より被申渡候、

明廿七日四ツ後
一今朝五ツ時、御城へ五兵衛罷出　御目見之御座敷拜見可仕由、谷山角太夫殿より被仰渡候故、福永重右衛

門同道ニ而　御城へ罷出、溜之間へ相詰居角太夫殿へ
罷出候、首尾重右衛門より申出候、跡者角太夫殿我等
被召列、　御書院へ罷出候處、伊集院十蔵殿・北郷四
郎殿御出合被成、　御目見之稽古被仰付候、
廿八日
一今朝五ツ時、福永重右衛門同道ニ而御城へ罷出、溜之
間へ相詰候、兼而貴嶋五郎右衛門殿・二渡半左衛門殿
江　御城ニ而、萬事頼存候通申入置候故、右両人必至
と相附被居候、有川幸右衛門殿も被差寄、萬端我等心
得ニ可相成由ニ而、叮嚀ニ被申聞候、尤挿箱ニ小サ刀
・長上下取揃為持候、傳兵衛・金兵衛挿箱ニ相附溜之
間へ罷居候、同日　御目見之惣人数溜之間へ被詰居候、
左候而九ツ時　御目見之惣人数、御書院へ可罷通由候
而、梅之間ニ何れ茂同前ニ相詰候、然処諸御役目月次
之　御目見相済、初而之　御目見、家督継目之　御目
見、我等儀　御太刀進上ニ而、首尾克　御目見仕候、
尤鹿児嶋衆進上之御太刀備所　御目見之序不相替、御
奏者川上縫殿久盤殿、
（ハリ紙）
「但九ツ半時分　御城より退出仕、直ニ　御目見之支
度之侭ニて、　兵庫様御前ニ罷出、首尾克　御目
見仕候通、　御直ニ申上候、然処ニ、則御膳被召
上候折節ニて、　御祝被成候■仰付由ニて、御料
理御残御次之間ニて被下候、御夫婦様共ニ別而御
悦喜被遊候」
一右ニ付而、御家老衆・若御年寄衆・大御目附衆迄、貴
嶋五郎右衛門殿同心ニ而罷出、今日　御太刀進上ニ而、
家督之　御目見被　仰付、難有次第奉存候、為御礼御
番所迄参上仕候通申上候、且亦川上縫殿殿へも参上候
而今日家督之　御目見被仰付候付而、御奏者御勤ニ而
候、右之御礼申上候、
十月二日
一鹿児嶋一門中へ祝候而、料理於旅宿振廻候、
同日
一同日　御目見首尾克相済候付而、兵庫様へ為御礼、曽
木弥五左衛門夫婦・我等妻かこしまへ罷越相詰居候、
三日
一御仮屋中居付之人数、加治木より詰合之面々へ、人数へ、於旅
宿取肴ニ而酒相振廻候、
四日
一兵庫様御夫婦様へ為御礼　御膳進上仕筈之処ニ、段々
御精進日相續候故、今日　御膳御進上仕候、

御献立

一御熨斗　塗三方

御薄茶

一塗御〻御差肉　たい　しやうが酢

一御吸物　たい　ひれ

一御〻御

御押ゑ　巻するめ

御本膳

御鱠　いり酒　一塩鯛　あわひ　あかがい　くり　川茸　わさひ

香の物

御二

御鉢之子　小鳥　舞茸　大ね　わゆす

御引而　敷紙　鱈　かは焼　□□魚てん

御汁　松茸　竹之子　小蕪　しゆんきく　やきつみ入

御めし

御汁　青こんふ　しんじよ　こしようのこ

御肴　蒸蛤　御重

御生花臺　若松　梅もとき　御盆打　疊土器

御押　塗三方　菊之花かるかや　但挿肴色〻

御茶菓子　住よし餅　しめ芋

御後菓子　玉つはき　にしきとう　へぎなし

間之御菓子　やうかん

御後段

ひたし物　糸瓜の花糸瓜　はり生か　木くらけ

さいこくやい（ママ）

小皿

さとう

御吸物　もいを　水山桝

間之御吸物御肴時宜次第

右之通、御膳進上仕候処、御機嫌克被　召上候、右ニ付而、御心易衆御招被成度由申上候處ニ、伊集院弥八郎殿・小森新蔵殿被仰入被罷出候、且亦兼而狂言御見物被成度被　思候故、今日我等御膳進上仕候得者、能折ニ而候、立石太郎左衛門殿可被召寄、今晩狂言御望可被成由ニ而、太郎左衛門殿御招被成候

處ニ、弟子衆武元新兵衛殿・二之方彦右衛門殿・南条次助殿同道ニ而被罷出候、

一御病後故、於　奥御座　御夫婦様・於袈裟様御膳被召上候、御相伴小森新蔵殿・徳之進様・兵十郎様、於奥御書院御膳被召上候、御相伴伊集院弥八郎殿・立石太郎左衛門殿御寄合被成候、

一御膳差上御銚子差上候節者、　奥御書院と奥之隔之襖を為御取候而諸事被成候、三篇目御銚子差上候、首尾濵田為右衛門・伊東五次右衛門仕候、左候而、夜入候而狂言御望被成、狂言数番御見物被成候、

拝領物

一青銅三百疋

従　兵庫様五兵衛へ

一同百疋

従　奥方様五兵衛ニ

一同百疋

従　兵庫様五兵衛妻ニ

一同百疋

従　奥方様五兵衛妻ニ

進上物

一御太刀一腰

一御馬代銀一枚

兵庫様江五兵衛より

一金子弐百疋

奥方様江五兵衛より

一御肴一折

一御樽一荷

一御樽一荷

兵庫様・御夫婦様江曽木弥五左衛門夫婦并五兵衛妻より

一御肴一折但鮭肴積交

一錫弐双

兵庫様御夫婦様江貴嶋五郎右衛門夫婦より

一御機嫌能御祝相済、何れ茂夜之九ッ時退出、

一御相伴小森新蔵殿并伊集院弥八郎殿・立石太郎左衛門殿へ一礼申入候、何れもへ見舞申入置候、一礼申入候、

一我等儀、六日迄ニ相仕舞、七日ニ罷帰候、御精進日迦

慈照院様・助左衛門様・左膳様御方江御□(酒カ)肴進上ニ而、
我等罷出候、
一一門中并心易面々へ、一汁二菜料理祝候而振舞候、
一兵庫様并奥方様より我等并妻へ拜領物・進上物之儀ハ、
新納仲右衛門継目之　御目見被仕候節之通被仰付候由、
伊東五次右衛門を以、　御膳進上之前以被仰渡候、
一進上仕候御太刀之目録ニ、御納戸蔵役人衆より御太刀之受取
青銅被受取候名印ニて相渡候、

○二四四　曽木新太郎御直元服次第帳（冊子）

（本文書ハ省略ス）

○二四五　島津斉興江御目見一巻帳草案（冊子）

（本文書ハ省略ス）

一明和二年乙酉
太守重豪公來正月廿三日、　御参勤として御發駕、加
治木御屋鋪江被遊　御止宿筈ニ被仰渡候、依之實術先
例を以　御目見願申上候ニ付、口上書を以願左之通、
口上覚
『本文申出之通被仰付候旨、
乍恐申上候、来年　御参勤大口筋御通路、加治木御屋

○二四六　島津重豪江御目見一巻帳（冊子）

（表紙）

明和二年乙酉十月
重豪公江
御目見一巻帳
曽木五兵衛

此面殿御差圖ニ而候、
敷江被遊　御光儀候付而者、御太刀進上仕、
御目見被仰付被下候様奉願度奉存候、私継目之
御目見、十一月三日於　御城家格之通被仰付度旨、奉願候節者、
願書役所江相付差上申候、此節新納仲左衛門
加治木
御目見願書御内用御頼御用人衆江相附差上候付而者、
役人
私家筋仲左衛門同前之儀御座候間、私願書御用人衆江
相付、差上候様被仰付被下度奉願候、此旨御申可被下
候、以上、

酉十月晦日　　曽木五兵衛

口上覚

乍恐申上候、来正月廿三日
太守様御發駕、加治木御屋敷江被遊　御入筈之旨承知
仕候、因茲奉願候、私家代々継目家督之節者、於　御
城御太刀進上仕、　御目見被仰付、且又鹿児嶋御屋敷
并加治木御屋鋪江被遊　御入候節者、　御代々様江御
太刀進上仕、　御目見被　仰付、又者初而之　御目見
仕來候、私儀宝暦十一年巳八月廿八日、於　御城御太
刀進上仕、継目之　御目見被仰付候、此節加治木御屋
敷江被遊　御入候節、先格之通御太刀進上仕、　御目
見被仰付被下度奉存候、
淨國院様御代、元禄九年子正月廿六日　御發駕、加治
木御屋鋪江被遊　御入候節、曽祖父曽木弥五左衛門・
祖父曽木五兵衛銘々御太刀進上仕、　御目見被仰付候、
宥邦院様御代、享保六年丑二月九日鹿児嶋御屋鋪江被
遊　御入候節、是又曽祖父弥五左衛門・祖父五兵衛御
太刀進上仕、初而之　御目見被仰付候、右申上候通、
私先祖共儀、　御代々様江　御目見被仰付候付、此節
之儀茂奉願候通被仰付被下候様、御願被仰上被下度奉
願候、此等之趣を以被仰上可被下儀奉頼候、以上、

酉十一月　　曽木五兵衛

右之通相認、加治木御差引御用人相良弥一兵衛長主様
御宅江麻上下着ニ而、實術罷出差出候処、御請取被
置候、
一右同断ニ而、新納仲左衛門時盛殿・日野五郎右衛門資貞殿
御目見願書物并銘々妻女
御目見願書物三通、弥一兵衛様御宅江麻上下着ニ而、

仲左衛門殿・實術・五郎右衛門殿持参仕差出候処、五通書御請取被成、加治木御差引御家老衆高橋此面壽種様江被掛御目候而、御参勤方御用人衆御取次を以、御参勤方御家老川田伊織國倫様江御出可被成之由致承知候、妻女御目見願書物左ニ記、

口上覚

乍恐申上候、来正月廿三日、

太守様御發駕、加治御屋敷(不脱カ)江被遊　御入候付而者、先例之通私妻　御目見被　仰付被下度、乍憚奉願候、享保七年寅六月、

宥邦院様東目筋　御下國、加治木御屋敷江　御入之節茂、私曽祖父曽木弥五左衛門妻・祖父五兵衛妻　御目見被　仰付候間、先規不相替様御願被仰上可被下儀奉頼候、以上、

酉十一月　　曽木五兵衛

右書物、都而　御参勤方御側御用人山岡齋宮久澄様江御出被成候處、御請取被成候由、相良弥一兵衛様より被仰渡候、

一右之通願出置候処、翌明和三年丙戌正月、左之通被仰渡候、

『　此節　御参勤加治木御通路ニ付、新納仲左衛門・日野五郎右衛門・曽木五兵衛事、　御目見願申出趣有之、

本文此節者　御目見不被仰付候条、此旨可申渡候、

正月　　伊織川田國倫』

右御書付、山岡齋宮久澄様より相良弥一兵衛様江被仰渡、寄留守居杉生次助高倫江弥一兵衛様より被仰渡候、

但仲左衛門殿・實術・五郎右衛門殿より差上置候書物、都而御下不被成、尤妾女　御目見願之儀者、何様共不被仰渡候、

一明和三年丙戌正月廿三日、

太守重豪公為御参勤　御發駕、加治木御屋敷江御止宿付、仲左衛門時盛殿・實術・日野五郎右衛門資貞殿連名之書物を以、加治木御屋敷江　御入之節、何そ進上物被仰付被下度旨、相良弥一兵衛長主様江相付奉願候處、高橋此面壽種様江右書物被掛御目候得者、是者左茂有之積、

尤ニ被思召候、然者此面様御儀、加治木御差引被成候得者、御自分ニ者難被究候間、川田伊織國倫様江被差出可然被仰候由ニ而、御側御用人山岡齋宮久澄様御取次ニ而、右書物弥一兵衛様より被差出置候処、書物不及差上由ニ而被召下候、左候而仲左衛門・五兵衛・五郎右衛門相中より、何そ進上物可被仰付旨、弥一兵衛様御取次ニ而被仰渡候付、御肴一折差上度旨申上候得者、弥其通可仕旨、弥一兵衛様より致承知候ニ付、於敷舞臺御側御用人二階堂部行且様御取次ニ而、仲左衛門・實術・五郎右衛門罷出差上候、御披露弥一兵衛様、

一廿四日朝、新納仲左衛門時盛・曽木五兵衛實術・日野五郎右衛門資貞御屋敷江相揃、其首尾被申上旨、相良弥一兵衛様より致承知候ニ付、溜り之間江相揃、首尾申出候得者、右三人家格可仰付置候付、今朝御内々ニ而御目見可被仰付旨、川田伊織様より山岡齋宮様江御取次ニ而、弥一兵衛様御承知被成候由、右三人江弥一兵衛様より被仰渡候ニ付、直ニ内御玄喚脇十二帖敷江相詰居候処、島津主右衛門久壽様・村橋左膳久昌様・谷崎助五郎朗覚様・同六郎次朗德様・村橋兵十郎久馮様・同十次郎朗道様・同幾右衛門朗組様御一所ニ御目見被成、引次仲左衛門・實術・五郎右衛門奥御書院次之間壁付江一所江罷出、

太守重豪公江　御目見仕候、御席詰川田伊織様、御奏者御近習役并川上瀧兵衛親方様ニ而候、相下り直ニ弥一兵衛様　御取次ニ而御礼申上候、

○二四七　曽木隆道元服ニ巻帳（冊子）

（表紙）

安永九年子四月十五日
曽木五兵衛
御直元服
一巻帳

實貞

口上覚

『本文桑畑健殿を以被申上候処、願之通四月十五日元服被　仰付候旨、私忰曽木五兵衛、當年拾壱歳罷成候間、家格之通進上子四月十日被　仰出候旨、致承知候』物仕、如先例

御直元服被仰付被下度奉願候、此段御申頼存申候、以上、

子四月八日　　曽木貢（隆棟）

右書物、御用人老山四郎右衛門殿を以月番本田小源五殿江差出候處、被請取置候、

口上覚

『本文願之通被　仰付候旨被　仰出候段、本田小源五殿より四月十三日私忰曽木五兵衛、来ル十五日被仰渡候』

御直元服願之通可被仰付旨被仰渡、難有奉存候、依之私儀御太刀進上仕、忰元服之御禮申上度御座候間、此旨被仰上被下度頼存申候、以上、

子四月十二日　　曽木貢

一五兵衛儀、於居宅ニ前以毎度稽古為致候、

一十四日四ツ時より、為稽古召列罷出、理髪奏者御小姓一同ニ稽古有之候事、

一二種一荷・御太刀進上被仰付候付、干鯛・昆布者鹿府より取寄候、御樽者柳樽ニ而無之候得者不罷成候故、御上江進上之柳樽者御末方より借物ニ而相済候、

但　進上之看前日御末ニ差出、御臺所奉行入見分候、

一支度所組所上江屏風構ニ而、家来一両人罷通候様、老山四郎右衛門殿ニ而相伺、御免被　仰付候、左候而重之内赤飯・占物・煎茶、宅より仕調出置、時宜見合御

世話成給候衆、其外組頭衆・御番頭衆・御用人衆まて
差出候、
一五兵衛五ツ半時罷出候、手鑓・挾箱、若黨弐人、
今日曽木五兵衛　御直元服被仰付候次第、左之通、
一御對面所江　御出座、乱箱御小姓　御前江相備候、
但　御小姓支度長上下、
一五兵衛支度、袷熨斗目・長袴着用、無刀、理髪御役人
『本文加冠頂戴之席、以前者平敷居下壱枚目ニ而被仰付来候得共、此節川上左織殿、支度熨斗目・長上下、無刀ニ而、召列罷より本文之席ニ而致頂戴候』
出、家格之席ニ而御禮申上、
御前江相進、髪御はやし相下候節、加冠御取次御役人
『本文以前者加冠之御役人より扣ませひと被申候得共、此節より被申成衆平敷居下江扣居、扣ませひと被申様子ニ付、平敷居ニ而、差扣候様被仰付候』壱枚目之席ニ而加冠被相渡、頂戴仕、直ニ相下候、御
取次御役人桑畑屯殿ニ而候、支度麻上下、
但　五兵衛と名拜領被　仰付候、
『但先達而五兵衛と御内々ニ而拜領被仰付置候付、此節奉伺候
処、今度五兵衛と屹与被仰付候旨被仰出候事』
一二種一荷并御太刀・馬代目録進上ニ而、五兵衛支度長
『本文二種一荷備席平敷居下壱枚目江不相備候得者、御太刀備所并御礼上下着、小サ刀帯、理髪召列罷出、元服之御礼申上
席家格之御礼席より相下り候付、御太刀備所左右壱枚頭より相備候』
候節、曽木五兵衛元服之御礼与、奏者御番頭是枝業右
衛門殿相唱候、
但奏者、熨斗目・長上下、
一五兵衛儀、理髪召列罷出、平敷居下二枚目御縁頰涯江
着座、
一御土器立、
一御削物上、
一御三献御寄合、御土器平敷居上壱枚目ニ而頂戴被仰付、
直ニ御脇指拜領、御取次桑畑屯殿、左候而御土器之儀
者頂戴之席江召置、御脇指舛形迄持下り、小サ刀ニ指
替、理髪人被列又罷出、家格之席ニ而御礼仕、直ニ御
盃席江罷出、最初御土器ニ而加、着座之席江御土器持
下り、御長柄・御三方都而相下り候節御礼仕、理髪人
召列被相下候、
但　拜領之御脇指・箭者敷舞臺迄持下、御目通迦ニ而
指替候得共、舛形迄持下ル方可然と之　御沙汰ニ
而、本文之通ニ候、
一曽木貢支度熨斗目・長上下着、御太刀進上仕、忰元服

之御礼申上候、奏者御番頭田中圓治殿、曽木貢忰曽木五兵衛元服之御礼と相唱候、

但奏者支度長上下、

一貢・五兵衛納殿江相廻、御内證ニ而御夫婦様江奉祝御樽肴進上仕候、　御奥様鹿府江被遊御座候故、納殿役人衆江相付御礼申上候、左候而　御中奥江被召通、右御披有之、父子共　御盃頂戴仕候故、御側詰衆江相付御礼申上相下候、

一御肴

一御樽

右者、　御祝被遊被下候由ニ而、御使を以拜領被　仰付候付、直ニ貢五兵衛召列、納殿江罷上、御近習役衆江相付、御礼申上相下、家内を始類中頂戴仕候事、

○二四八　島津綱貴加治木江光儀帳抜書（冊子）

（表紙）

元禄二年己巳三月三日

綱貴公東目御上洛加治木江　御光儀帳

抜書

綱貴公東目御上洛巳三月三日鹿児島御發駕、御船ニ而當地へ同日午下刻被遊　御着候、御老中島津中務殿・御用人衆鎌田後藤兵衛殿、其外御供衆人数、別紙有之、

三月三日

御能番組

翁　千歳

三番神

高砂七郎右衛門　半左衛門　助左衛門　嘉兵衛　重右衛門　覚兵衛　二右衛門　彦左衛門　安右衛門

八嶋兵庫様　次兵衛　重右衛門　笹右衛門　百千代　覚六

東北内匠様　仲太夫　覚兵衛　七兵衛　七右衛門

源氏供養左京殿　嘉兵衛　重右衛門　笹右衛門　新五左衛門　安右衛門

班女兵庫様　次兵衛　半左衛門　覚兵衛　二右衛門　角六

鵜　半兵衛殿　重右衛門　金兵衛　百千代　孫七　嘉右衛門

養老市左衛門　重右衛門　笹右衛門　二右衛門　傳右衛門　角六

右者、　太守様御家督御任官之御祝として御能被仰付候、

三月四日

御能組

弓八幡市左衛門　笹左衛門　半左衛門　嘉兵衛　重右衛門　笹右衛門　百千代　傳右衛門　嘉右衛門

實盛兵庫様　重右衛門　嘉兵衛　金兵衛　二右衛門　長左衛門　角六

御はせを　嘉兵衛　覚兵衛　新五左衛門　安右衛門

井筒左京殿　次兵衛　笹右衛門　新五左衛門　七右衛門

御道成寺　助左衛門　民部左衛門　次兵衛　覚兵衛　七兵衛　彦左衛門　七右衛門

石橋四郎左衛門　次兵衛　覚兵衛　七兵衛　彦左衛門　七右衛門

羽衣市左衛門　重右衛門　造酒允　笹右衛門　二右衛門　孫七　嘉右衛門

夕顔半兵衛殿　重右衛門　雲八　二右衛門　嘉右衛門

善知鳥兵庫様　嘉兵衛　半左衛門　鈴介　覚兵衛　新五左衛門　七右衛門

猩々内匠様　作太夫　雲八　源三郎　孫八　七右衛門

右者　兵庫様御家督為御祝儀御能御座候、

三月五日

一新納仲太夫・曽木五兵衛、　御目見有之、御太刀一腰

・青銅百疋宛　献上候、鎌田後藤兵衛殿御披露、両人共熨斗目半切着用也、

一今日東へ被遊　御入、御吸物被差上候、左候而午之刻ニ東より被遊御立、向之嶋へ被遊御渡海候、　兵庫様

・内匠様、御船元迄御門迄御差出被成候、

一元禄九年子正月廿六日　匠作様初而東目御通道、此日鹿府御發駕、加治木江御光儀、中一日御滞在、廿八日ニ國分小村へ御通、御供御老中佐多豊前殿、嶋津助之允殿、但江戸御供御老中嶋津中務殿ハ御隠居故、御次より細島へハ無供候ニ付、加治木ニハ無御供候、御用人衆鎌田後藤兵衛殿・市来次郎左衛門殿・堀四郎右衛門殿、江戸御供ハ堀四郎右衛門殿・市来次郎左衛門殿也、後藤兵衛殿へ者御中途迄之由也、廿六日、新介・五兵衛、初而御目見故、御太刀・青銅百疋、馬代ニ而進上候、新介御太刀、御披露後藤兵衛殿、五兵衛進上太刀、披露市来次郎左衛門殿也、

口上覚

「本文来月十五日、願之通
私嫡孫曽木新三郎、當年拾三歳罷成候間、家格之通進
御直元服被仰付候、
上物仕、如先例　御直元服被仰付被下度奉願候、此段
仲左衛門
御申可被下候、以上、
卯四月廿八日」
四月十八日　曽木貢（隆棟）

口上覚

○二四九　曽木隆亮元服一巻帳（冊子）

（表紙）

文化四年卯五月十五日
曽木翁助
御直元服
一巻帳

實貞

「本文申出之通被仰付候、
私嫡孫曽木新三郎、来ル十五日　御直元服願之通可被
卯五月八日　仲左衛門」
仰付旨被仰渡、難有奉存候、依之私儀御太刀進上仕、
嫡孫元服之御礼申上度御座候間、此旨被仰上被下度頼
存候、以上、

五月三日　曽木貢

曽木貢殿

「本文之通致承知、後年元服之節ハ家格之通
五兵衛元服之節之通、諸事可取扱事」
右者、今般同氏曽木翁助
御直元服被仰付候處、當分御對面所無之、御式向不相
調候付、安永九子年曽木五兵衛
御直元服之格ニ都而被仰付候間、後年御對面所御造立
之上者、家格之通可被仰付候条、諸書留等古例之通可
被記置候、此旨申達置候、以上、

仲左衛門

卯五月八日

五月十五日
一四ツ時新三郎着服麻袴ニ而、貢召列罷出、若黨壱人草
履取召列候、
一御部屋江
御出座、乱箱御小姓相備、
但支度麻袴
一新三郎江桑畑鼎殿相添
御前江相進、髪御はやし被下候節、加冠頂戴仕、御礼
申上相下、
一貢罷出、元服之御礼申上、

加冠　曽木新三郎

翁助

宜為

文化四卯
五月十五日　（島津久照）（花押）

一御肴　一折
一御樽　一荷

但
拾盃

右、　御夫婦様江奉祝進上、尤　御奥様江御禮、貢召
列、納殿江罷出申上、
一御肴　一折
一御樽　一（ママ）　八盃

右、

御隠居様江進上、札建江同断罷出、御礼申上、

一御肴　一折

一御樽　一　五盃

右、　大奥様

若殿様、日木山御屋敷へ被遊御座候付、

進上御礼同断、

御肴　一折

右者、被遊御祝拜領被仰付候付、貢・翁助召列罷上り、

御近習役江相附御礼申上相下、家内を初類中頂戴仕候

事、

口上覺

太守様去年　御帰國、尚以御機嫌能被遊御座、且亦去年御婚礼首尾能被相整、重畳恐悦奉存候、依之奉祝於私宅　御膳進上仕度奉願候、此旨宜御披露頼存候、以上、

閏四月十五日　　嶋津兵庫

○二五〇　島津継豊鹿児島仮屋江光儀帳（冊子）

（表紙）

享保九年辰九月十一日

継豊公鹿児嶋御假屋江

御光儀帳

但亀千代様御元服一巻込ル

曽木弥五左衛門

桑畑孫七

右御口上書、留主居濱田伊左衛門を以、御用人此方御用頼谷山角太夫殿江差出、角太夫殿より御用人衆中神与五左衛門殿御取次ニ而被差上候由、

一右ニ付、五月十八日杢殿より中神与五左衛門殿御取次ニ而、角太夫殿江被仰渡候由ニ而、伊左衛門江御渡被成候御書付、左ニ相記、

嶋津兵庫殿

太守様去年被遊　御帰国、且又御婚礼首尾克被相整候ニ付、奉祝於私宅　御膳進上仕度旨被申出、願之通當秋中　御光儀可被遊之旨被　仰出候、

五月　杢

右之通、中神與五左衛門殿御取次を以被仰渡候、以上、

五月十八日　谷山角太夫

一右之通被仰渡候ニ付而、為御礼兵庫様加治木より御越、御城江御上り被成筈候得共、御不快故、其訳被仰上置候、

写

嶋津兵庫殿　嶋津周防殿

嶋津玄蕃殿

右、此節　御光儀被遊候ニ付、　御膳部二汁六菜可被差上候、

一御光儀之儀者各別之事候間、御供之奏者番御用人・御近習役・御納戸奉行江ハ一汁三菜之料理ニ而、尤濃茶ニ不及薄茶迄を出シ可申候、

一此外都而一汁一菜之料理出可申候、

右之通　御光儀先　御膳部并御供衆料理方被相定候間、可被奉得其意候、且又　御光儀之節、御亭主より進上之品、随分氣を附不痛品を進上可被致候、尤諸事軽ク被仰付事候間、此跡御檜重進上いたし来候人者、御籠飯可被致進上候、御籠飯進上候人者、當季菓子之類、其外不痛品を進上可被致候、御籠飯之内菓子之類之儀者、右之心得を以見合可有之候、以上、

右之通可申渡候、以上、

八月　杢

右之通、御書付を以被仰渡候、

写

九月十一日　嶋津兵庫殿

右者、例年之通　御光儀之願被申上置候、右日限九ッ半過より可被遊御光儀候、

但兵庫殿事當分私領へ被差越居之由候間、罷帰候節　御請申出可然候、

右之通可申渡候、

八月　蔵人

右、八月六日角太夫殿御取次ニ而被仰渡候、

一右之通被仰渡候ニ付、八月廿五日　兵庫様従加治木御越、翌廿六日為御禮御城江御上り被成候、

覺写

九月三日　玄蕃殿

同六日　周防殿

同十一日　兵庫殿

右之通被遊　御光儀候ニ付、御先番、

一御駕籠

一御手道具壱本

一對御挾箱

一御馬

御側御用人壱人

御近習役壱人

御納戸奉行壱人

御茶湯頭壱人

御側御小姓七人

御同朋壱人

御側醫師弐人

御近習筆者壱人

御納戸筆者壱人

御供

御近習役壱人

御小納戸役壱人

中通御目附弐人

御側御小姓弐人

御先御供三人

一屋鋪廻り立番足軽四人

右者、兵庫殿・周防殿・玄蕃殿宅江者、御在国之節ハ例年　御光儀之事候、依之此節より物毎軽ク被仰付候間、向後共右之通御先番・御供人数被相定候、尤支度之儀、御先番・御供共ニ不洗物麻上下着用之筈ニ被仰付候、以上、

辰九月

右御書付、九月二日角太夫殿より御渡被成候、

一御次第書地取角太夫殿より致清書可差出由ニ而、御渡被成候ニ、當時屋敷へ詰居候役人・組頭被遊　御入候節、早晩之通屋敷角迄罷出、　御通掛之　御目見ニ而、於御座之　御目見不被仰付、尤役人・組頭之外役々茂御目見不被仰付之由相見得候、此段　兵庫様被聞召上、御光儀之節者、此方　御目見人数十五人ニ被召定、役人熨斗目、組頭不洗物、其外役々ハ木綿衣服ニ被仰渡置候ニ付、此節　御光儀ニ茂其通ニ覺悟申付置候、且又此節ハ直ニ奥御座江被遊　御着座事ニ候得共、奥ニ而　御目見被仰付儀、何そ御支茂無之、加治木ニ而　御光儀之節茂、先年より奥ニ而　御目見被仰付来たる事ニ候、此旨角太夫殿より右膳殿江御沙汰被成度由可申出旨　御意ニ付、去ル三日伊左衛門を以角太夫殿江其段申出置候、依之翌四日角太夫殿より被仰聞候ハ、右之趣右膳殿へ申上候處ニ、右膳殿より被仰候、此節十五人　御目見不被仰付儀ニ付、兵庫殿思召之程御尤ニ候、然共此節者段々脇方江御初之　御光儀相續候、夫故此方周防殿・玄蕃殿江者物毎軽目ニ被遊　御光儀御事ニ候、此後　御光儀之節者、仰渡之通十五人　御目見之儀御願被仰上候ハヽ、弥其通可有御座候、今度之儀先例ニ相立儀ニ而者御座有間敷候間、其通ニ可被成候之旨、右膳殿被仰候由、角太夫殿より伊左衛門江被仰聞候故、其旨　兵庫様江申上候、依之後年　御光儀之節之御断書、角太夫殿より御用人讃良善助殿御取次ニ而、九月八日被差上候、右御口上書左ニ相記、

口上覚

某家之儀者、以前より　御在國中一度被遊　御光儀御事ニ御座候ニ付、此節茂　御光儀被　仰出、難有奉存

候、然處ニ今度被仰渡候者、　御在國度毎ニ
御光儀之御事候条、此節より諸事を軽ク被仰付候、進
上物又者家来共　御目見茂被仰付間敷旨、被仰渡趣承
知仕候、依之奉訴候、御在國一度ツヽ被遊　御光儀御
事、至此方ハ不軽儀ニ御座候故、諸事を訖相改申事ニ
御座候、尤進上物又者家來共　御目見之儀も以前より
被　仰付、別而難有、此儀を規模ニ奉存候處ニ、最早
重立候折目之節計、已前之通被仰付筈ニ而、家来共ニ
茂數年
御目見不仕筈ニ御座候、　御在國一度　御光儀之明間
ニ被遊　御入候節ニ者、相替申候ニ付而、此節之儀茂
以前之通被仰付被下度存申候得共、今度者方〻江被遊
御光儀御事ニ御座候得者、格別ニ奉存候間、此已後之
儀者以前之通進上物又者家來共　御目見被仰付被下度、
偏ニ奉願候、此旨宜御披露頼存候、以上、

九月六日　　嶋津兵庫

一種子嶋彈正殿　御成前之日御出被成、何角御差引、又
者御座御見分を茂被成度旨被仰入、九日九ツ過より御
出被成候、
一御書院役人衆稲留三阿弥殿、右同日御座見分并御飾方
為差引被為出候、
一谷山角太夫殿此方御用頼之事候故、毎度御出被成、何
角御差引被成候、
一九月十一日六ツ半時、　兵庫様御近習番所へ御上り被
成、弥今日被遊　御光儀被下度之通、御機嫌御伺被仰
上候、
一御刻限九ツ半過、
一御手道具壱本、對御挾箱ニ而御先御供三人、
一御差出奉見候、遠見之者段〻申付候、
一御城被遊　御差出候ニ付、谷山角太夫殿屋敷角之邊迄
被為出候、尤役人曽木弥五左衛門・桑畑孫七、組頭川
上市右衛門・白尾理右衛門、組頭格曽木仁助同前ニ罷
出候、
一兵庫様・助左衛門様・左膳様并御一門嶋津仁十郎殿、
門外ニ御出被成候、
一種子嶋彈正殿ニ茂門外ニ御出被成候、

一兵庫様・助左衛門様・左膳并御一門、其外御支度不洗物御上下半切、
一役人・組頭支度不洗物、其外ハ木綿衣服着仕候、
一張番所物頭宮内次郎左衛門相勤候、左候而　御入之節席相迎、石壇江下座仕候、
一玄喚番之者　御目通相迎、惣様勝手へ引せ候、
一御相伴内膳殿、
一外廻横目衆、此節より壱人相附、足軽四人辻番勤迄被仰付候得共、壁敷外廻四方之境之角江為辻堅、上下着用ニ而、士両人ッ、相勤候、
一奥書院江御着座、
　但直ニ奥書院へ被遊　御入候ニ付、表書院ハ屹立候　飾ニ不及候、
一御熨斗　御茶　御たはこ盆上ル、
一兵庫様・奥方様・助左衛門様・左膳様・助左衛門様之奥方様・於袈裟様・富之進様　御目見被成候、
一龜千代様御元服ニ付乱箱上ル、
一龜千代様御はやし髪相濟、直御加冠之御書付御頂戴、
御取次伊集院権右衛門殿、御名兵十郎様与御替被成候、

一例年之　御光儀故、此節ハ表立而御拜領物無之、
　御拜領物
一繪古信筆一幅葉鶏頭ニ鶏一幅梅ニ金鶏　二幅
一絹兜羅綿　一疋
　右　兵庫様江
一白縮緬　一巻
一紬ちりめん　一巻
　右　奥方様江
右、於奥　御拜領、御取次御側御用人伊集院権右衛門殿、
一二汁六菜之御膳差上ル
　但御膳物様塗
　御本膳　此御本膳兵庫様御上被成候、
　御汁同石わた（あんかう／とうふ）
　すり山舛
　御皿鯉子付（こかわ鯛／かくからすミ／金かん）
　御めし

香物煎酒

御二

貝焼（打あわび いたうかい しゆんきく）

柚子味噌

御居附　小鯛打付焼

御引物（此御引物兵庫様御上被成候）　御肴（小板かまほこ）

魚てん差くし

塗三方

御吸物（岩たけ ひれ たいらき）

御茶くわし（葛まんちう 水くり 小さゝめ）

御後くわし（筋水木のこ餅 さくらかき 色らくかん）

御後段　但御配膳（おてん おきう）

右ハ、　兵十郎様御元服被成候ニ付、御小姓衆御宮仕ニ而候、

左候而御後段より奥女中御宮仕ニ而候、先例奥江

御入之節ハ女中御宮仕ニ而、相済候得共、右式ニ付如此有之候、

御汁（生鴨 舞茸 せり）

御皿（はなかつほ おろし大こん ちんひ やきみそ 同のり）

しほり汁

御吸物（紅切 しんしよ 糸柚）

一右　御膳被　召上、御盃事并後御菓子御薄茶上相済、

一種子嶋弾正殿　御目見、

亀千代様より
御進上物

一昆布一折

一干鯛一折

一御樽一荷

一御太刀一腰

銀馬代御目録

右　御前江相備、龜千代様　元服之御礼被仰上候、御

奏者御側御用人伊集院権右衛門殿、

亀千代様江
御拜領物

脇差　薩州國平　長壱尺弐寸九分

一鎧二重金
一二所物赤銅馬色繪
一鮫白
一目釘星金
一鞘黒塗
一鵐目
一下緒
一小刀薩州任正廣
一袋繻緒
右御脇指、龜千代様江御盃御給之節御拜領、御取次伊集院権右衛門殿
一御太刀一腰
一御馬代銀壱枚　御目録
右従　兵庫様御進上ニ而、龜千代様元服之御礼披仰上候、御被露右同人　兵庫様、御支度熨斗目・長御上下、右相濟、又不洗物半切御着用、
一金子弐百疋　御目録
右　左膳様より御進上ニ而、龜千代様御元服之御礼被仰上候、御披露右同人支度不洗物半切、
一嶋津仁拾郎殿足付八寸ニ而　御通御給、於席相替谷山角太夫殿足付八寸ニ而御通御給ニ而候、
一奥乙名職そのへ・山野、其外女中おらく・さゝの・おてん・おきう・おそよ・おまん・おのふ　御通被下候、支度日野衣類、
一役人・組頭最前　御通掛之　御目見仕候故、於御座者御目見不被仰付候、
一御休息之間江　御入
『但曽木弥左衛門事者、於　御城御太刀進上仕、　御目見被　仰付者之儀ニ候間、奥より御休息之間ニ　御入之節、可被遊　御覧旨、伊集院権右衛門殿・谷山角太夫殿より被仰渡、表御書院御勝手之間十二帖敷江罷居、御通掛ニ　御目見被　仰付候、假名御披露伊集院権右衛門殿』
一御たはこ盆　御煎茶　御焼酎盆上ル、
一御籠飯一組ツヽ　御夫婦様より御進上、御披露御近習役、
一奥書院江御出座、御後段上ル、
一御吸物　御銚子　御茶上ル、

一七少前　御帰館ニ付、　御入之節之通何れ茂御出被成候、役人・組頭茂罷出候、

一御帰館以後、則為御礼　兵庫様御城江御上り被成候、且又龜千代様茂元服之為御礼御上り被成、御同心人伊十院弥八郎殿より御近習衆を以御禮被為申上候、

但、此外ハ御次第書之通、

御座飾

奥御書院

一御床掛物二幅對　洞雲筆

一立花二瓶

表御書院

一御床掛物一幅　寿老人養朴筆

一立松

一違棚

一軸物　八景繪　盆　朱銓筆

一香爐　せんし盆

一番合　汰いし

一香起火箸

一連歌文臺　梨地御紋付

一硯箱

一奉書美濃紙

御休息之間

一御床掛物一幅　雲黒筆

一生花

一

御家老

御一門　種子嶋彈正殿

御用人　嶋津仁十郎殿

御目付　谷山角太夫殿

右同　伊集院弥八郎殿

中通御目付　小森新蔵殿

御祐筆　里村藤太夫殿

唐船方乗込　今井六右衛門殿

御書院役人　大脇正兵衛殿

表御茶道　稲留三阿弥殿

小野真斎殿

右、　御光儀ニ付、勝手江御賴被成度旨、前以御伺之上御詰ニ而候、

一　山口李左衛門殿
懐

右同断ニ而、奥江被相詰候、

一　鎌田小藤次殿

右御伺ニ不及、勝手江御詰ニ而候、

一　土地方
中村与卜殿
勝手詰
藤井才助殿
右同
児玉源左衛門殿

右土地并御先御供衆其外与力衆、為座見廻御頼被相詰候、

一御先番

御小姓頭
二階堂舎人殿
御側御用人
伊集院権右衛門殿
御近習役
町田八左衛門殿
御納戸奉行
伊集院仲左衛門殿
御小納戸
尾上権六殿
御小姓
二階堂傳八殿
御小姓
河田與右衛門殿
御小姓
弟子丸兵橘殿
御小姓
三原吉次郎殿

一御供

御小姓
二階堂十郎兵衛殿
御小姓
桂平六左衛門殿
御小姓
肱岡条右衛門殿
御茶道頭
石黒大阿弥殿
御同朋
児玉悦阿弥殿

御近習役
二階堂五郎太夫殿
御小納戸
伊地知次郎八殿
中通御同所
五代傳左衛門殿
右同
左近允曽右衛門殿
御小姓
米良八之丞殿
右同
山口十左衛門殿
御側醫師
毛利玄隆殿
右同
東郷傳庵殿

右之通御先番并御供ニ而候、

一御一門・御用人・御近習・御納戸奉行迄、一汁三菜之料理出候（但弾正殿・舎人殿江ハ御膳下御給、）

鱠（たいしやうか）人しん（くり）きんかん　　汁（つミ入）竹之子（かふ）しめち

香の物

糸目（かつほ）すり身　松茸　玉子　ぬか子　　めし

引而

しゆんかん　車（えひ）はまくり　山の芋　まい茸　輪柚子

くわし　梨子　柿　　看色付焼魚

吸物（いか）しゆんきく　梅干

一御小納戸御小姓、其外御先御供衆迄、都而一汁一菜之料理出候、

汁（つミ入）竹之子（かふ）しめち

鱠（たいしやうか）人しん（くり）きんかん　　めし

香の物　　看色付焼魚

くわし　かき

御次第書

九月十一日、　兵庫殿宅江　御光儀之次第、左之通被仰出候、

一御光儀當日、早朝為窺　御機嫌　兵庫殿登　城仕候、

一御刻限九半過、

一足軽立番可申付置候、

一門内より布砂、

一遠目可申付候、

一御入被遊候節、兵庫殿并助左衛門・左膳其外一門共、種子嶋弾正御勝手詰之御用人門外江可罷出候、當時屋敷江詰居候役人・組頭、屋敷角迄可罷出候、

但右外家来不及罷出候、

一門番并玄喚番之者共　御目通之分ハ勝手江引せ可申

候、

一表書院床

一掛物一幅

一立松

一棚飾

但直奥書院江被遊　御入候ニ付、表書院屹と立候飾ニ不及候、

一奥書院

一掛物

一砂物

一棚飾

一奥書院江　御着座、

一御熨斗上ル、

一御茶上ル、

一御たはこ盆上ル、

一兵庫殿并奥助左衛門・左膳、助左衛門内・助左衛門娘・助左衛門嫡子富之進　御目見可被仰付候、

一乱箱上、

一龜千代・内膳召列罷出、髪御はやし被下、直ニ御加冠之御書付頂戴仕可相下候、

一例年之　御光儀故、表立而拜領物ニ不及候、

一御意次第二汁六菜之御料理上、

一御相伴内膳殿、

一御本膳兵庫殿差上可申候、

一御引盆上ル、

一御銚子上、

一二篇目御肴、兵庫殿差上可申候、

一御銚子上、

一御吸物上、

一三篇目塗三方、御土器上、

一御土器御取上之節、兵庫殿より御肴差上可申候、

一右御土器兵庫殿江被下、御肴被下、　御前江差上奥方江被下御肴被下、　御前江差上被　召上候節、兵庫殿奥より御肴差上可申候、右相濟、助左衛門江被下御肴被下、夫より御流ニ而、左膳・助左衛門内富之進・助左衛門娘被下納御土器持下、御肴銘々可被下候、

但御相伴御家老江者順盃御銚子可相廻候、

一右終而、新御土器相改載之　御前江差上、御土器　御取上之節、兵庫殿より御肴差上、直ニ兵庫殿江被下御肴迄被下納、

一御湯上、

但御膳相下候節ハ、　御本膳最前之通兵庫殿罷出相下可申候、

一御茶菓子上、

一御濃茶上、

一御後菓子上、

一御薄茶上、

一御意次第種子嶋弾正殿、　御目見可被　仰付候、

一右引次元服御礼、

一昆布一折

一干鯛一折

一御樽一荷

一御太刀一腰　銀馬代

右、　御前江相備、龜千代元服之御礼可申上候、

但奏者御側御用人

一御盃立

右御盃被　召上、龜千代江被下、其節御脇指拜領仕相下、左候而被下候脇指差候而御礼仕、右御盃加候而被下、直持下ル、

一右相濟、兵庫殿より御太刀・銀馬代進上ニ而、元服之御礼可申上候、

一龜千代元服ニ付、左膳御目録進上ニ而、御礼可申上候、

一右終而、足付八寸ニ而勝手江相詰候一門共へ御通可被下候、且又勝手詰之御用人少席を替　御通可被下候、

但押御相伴之御家老

一右引次召仕之老女　御目通ニ罷出候女共へ、御通可被下候、

一家來共最前　御通掛之御目見仕候故、於　御座ハ　御目見不被仰付候、

一御意次第　御休息之間へ御入、

一御たはこ盆上、

一御煎茶上ル、

一燒酎盆上、

一御重御籠飯之間、兵庫殿并ニ奥より銘々進上可仕候、

披露近習役、
一御意次第奥書院江　御出座、
一御後段上ル、
一御吸物上ル、
一御銚子上ル、
一御立前御茶上ル、
一御帰館之節、　御入之節之通兵庫殿を始め、何れ茂門外へ可罷出候、
一御帰館以後、為御礼兵庫殿登　城可仕候、
右者、來ル十一日兵庫殿宅江　御光儀ニ付而之次第、右之通可被仰出候、　御在国之節ハ例年　御光儀之事候故、此節より諸事軽被仰付候間、右次第書之通可相心得旨被　仰出候、
一御頼之御料理衆并御茶道衆其外
御包丁仁頭　石原嘉右衛門殿
御包丁仁　石原佐次右衛門殿
御包丁仁　長田傳左衛門殿
御料理衆　石原渡右衛門殿
右同　安藤伊左衛門殿
右同　前田四郎兵衛殿
右同　桑原八右衛門殿
右同　久保藤兵衛殿
表茶道　川村慶智殿
右同　杉山順悦殿
御地勤衆　堀内慶賀殿
右同　宅万慶宅殿
御行闇衆　長田甚右衛門殿
右同　稲田七左衛門殿
御酒部屋衆　真川岩右衛門殿
一御立被遊候以後奥於　御座、役人・与頭へハ従　兵庫様銘々御盆被下、其外奥通之面々へハ御通被下候、
一加治木より罷越候士并御假屋中士へハ、為　御名代助左衛門様表江御出被成、御通被下候、挾肴組頭、
一足軽中間共へハ、役人より通ニ而酒為給候、
御礼物方
一肴一折

一平樽一荷
右、内膳殿江従　兵庫様、
一肴一折
一平樽一荷
右、弾正殿江従　兵庫様、
一肴一折
一平樽一荷
一紗綾三巻　御目録付
右、名越右膳殿へ従　兵庫様、
一御籠飯一組
右、御同人江　兵庫様・奥方様より、
但亀千代様御元服ニ付、何欤前以御肝煎之訳有之候ニ付而、御夫婦様より右之通被遣候、
一太刀一腰
一青銅百疋
右、内膳殿江　兵十郎様より御見廻候而被遣候、御同心人伊十院弥八郎殿、
一太刀一腰
一青銅百疋
右、右膳殿へ　兵十郎様より御見廻ニ而被遣候、御同心人右同人、
一肴一折ツヽ、
右、嶋津仁十郎殿・鎌田小藤次殿江従兵庫様、
一太刀一腰
一青銅百疋
右、伊十院権右衛門殿江兵十郎様より御使ニて被遣候、
一肴一折
一平樽一荷
一紗綾二巻
右、谷山角太夫殿へ　兵拾郎様より、
一肴一折ツヽ、
伊十院権右衛門殿
伊十院仲左衛門殿
伊十院弥八郎殿
里村藤太夫殿
小森新蔵殿

今井六右衛門殿　安藤伊左衛門殿
大脇正兵衛殿　桑原八右衛門殿
藤井才助殿　久保藤兵衛殿
兒玉源左衛門殿　石原渡右衛門殿

一青銅百疋　伊十院弥八郎殿　堀内慶賀殿
宅万慶宅殿

右、　龜千代様御元服以後、内膳殿・右膳殿へ御見廻之節、御同心有之ニ付、　龜千代様より被遣候、

一青銅百疋　柏原弥太右衛門殿　永田甚右衛門殿
稲田七左衛門殿
真川岩右衛門殿

一金子弐百疋　山口杢左衛門懐

右、　龜千代様御元服ニ付、　御支度何欵ニ付苦労有之候ニ付被遣候、

右、　奥方様御目録ニ而被遣候、

一青銅百疋ッヽ　川村慶智殿
杉山順悦殿
永田傳左衛門殿
石原佐次右衛門殿
小野真斎殿

一看一折

一手樽壱ッ　石原嘉右衛門殿

一青銅百疋ッヽ、　目録　稲留三阿弥殿
中村与卜殿

右之通、御使ニ而　兵庫様より被遣候、

一中紙弐束ッ、　御書院使坊主弐人へ

一青銅三百疋　御食焚　御末働　人足四人相中へ

右弐行、濱田伊左衛門より手紙を以持せ候、

一右外　二階堂舎人殿　町田八左衛門殿　尾上権六殿　二階堂傳八殿　川田與右衛門殿　弟子丸兵橘殿　三原吉次郎殿　二階堂拾郎兵衛殿　肱岡条右衛門殿　桂平六左衛門殿　石黒大阿弥殿　兒玉悦阿弥殿

右人数ハ御先番ニ而、何欤差引有之候故、従　兵庫様御口上計之御使、

〇二五一　曽木常太郎元服次第写（冊子）

（本文書ハ省略ス）

○二五二　蓮光院並島津兵庫書状写（冊子）

（表紙）

寶永元年申夏　近衛様江御使者ニ被差登せ候
一首尾ニ付
蓮光院ヨリ　兵庫様江之御状写
兵庫様ヨリ蓮光院江之御返書之写

1　蓮光院書状写

二月二日之尊翰忝拝見仕候、先以　貴公様并御奥方様・御子様方倍御勇健被成御座候由、目出度奉存候、
一前関白公御叉、新御殿江御移徙被遊候御祝儀、今度曽木新左衛門を以被仰上候間、於爰元萬端差圖可仕由被仰下、且又年頭之御祝儀被仰上候御披露状之写拝見仕候、成程御文言宜御座候ニ付、認直シ者及不申、其侭指上申候處、　御覧被遊、御丁寧之儀ニ被　思召候、将又小箱五御銘書之通御献上被成候、右同前ニ差上申候處、遠路被懸御心頭ニ、珎敷物品々御献上被成候段、一入御満悦不浅被　思召候、就中唐大筆二・唐筆立、別而珎器ニ而御座候ニ付、　左府公御所望被成、被進候處、随分御秘蔵被遊御事ニ御座候、　左府公御意之儀茂奉承知候、
一今度御献上被成候品々珎鋪被　思召候段、拙僧より能々相心得候而申上候様ニと、　前殿下仰ニ御座候、依之　御奉書壱通近藤筑後守殿名書ニ而被差越候、
一御夫婦様御詠草弐通御登せ被成候ニ付、　前関白公江御直ニ差上申候處、乍早晩御詠歌御褒美被遊候内、此度之御歌者一入御名歌茂有之候由、就夫者御夫婦様平生御信心御慈悲之御心入之様子、御詠歌ニ相頭し、殊勝ニ被　思召候、別而田浦之風景御善敷被　思召上候、此旨拙僧より可申達由御内々御沙汰ニ御座候、依之御夫婦様御詠草御添書被成候而被進候、且又去年御差上

被成候御歳旦之和歌弐通、備御覧置候處、今度御吟味
被成候而被進候間、此便差上申候、
一曽木新左衛門事、三月下旬大坂江上着ニ而御座候得共、
中將様御着之砌ニ而、拙僧大坂江参、其後茂御用ニ付
罷下候而、先月十八日上京仕、新左衛門被召上候段、
三御所様江御直ニ言上仕候處、御感悦被遊候、就夫御
尋被遊候ハ、新左衛門事如何様成家筋、代々何役相勤
申仁ニ而御座候哉と、　前殿下御意ニ而御座候得共、
由緒しかと存不申候ニ付、新左衛門江相尋申候処、委
細物語仕、系圖之写等私江見せ申候ニ付、右系圖　前
殿下備　上覧候處、宇治頼長公鹿流之系圖ニ候へハ、
無餘義家筋之由御沙汰ニ而御座候、
一早々御使者御請被遊筈ニ御座候處、関東表御指合之義
有之、少々御延引被成、同廿八日ニ新左衛門参上可仕
由被仰渡、伊集院主水同道仕、拙僧茂罷出取持仕候處、
前関白様　左大臣様　大納言様御前江被召出、貴公様
より之御口上御直ニ被聞召上、御口祝被下、次ニ新左
衛門自分之　御目見被仰付、持参太刀進上仕、　御前
向キ首尾能相済、御吸物・御酒被下、無残所仕合珎重
奉存候、
一前関白公より新左衛門　御目見相済候以後、　御意被
遊候者、先年新納仲左衛門事、御結納之御使者ニ罷登
首尾能相勤候、　貴公様御家柄ニ而御座候哉、此節新
左衛門被差上候處、実躰ニ相見得、神妙ニ相勤候由、
御褒美被遊候、
一去春拙僧罷上候節、袂百合草三　左大臣様江御献上被
成候ニ付、指上申候處、御満悦不浅被思召候、然共花
咲不申候、當年茂根朽不申候ハヽ、　禁裏様江御進上
可被遊由ニ御座候、京都之土ニ相應不仕候哉、度々消
申事ニ御座候、
一去春御献上被成候牛根石、硯ニ御用被成候而茂、殊外
堅ク御座候ニ付、御重寶ニ者成不申候得共、珎鋪硯石
之由　御意ニ而御座候、
一関白様より今度御薫物御調合被成、被進度被思召候得
共、唯今宜沈白檀無之候間、重而可被進旨、私より可
申上由御意ニ而御座候、

一侍従殿より茂堂上方御染筆之物被進筈之由承候、
一今度曽木新左衛門御使者ニ被召上候ニ付、諸事被入御念、肉食をも被下間敷由被仰付候旨、新左衛門より咄承候ニ付、其段　関白公江御咄申上候處、扨〻御正直成御事、弥御感心被遊候由　御意ニ而御座候、
一當月五日、御使者江御暇可被下由、　前殿下様より被仰出、新左衛門　御殿江伺公仕候處、御返答被　仰出、御料理・御茶迄拝領、其後以御使者新左衛門江時服拝領、段〻結構成御取持ニ而御座候、貴公様より之御使者故、右之通ニ御座候、
一左大臣様　大納言様より茂、當十一日新左衛門被召寄、御暇之　御目見被仰付、御料理・御茶迄被下、御返答被　仰出、御使者ニ而　左大臣公より茂御時服拝領、段〻結構成御取持ニ而御座候、先年嶋津伊豆殿より之使者北郷次兵衛御取持之様子とハ各別之事ニ而御座候、是又為御心得御内證申上候、
一拙僧事、來春迄在京被仰付候間、相應之御用等御座候ハ、可被仰下候、猶期後喜之時候、恐惶謹言、

五月十七日　　蓮光院　　頼英判

嶋武庫様
参尊報

2　島津兵庫書状写

五月十七日之芳翰致拝見候、先以其御地御静謐、貴僧様御堅康之旨、珎重之御事候、於拙者茂無別条罷有候、扨又　前関白公堀川之御所御移徙之御祝儀、　右大臣公左府御轉任之御祝儀為可申上差上使者候處、乍早晩此度茂萬端御丁寧ニ御取持故、首尾克及御披露、御奉書頂戴仕、難有仕合奉存候、右使者　三御所様江御目見、自分之太刀進上迄仕候、　両御所様より御染筆頂戴仕、其上以御使者御時服拝領之仕候、到拙者茂忝仕合御座候、殊曽木新左衛門　御目見仕候様子、神妙ニ被　思召上候旨御意候由、不浅儀ニ御座候、其上家筋をも御尋被遊候旨、是以冥加至極仕合奉存候、旁御存分御丁寧之御取持故御座候、将又詠草共差上置候處、被備
上覧、御添削被遊被下之候、殊田之浦之風景被為懸御心

被　仰出候趣、貴僧御取持と八乍存、難有奉存候、此節之歌別而宜様ニ　御意御座候旨蒙仰、満悦此事御座候、且又唐物共為可懸御目差上候處、一先　左大臣様御意ニ入、御所望被遊候旨、誠以寄特之仕合奉存候、去春献上仕候牛根硯石珍敷ハ被　思召上候得共、堅御座候而御用ニ不罷成之旨御尤奉存候、袂百合草之義花咲不申候哉、其御地之土地柄ニても可有御座候、若能成申候ハ、御進上ニ可被遊由、左候ハ、冥加之至可奉存候、

関白様御手合之御薫物拝領可被仰付与被　思召上候をも、只今宜沈白檀無御座候、重而可被成下旨奉承知、忝奉存候、従　侍従様堂上様方御染筆可致拝領与　御意御座候哉、是以忝仕合奉存候間、か様來春迄在京被　仰出候旨、乍御太儀御一首尾之儀、珎重御座候、其内御用事可申進旨、被為入御念蒙仰候、可頼存候、猶期後音之時候、恐惶謹言、

先可申進処、　中将様御病氣ニ付追々御左右御座候、尚月四日之御文ニ少御快然之様子とも承達申、満悦申候、弥押通御吉左右奉存事ニ御座候、将又近藤筑後守殿・今大路兵部太輔殿迄御礼状差上申候、右案文差登せ申候、御覧被成可給候、以上、

八月廿五日

蓮光院様